
ぺんにゃん

秋月あきら（ししゃもにゃん）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぺんにゃん

【Nコード】

N4093F

【作者名】

秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】

白銀の髪、緋色の瞳、猫の耳を持つ青年ミケ。そして、彼を悩ます不思議な能力。高機能ペンギンスーツに身を包んだ謎の少女ペン子！ミケをストーリーカーするパンダのきぐるみ少女パン子！さらに宇宙からやって来たイヌ耳を持つ暗黒騎士ポチ！そして、我らがパンダマンが今日もゆく！学園ドタバタコメディーな日々が続いていたある日、世界を一変させる出来事が……。
たぶん縦書きのほうが読みやすいです。

プロローグ

シュビュビュビュビュビュビュッ！

つてな感じで宇宙空間をぶっ飛ぶ宇宙船。

宇宙は真空だから、音が聞こえないという些細な問題は、この際どーでもイイツ！

言ってしまうえば音なんてものは特殊効果なのだ。

そう、キミたちが今から目にする歴史的瞬間を華麗に彩る演出なのだー！！

さあとくと見るがよい、薄暗い船内の人間っぽい感じのシルエツトを。これがなんだかキミたちにわかるか？

フフン、わからないだろうな。なぜって発電機が壊れて船内が暗いからだ。これではいったい彼らが何者なのかわかるまい。

知りたいか？

知りたくないと答えたそこのキミも段取りを考えて、知りたいと大声で叫びたまえ。

だが、教えん！

しかし、彼らの会話を聞けば多少のヒントにはなるだろう。

「騎士団長殿、あれが地球です」

謎の男の声が続いて、騎士団長と呼ばれた若い男の声が、

「あの惑星ではサルどもがのさばり、さらに報告によれば我らの同胞がその奴隷にされているらしいな。しかし心苦しいが、同胞を救い出すことが我々の目的ではない。目的はただひとり　ん？」

ガサガサ…ゴソゴソ…サササッ。

どこからか聞こえてきた背筋にゾクツとくる音。

騎士団長が叫ぶ！

「ギイヤアアアアアッ！」

モニターに映し出された地球に被っている黒い物体。

「スペースGだアアアッ！　　なななな、ちや、ちやんと出発前に

清掃のオバチャンを呼ばなかったのかっ！」

「だ、団長大変です！ 食料庫からスペースGの大群が溢れ出てきますー！」

「フギヤアアアアアアッ！！！」

奇声をあげた騎士団長は腰の大剣たいけんを抜き、ブンブン振り回した。

ドン、ガン、シャン！

見るも無惨に破壊された電子機器がスパークする。

今宵は祭りじゃ祭りじゃ！ と言わんばかりに狂喜乱舞する団長。

こつちもこつちで、団長を止めるのに必死で踊らされる仲間たち。しかし、とある仲間の発した一言で、この場は凍りつくのだった。

「……あ、墜ちます」

宇宙船が大気圏にダイビング。

オチだけに墜ちるとは、なんとも恐ろしき。

キミたちは歴史的な瞬間を見たのだ。

そう、Gは宇宙共通で怖い。

「つぎやああああ〜〜〜」

第1話「ネコはペンギンのストーカー」

ゴゴゴゴゴオオオオツ!!

視界を覆う乳白色のスモーク。そこに浮かぶ謎のシルエット。まるでそれはまん丸太った大福餅。

い、いつたいコレは!?

スモークの中から黄色くとんがったなにかが飛び出した。これはクチバシだ。

もしや、まん丸太った体に黄色いクチバシ 巨大ペンギンだア
アアアツ!!

なんたることだ、しかも口の中から少女の顔が覗いている。
喰われたのかツ!?

まさかこの巨大ペンギンは可憐な乙女を丸呑みにして、今この瞬間にも消化液でドロドロにしようとしているのか。だとしたら、なんと恐ろしき凶悪ペンギン!

そして、恐怖に怯えた少女が叫んだ。

「きゃーっ 痴漢!」

……は?

今なんとおっしやった?

などという間にも謎の人影が逃げていく 鈴の音を鳴らしなが

ら。

一体全体なにがなんだかさっぱりわからん。

さぞキミたちもこの展開に置き去りを食らっていることだろう。

しかし、一番ぼか〜んとしてしまっているのは、窓枠の中にいる少女だった。

「……鈴の音?」

そう犯人は鈴の音を残して逃走した。

黄金の鈴を首につけ、ニットキャップを目深に被った細身の影は、スカートを捲し上げながら必死こいて逃げた。

やがて逃亡者は廊下に誰もいないことを確認して胸をなで下ろし、
「まさか風呂場でもスキを見せないなんて……」

か細い声で呟きながら、額の冷や汗を手の甲で拭った。

今まで陰になっていた顔が月明かりを浴び、ほのかな輝きを放った。それは月華のせいだろうか、帽子から覗く黒髪とコントラストになっている肌の色。その肌は異様なまでに白く透き通っており、妖しくも目を惹きつける。

「早く尾行を続けないと……一瞬たりともアイツから目を離しちゃうダメだ。どこまでもひつこく追い回してやるぞ」

セリフをストレートに解釈するなら、どう考えてもストーカーだ。ストーカーは口元を歪ませながら、回想に浸ったりしてみた。

そう、あれは寒い冬の日のことだった。

凍結した道路を腹滑り（トボガン）でツイイーツと巨大ペンギンが横切った。

それだけだ！

しかし想像してみたまえ、たとえそれだけであっても、巨大なペンギンが道路を、しかも車よりも速く移動していたら、驚くのが普通だろうッ！

ストーカーはその後、巨大ペンギンと再び、三度と偶然遭遇することになった。

そして、兎にも角にもストーカーになることを決意したのだッ！

さて、そろそろ痴漢のほとぼりも冷めたかもしれない。ストーカーは夜に紛れて行動を開始した。抜き足差し足忍び足、ついでに猫足で、そろりそろりとターゲットの部屋に近づく。

ここはトキワ学園の学生寮の外だ。先ほどは窓から風呂場の中を覗いたら、あんな結果になってしまった。

学生寮には旧館と新館があり、家賃の安い旧館は風呂が共有なのだ。さつきペンギンがいたのは旧館の風呂である。

ストーカーはベランダのフェンスをよじ登ろうと必死だった。まるで断崖絶壁に命綱なしで挑むがごとく、歯を食いしばる形相が必

死すぎる。身の丈ほどもないのにだ。

どーにかストーカーはフェンスを越えた。肩で息を切って鈴を鳴らしている。

「死ぬ……体力が……」

しかし、ここで休んでいるヒマはないのだ。

ベランダの窓に手を掛けた。開いている。ここから不法侵入できそうだ。

部屋の中に入ってすぐに気配を探る。静かなものだ。まだ住人は帰ってきていないと見える。そう、この部屋に住んでいるのがあのペンギンなのだ。

共有風呂から個人の部屋までは物理的な距離が生じる。

今がチャンスなのだ！

ストーカーはさっそく物色をはじめた。

これと言って特に変わった物は見当たらない。

それ以前に部屋が質素すぎて物が少ない。ペンギンなのに小魚の一匹も落ちていないのだ。

洗濯物だろうか、タオルが折りたたんで積んである。その上にあった変わった物が！

紺色の謎の物体。

とりあえずストーカーは鼻を近づけて、ニオイをクンクン嗅いだ。それはもう入念に嗅いでみた。イヤってほどひたすら嗅いだ。

洗剤のニオイしかないようだ。

ストーカーはそれを手で広げて見た。ついでに伸ばしてみた。名前を記入する白地の部分がある。

『2年2組 ペンギン』

スクール水着だったのかッ！

「あいつ……本当にペンギンなのか？」

ピキーン！

気配だ。ストーカーは野性的な勘で危険を察知して、ベッドの下に潜り込んだ。すぐに部屋のドアが開く。

「ふう〜、イイお湯だったべん」

折りたたんだタオルを頭に乗せたペンギンが部屋に入ってきた。

そのままドスンとベッドにダイビング！

ストーカーは思わず声を漏らしそうになった。

ベッドがギシギシ音を鳴らす。

心臓バグバグのストーカー。身動き一つできない。したら完全にアウトだ。

だって鈴が鳴るからな！

体に鈴をつけながらストーカーをするなど、普通に考えたらおバカさんである。

ストーカーは自分の上でなにが起こってもわからない。

「(……出るに出られない。こんな近くにいるのに、きぐるみを脱いでもわからないじゃないか。絶対にあれにヒミツがあるに決まってるんだ)」

そうなのだ、巨大ペンギンが少女を丸呑みしたのではなく、顔だけ出るタイプのきぐるみだったりするのだ。

しかし、ストーカーのいうヒミツとは？

やがて部屋の電気が消えて、もうしばらくすると静かな寝息が聞こえてきた。

ゆっくりと這い出すストーカー。鈴を手で押さえながら、心臓の止まる思いでベッドの下から脱出した。

ベッドの上ではペンギンが腹を突き出して横たわっている。

寝るときも脱がない。風呂でも脱がない。どこで脱ぐというのだ？

まさか脱がないということはあるまいな？

もしも本当に脱がないのならば、脱がせるしかあるまい。

脱がぬなら、脱がしてしまえ、若者よ。

青春の名の下に汝の行動を許そう！

ストーカーはペンギンにゆっく〜っりと指先を伸ばした。

ピキーン！

気配だ。

手汗をかきながらストーカーは全身を硬直させた。
なんの気配だ？

ペンギンではなくベランダのほうからしたぞ？
ストーカーは全神経を集中させて耳を澄ませた。

「（気のせいだったのか？）」

しかしそれは気づけぬだけだった。このときベランダには謎の人影が　さらにその影を監視する影がいろいろとは、誰が予想しただろうか！？

まあ、予想する余地もないことを予想できたら、ただのエスパーだが。

再びストーカーがペンギンの寝込みを襲おうとした、まさにそのとき！

「ダメっっ！」

窓が開きパンダが飛び込んできた！？

新たな侵入者の乱入にストーカーは慌てたが、考えるよりも早くパンダに飛びかかり、そのままベランダまで押し飛ばし、さらに押し倒した。

パンダに馬乗りになったストーカー。

よく見ると、このパンダもまたきぐるみであった。

やっぱり顔だけ出るタイプで、やっぱり少女。

流行りなのかッ！

無言で見つめ合う二人。

いつの間にかストーカーの帽子は床に落ちてしまっていた。

そして、露わになったネ・コ・ミ・ミ！！

なんとあるまじき、ストーカーの頭にはネコのような耳が生えていた。

しかも、カチューシャなどの作り物ではない、本物の耳だッ！

パンダがほつぺを桜色に染めてニヤニヤした。

「いつ見てもミケ様のお耳は愛くるしくて、胸がときめいちゃう！

（あゝ萌えるっ）」

「ニヤニヤするなパン子。オレはそういう目で見られるのがキライなんだ」

冷たい口調でミケは言い放ち、何事もなかったように立ち上がった。

パン子と呼ばれた少女も立ち上がり、体をクネらすようにモジモジさせた。

「でもアタシ、ネコミミのミケ様がスキなの！（アタシにはこの人しかないんだもん。ネコミミの人がこの世にいるなんて、絶対にアタシと結ばれる運命！」

「……変な妄想してないだろうな？」

「モーソーは生きる糧なの、このサバイバル人生を生き抜くための知恵！（今日だって一杯のごはんをどうやって美味しく食べようとモーソーして、ミケ様のおんなお姿やこんなお姿を、さらには二人で【自主規制】を想像しながら、一粒一粒噛みしめて食べました！）……あれ、ミケ様お顔色がすぐれませんがどうかしました？」

「……いや、別に」

おそらく、強烈すぎるパン子のモーソーが、ミケの脳内まで届いて汚染されそうになったのだろう。

頭を抱えながらミケは遠く彼方を指さした。

「さっさと帰れ」

「ミケ様ひどい……そんな心にもないことを！」

「心にあるから言ってるんだよ。人につきまとわれたりするのキライなんだよ」

「ストーリーカーがなにを言う？」

「アタシはいつでもミケ様のお側にいますから！」

「こっちもストーリーカーだった。」

「オレは人間そのものがキライなんだよ。この耳のせいでオレがどんな目に遭ってきたと思ってるんだよ！」

「それでもアタシは傍にいます！」

「口でならなんとでも言える。人は裏切るものなんだ」

「アタシは違います（だってアタシ無類のネコ好きだし）。ミケ様のことがスキでスキで、たとえ女装好きの変態だったとしても、それでもスキですから！（むしろ萌え要素、うふっ）」
「女装は好きでやってんじゃねーよ！（ただ、こっちのほうが落ち着くから）」

……だつてさ

なかなか意表を突く展開が繰り広げられている。ここで一度、キミたちは状況を整理してみるのがよからう。物語は勝手に進ませてもらうがな！

突然、パン子が部屋の中に飛び込んだ。そして、隠して持っていた油性ペンをペンギンの顔に突きつけようとしたのだ！

ツンと鼻にくるペン先があと数ミリというところで、ミケがパン子の体を取り押さえていた。

「アホだろおまえ！」

「このペンギンさえいなければ、このペンギンさえ！」

二人が暴れていると、ペンギンの中にいる少女が眠たそうな顔をして、おききなあくびをした。

「ふわあ〜、よく寝た」

そして、数秒の間を置いてから、その場にミケとパン子がいることに気づいたらしく、

「あ、おはようございます、山田さんに綾織あやしきさん」

まずは人が自分の部屋にいることに驚かんかッ！

ぼお〜けえ〜つとするペンギンとは対照的に、パン子は感情を爆発させた。

「アンタなんか大ツキライなんだから！」

と、いきなり叫んだかと思うと、大粒の涙を流しながらパン子は逃走してしまった。

まるで嵐のような吹きっぱなし、ぶち壊しっぱなしだ。

「ほえ？」

なにを言われたか理解してないように、ペンギンはきよとんとし

ていた。

逃げる機会を完全に失ったミケは戸惑った。

言い訳をしたほうがいいのか、それともあえて言い訳しないで、何事もなかったかのごとく立ち去るべきか。

「じゃ、オレ帰るから」

「はい、さよならあゝ」

あっさりとペンギンはミケの背中を手を振って、送り出すのかと思われたのだが。

「あ、ところでなんでヒナの部屋にいるのですか？」

聞かれたくない質問ナンバー1（ワン）！

このままスルーできるほどミケの度胸は据わってなかった。ゆっくりと振り返り、

「別にペン子には関係ないだろ」

質問の答えになつてない！

ミケピンチ！

ストーカーしてたなんて口が裂けても言えない。

しかし、ピンチはすぐに消えた。

「別になにもないならそれで納得です」

えっ、納得しちゃうの？

が、ペン子の話はまだ続くのだった。

「それよりも山田さんが泣いてましたけど、女の子を泣かせるのは良くないことだと思います。早く追いかけてあげてください」

「（オレのせい！？）別に泣かせとけばいいだろ、オレには関係ない」

関係ない。それは人との距離を置く言葉。

ペン子はミケに笑顔を投げかけた。

「泣いてるより笑ってるほうがいいに決まっています。みんなが笑顔になれば、きっと世界は今よりずっとキラキラになると思っています」

「笑顔の陰には絶対に泣いてるヤツがいるんだよ。理想は理想でし

かない」

「そんなことないですよ。信じればきっと誰でも幸せになれるのです」

「……………（なれるわけないだろ）」

正反対の主張は決してわかり合えない。ミケはそれをかたくなに信じ口をつぐんだ。

ミケはペン子に背を向けた。心すらも背を向けた瞬間だった。

「気分が悪いから帰る」

ベランダから出て行くこととするミケにペン子が、

「土足ですよ？」

今さら！？

てか、そこ！？

しかし、やはりペン子には別に言いたいことがあった。

「気分が悪いなら休んでいきませんか？」

天然！？

ミケの言葉の意味を理解していないのだろうか。

あえてミケはなにも言わず、無視して外に出ようとした。

だが、その足がペン子の声によって止まった。

「ヒナは思っています。ひとを癒せるぺんぎんになれたなあって」

「……………せいぜいがんばれよ」

「はい、がんばります！」

ミケは皮肉のつもりだったが、元氣よく返されてしまった。

なんだかミケは心がモヤモヤする気分になった。

「（こいつのことがわからない。それが不安で仕方ない……………でも）」

ミケはうつむいたあと、静かに顔を上げて遠くの景色を 光ッ

！？

瞬時にミケはペン子を押し倒した。

「危ない！」

ビビビビビビッ！

倒れた二人の真上を光線が掠め、壁には巨大な穴が開いた。

ミケが叫ぶ。

「なんだよ今の！（光線銃？ んなもんでなんで狙われなきゃいけないんだよ！？）」

攻撃は外からだったが、第三者の気配はすでに部屋の中にあった。頭がでかくて体が細いシルエツト。それはまるでよくテレビなんかで見る宇宙人の典型。グレイそっくりのシルエツトだった。

しかも！

そのグレイ（仮称）は、手にスクール水着を持ってやがったッ！！ペン子が悲鳴をあげる。

「痴漢！」

逃走するグレイ。ご丁寧に玄関から逃走を図る。

すぐさまミケはあとを追って寮を出た。

そして、十メートルもしないとこで力尽きた。

「ゼーハーゼーハーっ（ダメだ、体力がもたん）」

すぐにペン子が追いついた。

「大丈夫ですか綾織さん？」

「オレにかまうなよ（生まれつき体力ねえーんだよ）」

すでにグレイの影も気配もない。逃げられたのか？

ミケは腑に落ちなかった。

「たかがスク水を盗むためだけに光線銃なんか使うか？」

「たかがではなーい！」

マニアにとつてはスク水とは神器に等しいことを知らんのか！

相手が本物のグレイだと仮定するならば、異星人の思考や行動など、到底理解しがたいものだという可能性もある。

ペン子は少し肩を落としていた。

「とっても大事なスクール水着だったのです。でも盗まれてしまったものは仕方ありませんよね！」

すぐ元気になった。立ち直りの切り替えが早い。

真っ先にミケが気づいた。

「……ん？ いた！」

そこにあるシルエツト。頭がでかくて体が細い、間違いないグレイ(仮称)だ!

ビビビビビビッ!

また謎の光線だ!

エビ反りになったミケの腹の上を光線が抜け、さらにペン子のもつちりした腹に直撃した。

ペン子は驚いたように瞳を丸くする。

「綾織さん体やわらかいんですね!」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ(人より体がやわらかいのは事実だけど)。そんなことより腹が焦げてるぞ?」

「がペーン!」

しかし、さらに驚愕していたのは謎の敵だった。

「なぜだ!? ビームの直撃を食らって平気とは……この星の科学力を甘く見ていた」

たしかに『この星』と言った。ということは、やっぱり宇宙人だ! ミケは思った。

「(ただのきぐるみだろ。つーことは、あのビームはこけおどしなのか?)」

ミケは失念していた。

光線が当たった壁に巨大な穴が開いていたことをツ! 突撃するミケ!

光線が発射……発射……はっ……しゃ……しない!

カチカチという虚しい音が鳴り響いた。

光線銃の引き金トリガーに掛けた指が何度も引かれるが、反応がない。

ミケの全力パンチがグレイの顔面に……決まらない!

あと目と鼻の先というところでミケの体力は尽きて、なんと足がもつれて転倒!

月明かりを浴びて輝くグレイの頭部。その姿はグレイよりも人間に近く、デカイと思っていた頭はどうやらフルフェイスのヘルメツトらしい。『この星』発言がなければ、バイク乗り(ライダー)に

間違えそうだ。

ピンチからチャンスに変わったグレイ？は、ミケに襲いかかるうとした。

「銃などなくとも、我ら騎士団の誇りに懸けてこの剣で……剣が、剣を忘れた！（騎士が剣を忘れたなんて団長に知られたら、おしおきされる！）」

おつかれさまです。

そして、逃走を図ろうとするグレイ？。

「今日は小手調べに過ぎん。次は騎士団長がじきじきに手を下すだろう！」

逃げるグレイ？のお尻にはフリフリする謎の物体がついていた。

だが、今はそんなことより、グレイを追わなくては。

ミケは立ち上がりグレイに手を伸ばす。

「待て！」

「待てと言われて待つ奴がいるかッ！ ……あっ？」

ジャボーン！

水しぶきを上げならグレイ？が川に落ちた。

「ぎゃああああ〜」

かわいそうに泳げないらしい。

「そっちには川があると聞いたかったんだ」

ミケは呟いた。

海の近くの川なので、運が悪ければそのまま潮の流れに乗って、

もう二度と……。

ちゅん。

ご愁傷様だね

一部始終を見ていたペン子は肩を落とした。

「ヒナの水着……」

そして、ミケも沈痛な面持ちで、

「たかがスク水のためにあそこまで……」

たかがではない！

いっしょして長い夜は更けていったのだった。

第2話「妄想と暴走は似て非なるものですから」

ざわざわ……ざわざわ……

トキワ学園は今日も明るく楽しい喧噪に包まれていた。

「ねえねえ、ミケくんはどう思う?」

隣の席の女子に話しかけられ、ミケはブイッと顔を背けた。

「別に……」

「かわいい〜!」

「(なんでカワイイになるんだよ)」

そうは思いながら、頬は少し赤らんでおり、まんざらでもないようすだった。

さらにほかの女子が駆け寄ってきた。

「綾織くん、いつしよにお弁当食べよ?」

その言葉にミケは目を丸くして、心に温かい感情が過ぎったような気がしたが、

「ひとりが好きなんだよ(この学校のやつらはどいつもこいつも)」

ミケは急に席を立ち、怒ったようすで教室をあとにしようとした。

その後ろでは女子たちの楽しそうな声が聞こえた。

「きまぐれなネコみたいでカワイイ〜!」

そして、ミケはさらに機嫌を悪くした。

ミケは廊下に出てすぐニットキャップは深く被り直した。

女子の制服を着て歩くミケの姿は、背もあまり高くなく細身で、可愛いと言われるだけのこともあって、見た目だけは女の子そのものである。

はじめのうちは学園でも女子生徒だと思われていたが、クラスメイトにはすでに男だとバレ、ほかの生徒たちにも広まりつつあった。ミケはひとりになれる場所を探した。その途中で好意的な声をかけられたが、ミケはすべてシカトした。

人を近づけないようにしているのは明らかで、その要因はミケが

抱えるいくつかの秘密にある。

気の向くままに屋上までやってきたが、ここにも人がいる。けれど、少し歩き疲れたこともあって、ミケはここで少し休むことにした。

フェンスに両腕を乗せて景色を眺めると、青い空と海が広がっていた。

潮の匂いがそよ風に乗ってここまでやってくる。

そう、ミケもまるで潮の流れに乗るように、この学園へ流れ流れてやってきたのだ。

「（今まで転校した学校とはなにか違う。でもまだそんなに経ったわけじゃない。人はいつか裏切る……それは時間の問題なんだ）」
なぜそこまでミケは自分を閉ざそうとするのか？

ひとを拒むのだろうか？

ミケは自らのあばらを強く押してみた。

「……っ」

片目をつぶり、少し痛そうな表情をしたミケ。

「（もうだいたい時間が経つのに。前の学校ではだいぶやられたもんな）」

強い風が吹いた。

舞い上がるミケの帽子。

慌ててすぐに拾って被り直したが、近くにいた女子生徒に見られてしまった。

「あれが噂の彼じゃない？（本当にネコミミなんだ、かわいい）」

「ほんとだ、どっからどーみても美少女っ（いいなあ、わたしもあんな風に可愛くなりたいたい）」

ミケは二人の女子生徒の元へ不機嫌そうな顔で近づいた。

「頭に動物の耳なんか生えたヤツなんて人間じゃないし気持ち悪いだろ！」

怒りをぶつけ、それ相応の反応をされると思ったミケだが、予想はあっさりと覆されてしまった。

「別にいゝ。ねえ、だってこの学校にはトイレに住み着いてる幽霊とかもいるしね？」

顔を向けられ同意を求められた友達も、

「鈴鳴先生すずなりとか魔界からやってきた悪魔だって自分で言ってるもんね？」

「ほら、パンダとかペンギンもうちにはいるし」

この学園には変わり者が多いのも事実だ。

そして、そのペンギンとの出会いがミケに運命を変えることになるかもしれない。

そう、あれは寒さのまだ残る春先の日のことだった。

駅前にできた人だかりの中心で、フォークギターを片手に歌っていた巨大ペンギン。

ペン子だった！

決して歌はうまくなかったが、ペンギンがとにかく好きなんだなということとは伝わる歌だった。

『ペンギン ペンギン』と連呼する前奏かと思ったら、始終それが続いた。ペンギン好きでなければ歌えまい。

啞然とするミケであったが、事態は一転することになってしまった。

人混みに押されてミケの帽子が取れてしまったのだ。

ざわめき立つ人々。

はじめのうちには本物だとは思わなかった人々も、その耳が本物だとわかると口々に言いはじめたのだ。

人間じゃない。

みな奇異な目でミケを見た。

ミケから距離を置こうとする者。またミケに近づこうとする者。

雪崩のような声がミケの心の中に次々と飛び込んできた。

怪物、妖怪、気持ち悪い。

キモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイ

イキモイキモイ……

「うるさい！」

ミケは耳を隠し、頭を抱えながら逃げた。
なり振り構わず人間たちから逃げた。

誰もいない場所まで逃げた。

ミケは誰も信じない。

トキワ学園の生ぬるい環境に浸かりそうになっていて自分を否定する。

誘惑に負けて人を信じようと思っても、次の瞬間に裏切られることだってある。

この学園にどんな変わった奴らがいようと、自分が普通の人間になれるわけがない。

外に出ればやはり異形。

屋上から飛び出したミケだったが、行く場所がなくなってしまうた。

「（午後の授業ふけようかな）」

下駄箱までやって来てクツを取り出そうとすると、中にチラシが入っていることに気づいた。

「（お一人様1個限り……ってスーパーの安売りのチラシ。嫌がらせか？）」

自分の下駄箱をゴミ箱にされたのかと思ったが、チラシの裏に手紙らしき文章が手書きで書かれていた。

アナタのことをいつもかげから見えます。殺してしまいたい。

どう見ても脅迫文です。ごちそうさま、お腹いっぱいです。

さらに手紙にはPSと書かれていた。

今日のおべん当はおいしかったですか？

ミケは今朝の出来事を思い出した。下駄箱を開けると、プラスチック容器　いわゆる　ツパー入った黒コゲの物体Xがあった。見なかったことにして捨てた。

「（……またイジメか）」

ミケは深いため息を吐き捨てた。

そこへパンダのきぐるみが駆け寄ってきた。

「ミケ様っ！」

「顔を見せるな」

冷たい一撃が炸裂。

グサツとパン子の胸に刺さったが、一秒もしないで立ち直る。

「ミケ様つてばDSなんですからあ」

「おまえに対してな」

「それってアタシが特別つてことですか？」

「特別にキライだ」

グサツ！

さすがにダイレクトに“キライ”は堪えたようだ。パン子は床に両手をついてうなだれた。

「……グスン（でも負けない。アタシは一途にミケ様を思い続けるの、そういうところが自分でもカワイイと思う。大丈夫、ミケ様とアタシは結ばれる運命だから！）」

そして、立ち直ったパン子は大声で叫ぶ。

「大好きです！」

ミケは厭そつな表情をしたまま尋ねる。

「なんでそこまでオレのこと好きなんだよ。オレのことなんてなにも知らないだろ？」

「ええつと、ネコミミが好き。それにみんなも知つての通り、アタシつて動物園の娘じゃないですかー？」

「知らねーよ」

「将来有望な園長だし、実はイヌよりネコ派だし、はじめてそのネコミミを見たとき、トキメキの出会いを感じちゃったりなんかしてー（それでこれはストーキングするしかないと）」

話の途中でミケはすでにこの場を離れていた。

慌ててミケの背中を追うパン子。

「ミケ様待つて！ そうだ、アタシの作ったお弁当おいしかったで

すかー？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

ペン子の言葉を聞いたミケは鬼の形相で引き返してきた。

「キサマかつ！」

「ハイ、アタシです！」

元気な返事で認めた！

「まさかチラシの裏に書いた手紙もキサマか？」

「ごめんなさい。カワイイ使せんとかなくて、チラシの裏に書いちゃいましたー」

「謝るところそこじゃないだろッ！」

ミケはチラシをパン子に突きつけて、その一文を指さした。

「殺したいってなんだよ、殺したいって！」

「それは“殺しちゃいたいくらい愛してます”の略だったり」

「略すなよ！ バカじゃねーの！ オレのことからかって楽しいかよー！」

怒鳴るミケを前にして、パン子は瞳に涙を溜めていた。

「……からかってると思ってるの？（こんなに好きなのにどうして）

。アタシが心からミケ様が好きだってこと伝わらないの？」

「……………」

ミケは黙ってしまった。

そして、心の中で、

「（……伝わってるよ。でもそれすらもオレは信じられない）」

ついにパン子の瞳から涙がこぼれ落ちた。

「好きです……ミケ様のこと」

パン子はミケに触れようと手を伸ばしたが、無情にもその手は振り払われた。

「触るな！」

「ッ！？」

手を振り払われたとき、ミケの爪によって手の甲が傷ついた。滲み出す悲しい血。

「うつつ、うぐ……うわああん！」

ついにパン子は大泣きして、この場から逃げだそうとした。だが、前を見ずに走ろうとしたパン子は、なにかにぶつかってはじき飛ばされて、さらに尻餅までついてしまった。

パン子が目をこすりながら見上げると、そこにはまん丸のペンギンが。

「アンタなんか大ツキライなんだから！」

再び泣きながらパン子は姿を消してしまった。

ぽか〜ん。

目を丸くして首を傾げるペン子。実際には首だけではなく、体ごと傾げているが。

ペン子はミケに見つめられていることに気づいてニッコリした。

「どうかしましたか？」

「おまえのことがよくわからない」

突然の言葉でペン子は少し考えてしまったようだが、やがて静かに口を開いた。

「ヒナのことだけではなくて、山田さんのことも、ほかの人のこともあまりよくわからないのではないですか？」

「ほかの奴のことはわかるよ（わからないのはおまえだけだ。どうしてなんだ？）」

「だったらなぜ山田さんのことを泣かせるのですか？」

なぜ？

ひとときの間、ミケは考えた。

しかし答えは見つからなかった。

泣かせるつもりはなかった。けれどパン子は泣いて去っていった。そしてミケはひらめいた。

「（興味を持ちたくないんだ、きっと。でもペン子には興味がある。ペン子のことがかかったところで、やっぱりほかのやつらと同じだったら失望するだけじゃないのか。オレはペン子にいったいなにを求めているんだ？）」

なぜミケはペン子に興味を持っているのか？

ピンポンパンポーン

校内放送が流れる。

《至急ペンちゃんアタクシの研究室に来てちょうだあーい》

校内では無駄とも思えるセクシーな女性の声だった。

《ついでだから綾織も来い》

「オレまで？（しかもオレのときだけ命令口調）」

呼び出される理由がわからなかった。

放送の主は名乗らなかつたが、声で誰だかすぐにわかる。ミケと

ペン子の担任の鈴鳴ベルだ。

だが問題は。

「研究室つてどこだよ。そもそもなんでそんな部屋があるんだよ」

「ヒナといっしょに行きませんか？」

「いっしょに行かない理由もないしな」

「はい！」

元気にペン子は返事をして笑った。

トキワ学園の地下になぜかある個人の研究室。

部屋は頑丈そうな金属できており、足の踏み場もないほど、謎の機器たちで散乱している。

どうやら呼び出しておいて本人はここにいないらしい。

「ベルさん！」

ペン子が呼びかけると部屋の奥のドアが開き、中から白衣を着たブロンド女が苦しそうな顔をして出てきた。

「うつつ」

腹を押さえて今にも死にそうだ。

ペン子はすぐに駆け寄った。

「大丈夫ですかベルさん？」

「うん……ここ出不い」

「ほえ？」

「便秘に効くって薬草をもらったから飲んでみたんだけど、出ないのよおん！」

お食事中的みなさま、便秘ネタでごめんね。

ベルは爆乳の谷間からタバコの箱とジッポーを出すと、生徒の前で平然とタバコを吸いはじめた。そして、イスに座り紅いタイトスカートから覗くムチムチの脚を組んだ。

「で、アンタらなんでここにいるの？」

「アンタが呼び出したんだろ（こいつ教師失格だろ）」

ミケはかなり不機嫌そうだ。

真顔でベルはミケの瞳を見つめた。

「で、綾織どうなの学校生活は？」

「なんだよいきなり。別にアンタに関係ないだろ」

「関係あるわよ」

「なんでだよ、担任だからかよ？」

「違うわよ、青春が好きだからよおん！」

「はあ!？」

ミケの理解を超えていた。

「アナタ転校ばかりしてるんですって？ アタクシもいろんな問題を起こして（学校渡り歩いてるけど、新しい環境に戸惑ったりするものよね。でもね……それが青春なのよおん!）」

「だからなんだよ？」

「生活態度がよくないって聞いてるわよ。せめてその帽子取ったらどう？」

「オレのこと晒し者にする気かよ？」

ニットキャップの下にあるもの。

「耳のこと言ってるの？ そのくらいどうってことないわよ。だってアタクシなんて悪魔だし、しっぱだつて生えてるわよ？」

と言って、ベルはイスから立ち上がると、スカートの中から伸びている細長いしっぱを見せた。ウナギのようによくによくよしながら、三角に尖った先端がミケの鼻先に突きつけられた。

「本当に悪魔なのかよ（つーかいつもはしつぽなんか生えてなかっただろ。隠してただけなのか、それとも騙されてるのか？）」「

ここでベルは失念していたことを唐突に思い出した。

「そうだ、ペンちゃんのPENGUIN スニーカー SUIIの整備してあげるんだっただわ。もおペンちゃんったら、もつと会話に割り込んで自己主張していいのよおん？」

さつそくPENGUIN SUIIこと、ペンギンのきぐるみの状態を見はじめるベル。

「はい、ペンちゃん右手あげて、左あげて、右下げないで右上げるよしつ異常なし。ビームで撃たれたって聞いたけど、アタクシの発明品に傷つけようなんて一万光年早いわ。焦げて見たのもただの煤ね。現に洗ったらすぐ落ちたでしょう？」

「はい」

ペン子が返事をした次の瞬間、ピキーンと気配がした。

「（ペンギンのきぐるみはベル先生の発明品だったんだ）いいなあ、アタシにもパンダのきぐるみ作ってくださいよあ〜」

物陰からこちらを見ているパン子だった。ミケとパン子が二人同時に呼び出されたと知って、居ても立ってもいられずストーカーしにきたのだ。

ベルはパン子の目の前で手のひらを返した。

「一〇〇億円くらいくれたら作ってあげてもいいわよ」

「……アタシが貧乏人だからってバカにして！ うわあ〜ん！」
また泣き出してしまった。

「（でもアタシ負けない。だってこのパンダのきぐるみは、お父さんが汗鼻水垂らして夜なべして作ってくれた大切なきぐるみなんだもん！）」

パン子ががんばれ！

しかし、そんな大切っぽい思い出も、ベルの一言で吹き飛んでしまった。

「女の子に泣かれたら作ってあげないわけにはいかないわね、三分

くらい待ってなさい（その辺にあるガラクタでテキトーに作つとけばいいかしらね）」

「本当ですか先生！ もうこんな臭くて汚いきぐるみなんて必要なくなるんですね！」

おい、大切じゃなかったのか？

そんなわけで三分後。

本当に三分で作ってしまったが、前のきぐるみと見た目は変わっていない。

さっそくパン子は新しいきぐるみに着替えたのだが……。

パンダ暴走！！

なんたることだ、着た瞬間にいきなりパンダのきぐるみが暴走しはじめたのだ。

部屋に嵐が起こったように、発明品が次々と宙を舞い、火花を散らし、ベルはお腹を押さえて、

「うんこ出そう」

と言った！

これからもっとひどいことが起きそうだというのに、ベルは現状を放置してさっさとトイレに駆け込んでしまった。

そして、パンダが空を飛んだ。

が、天井にぶつかりそうになってパン子が叫ぶ。

「死ぬーッ！」

そのまま天井をぶち破ってどこかに飛んでいってしまった。

開いた穴から空が見える。うん、今日もいい天気

……………。

あまりの展開のスピードにミケは呆然としてしまっていたが、事態の緊急性に気づいてパン子を追いかけた。

すぐに体力が尽きて倒れたけど！

ミケの体がふっと浮いた。ペン子が担ぎ上げたのだ。

「早く山田さんを助けなきゃ！」

「オレのこと置いてさっさと行けよ」

しかしミケとは段違いの体力を見せつけるペン子！

ミケを担いだまま全力疾走しても息一つ切らさなかった。

さらにスピードを出すためにミケを背中に乗せて腹滑り（トボガン）で移動した。

そう、ミケが巨大ペンギンをはじめて見たときと同じ、車より早^{はえ}ーッ！

ついにペン子に追いついたのは屋上だった。

ペン子の背中から降りたばかりで酔っているミケに、容赦ない暴走ペン子からの攻撃。ロケットパンチ！

突然の攻撃にミケは逃げる猶予もなかった。しかも当たったらかなり痛そうだった。

「クソッ！」

ミケがあきらめた瞬間、まん丸の影が立ちふさがった。

爆発によって硝煙が、強風が巻き起こり、ミケの身体は大きく後方に吹き飛ばされた。

ミケは地面に叩きつけられたが、すぐに立ち上がろうと前を見た。ペン子が身動きひとつせずに横たわっている。あるときミケをかばって身代わりになったのだ。

「オレのために……なんでだよ！」

歯を食いしばりながらミケは立ち上がるうとするが、身体がいうことを利かない。

ペン子の暴走は続いていた。

「ヤダ！　なんで？　体が勝手にっ、ミケ様避けて！」

ロケットパンチを撃とうとミケに照準を合わせている途中だった。ここで攻撃を食らったら……。

そのときだった、逆光を背に貯水タンクの上に立つ謎の影が見えた！

「パンダだけに白黒つけようじゃねーか。正義のヒーローパンダマン参上！」

シャキーン！

首に巻いた赤い布が風に靡いた。

無駄にカツコイイ、無駄にカツコイイのだが、いくつかの問題点を見つけてしまった。

ヒーローって割にはオッサンじゃねーか！（しかも青ヒゲにケツあご）

さらにパンダの被り物がシユールすぎる。

パン子と同じきぐるみかと思いきや、首から下はランニングシャツに股引に腹巻きに、スネ毛にサンダルというゴールデンコンビネーション！

い、いつたいなんだこの変態。パンダは？

ペン子が叫ぶ。

「お父さん、ふんどしなんて首に巻かないで！」

チユドーン！

発射されたロケットパンチをもろに食らったパンダマンは、そのままお星様になりましたとき。ちゃんちゃん

ものすごく無駄な時間を過ごした気がしたが、この時間こそが意味を持っていた。

ペン子がムクツと立ち上がった。

「転んだらそのまま眠くなって寝てたペーん」

大事な睡眠時間だった。

一眠りしたペン子が元気いっぱい出力全開。

「山田さん、本当にごめんなさい。でもこれしか思いつかなくて…」

…

「えっ？ なにする気？」

「眼からビーム！」

シユバババババーン！

ペンギンの目玉から破壊光線が発射された。

為す術もなく直撃を受けたパン子は大爆発。

凄まじき破壊力。

モクモク煙が視界を覆い尽くし、やがて風が吹くと人影が中から

現れた。

パン子だ！　パン子は無事だったのだ！

しかし……そこに立っていたのはボロボロの下着を着た半裸状態のパン子。

……………。

……………。

「やっぱりアンタなんか大ツキライ！」

パン子は泣きながら逃走してしまった。

「がペーン！」

ペン子はショックを受けたがすぐにパン子を追いかけた。

「待ってください山田さん！　本当にごめんなさいごめんなさい！」
「めんなさい！」

「アンタなんか、アンタなんか、大ツキライなんだからーッ！！」
「でも、ありがとう」

第3話「犬も歩けば棒も歩く」

ウワオオオオオオオオオン！

「ついに、ついに見つけたぞ……悪しき一族め！」

月明かりを浴びて壁に映ったヒト型のシルエット。

そこには獣の耳が生えていた。

今日も長い学校の授業が終わり、やっとの思いで下校時間。

学校嫌いな学生諸君の今日は、今からはじまるのだ！

放課後……それはトキメキ。

放課後……それは青春。

放課後……それはパン子ちゃんが息を吹き返すとき！

授業が苦手なパン子ちゃんは学校が終わると元気になります。

「ミケ様知ってますかー？ この町もついにUFOの観光地になったらしいですよ」

「なんだよUFOの観光地って？」

ミケは寮に向かう途中、いつものようにパン子につきまとわれていた。

「最近UFOがたくさん目撃されてるらしいですよー。それで町おこしの一環として市長がUFOを誘致したいとかって（でも、アタシが思うにUFOじゃなくてベル先生の発明だったりして）」

「それはありえるな。たしかにベル先生ならやりそうだ」

「あれ？ アタシ口に出してた？」

「出してたぞ……はつきりと口にな」

そう言ってからミケは急に早足になった。

「どうしたんですか急に？」

「別に」

「そんなクールなそぶりもネコみたいで好きですミケ様」

「ネコネコうるさいんだよ。言っとくけどな、しっぽだって生えて

ないんだからな！（あー腹立つ、この耳だつてネコじゃなくてイヌかもしれないだろ）」

二人が歩いていると、ちょうど前からペン子がやってきた。

「こんにちは山田さんに綾織さん」

今日も元気に明るく笑顔なペン子。

しかし、二人ともシカト。

不機嫌そうなミケとプイツとそっぽを向くとペン子。

それでもペン子は気にした風もなく笑顔で二人に話をはじめた。

「知ってますか？ この町にも宇宙人さんがきたそうです」

「知ってるし」

ペン子ちゃんトゲトゲしい。

それでもペン子はぼわ〜んとしたまま話を続ける。

「ぜひ宇宙人さんにもぺんぎんさんの良さを広めようと思います。そうしたらみんなきつと幸せになれるはずですよ。あの愛くるしい姿を前に争いごとなど起きるでしょうか。そうです、ぺんぎんさんとは平和の使者なのです。知ってますかみなさん？ むかしむかしはぺんぎんさんたちはお空を飛んでいたのですよ。今は事情があつて飛ぶことをやめてしまったみたいですけど、きつといつかはまたあの青いお空を飛ぶ日が来るのです。だからヒナたちは地球の環境を守り、大気汚染やオゾン層の破壊を食い止め、あの青い空と海を守らなくてはいけないのです。さらに……」

まだまだペン子の熱い話は続きそうだったが、すでにそこにはミケとペン子の姿はなかった。

「ただいまー！」

トタン屋根までペン子の声が響いた。

「……お帰りなさいおねーちゃん！」「……」

パンダのきぐるみを着たハモリ五人衆があられた！

年の離れたみんな五歳のパン子の弟たち。つまり五つ子ちゃんである。

パンダのきぐるみを着させられているその姿は、やっぱりちっちゃい子が着た方が可愛さを発揮することを思い知らされる。

パン子はバッグの中から次々とプラスチック容器を取り出し、ひとつひとつフタを開けながらちやぶ台の上に置いていった。

「今日もみんなからお弁当のおかず一品ずつもらってきたよ。しかもなんと今日はデザートもあるんだよ！」

「…………おお〜っ！」「…………」

瞳をキラキラさせながら見事にハモる弟たち。

パン子を取り出したのは……リンゴ8分の1欠け。

ひもじい、ひもじすぎる。

まさかリンゴを兄弟分に分けるのではあるまいな？

「じゃあ、五分分しようねー」

なんとあるまじき！

本気で分けおったわこの娘！

しかも、自分の分は抜かすという憎い演出。

そこへ帰ってきたパンダマン。

「今帰ッタゾー」

ブリキ人形のように歩くパンダマンは、そのままリンゴに手を伸ばした。

パクッ。

っ喰いやがった！

パン子激怒。

「このクソオヤジい！ 吐け、吐いて土下座して謝って校庭のグラウンドー〇〇周回ってワンと吠える！」

パン子はパンダマンの首を絞めながら激しく揺さぶった。パンダマンの頭に生えた謎の点灯するボール付きの触覚も揺れる。

「揺サブルナ娘ヨ。学校ノ裏山デ取ッテオキノ食材ヲ見ッケテ来タゾ」

ジャジャ〜ン！

っ取り出したのはいかにも毒々しいキノコ。

どう見ても毒キノコです。食べる前からごちそうさま。
パン子の瞳が輝いた。

「今夜は鍋ね！」

さっそくキノコを切り分けて、鍋で煮込みはじめた。ちなみにほかの食材は各種草っぽいものだ。

待ちきれなくなったパンダマンがキノコにハシを伸ばし、レツツつまみ食い！

パクツとな。

次の瞬間、パンダマンが急に踊り出した！？

しかもロボツトダンスだ。

「力、体ガ勝手ニ……助ケテクレ」

「もあゝふざけないでよ」

まったく相手にしないパン子。

だが、パンダマンは必死だった。

「体ニ電流ガ走ツタヨウニ痺レルルルル」

まさか毒キノコにあたったのかッ！

幻覚作用か、それとも痺れて踊っているように見えるのか、それとも？

あ、急にパンダマンが走り出した。

しかも、熱い鍋！今夜の晩ご飯を持ったまま逃走。

食べ物の恨みは怖い。特にこの家庭では怖い。

「クソオヤジ鍋持つてどこ行くんじゃボケッ！」

鬼の形相でパン子は飛び出して行った。

パン子と別れたあと、やっぱりペン子のこと気がなくなって、ミケは今日もストーカーをしていた。

普通の住宅街を歩くペン子。やっぱりきぐるみは脱がない。

しかもどうやら町の人気者。

「ペンちゃん今日も元気だね」

「ペンギンさんこんにちは！」

「よっ、ペンギン娘、元気にやってつか？」

などなど、至る所で声をかけられる。

しばらく歩いていけると、道路の真ん中で泣いている子供がいた。

「どうしたぺん？」

優しく声をかけたペン子。

しかし、子供は泣いたまま鼻をズルズル鳴らしている。

ペン子はどこからともなく棒付きキャンディを取り出し、それを子供にプレゼントすると、ようやく泣きやんでくれた。

どうやら話を聞くと迷子らしく、そのあとペン子は子供を連れて町中を歩き回り、やがて母親の元へ送り届けた。

その後も、困っているおばあさんを助けたり、見知らぬ青年の看病をしたり、オッサンに道案内をしてあげたり、交通事故に遭いそうになった子供を助けたり。

ミケはそのすべてを疑いの眼差しで見ている。

「（人前でいい顔してるだけなんだ、きつと）」

しかしそれは違った、

ペン子は裏路地の横を通り過ぎようとして、その足を不意に止めた。

路地には薄汚く、痩せ細った、見るからに弱っている野良犬がいた。

ゆっくりとペン子がイヌに近づこうとすると、威嚇するよういのだを鳴らしたが、すぐに力尽きてぐったりとしてしまった。

「ごめんね、いぬさんが食べられそうな食べ物はいかっか持っているの」

そう言って取り出したのは魚肉ソーセージだった。

「（なんでそんなもん持つてるんだよ）」

と、ミケは内心想いながらも、成り行きを静かに見守った。

魚肉ソーセージにがつつくイヌを見るペン子の眼差しは、まるで絵画に描かれた優しい聖母のようだった。

ペン子は人だけではなく、動物にも優しくかった。

しかしミケは無理に否定した。

「（偽善者なんだあいつ。そのうち絶対本性を現すに決まってる）」
しかし偽善者かどうかなど、本人がぼろを出さない限りは、人の心が読めなければわからないことだ。

ピキーン！

ミケはその本能から素早く気配を感じ取った。

パンダマン現る！

ミケは見てしまった。

「なんか生えてるーッ！」

パンダマンの頭に生えている謎の物体。

家族にすらその変化を気づいてもらえなかったのに。

「助ケテクレ、体ガ勝手ニ動クウウウウウ」

「しかもしゃべり方がカタコトーッ！」

それも家族の誰にも気づいてもらえなかったことだ。

叫んでしまったせいで、ミケの居場所がペン子にバレてしまった。

「ほよ、綾織さんこんにちは。こんなところで会うなんて偶然ですね。パンダマンさんもご一緒ですか？」

偶然ここにいたわけでもなければ、パンダマンとご一緒したくているわけではない。

暴走パンダマンがゆく 煮えたぎる鍋を持って。

危険過ぎる、そんな鍋凶器以外の何物でもないではないかッ！

しかも鍋を持ったパンダマンはペン子に突進していた。

「助ケテクレレレレレレ！」

誰かに助けを求められたらペン子はほうっておけなかった。

「パンダマンさんどうしたのですか？ ヒナはどうしたら？」

とりあえず逃げた方がいいな。

だがペン子は決して逃げないのだ！

迫り来る鍋。熱い熱い鍋。このままだとペン子とパンダマンが衝突して、きつと鍋の中身が降り注ぐ。

大やけど間違いなし！

だが、そうはならずさらなる大惨事が待ち受けていたのだった。
ドカーン！

……あ、パンダマン爆発した。

爆発に巻き込まれながらもペン子は無事だった。さすがベルのト
ンデモ発明品。

ついでにどーでもいい話だが、パンダマンも虫の息で無事のよう
だ。

「お父さ〜ん！」

遅れてやってきたパン子。爆発音を聞きつけて飛んできたら、こ
んな有様だった。

その場で一部始終を見ていたミケとペン子ですら状況がつかめな
い。

ミケは虫の息のパンダマンの頭をわしづかみにして立たせた。

「おい、アホパンダ。誰に頼まれてペン子と心中しようとした？」
その言葉を聞いたパン子に衝撃が走る。

「心中……お父さん、お母さんって人がいながら不倫するつもりだ
つたの!？」

虫の息のパンダマンは、

「体が勝手に動いて、なにがなんだか？（おつ、なんだか体が自由
に動くぞ?）」

パンダマンはビシツと立ってラジオ体操をはじめた。しかもキビ
キビ、さっきまでの虫に息がウソみたいだ。

そう、こういう生物は生命力だけが取り柄なのだ！

すぐやられるが回復が早い。ある意味最強のキャラと言っても過
言ではないッ！

しかし、ラジオ体操を突然やるなんて、他人から見たらまだトチ
狂ってるようにしか見えない。

だがミケはパンダマンが正気なのではないかと（普段から狂気だ
という細かい話は置いて）、推測をしながら辺りの気配を探っ
ていた。

「はははーっ、体が動くぞ！ わしのこのボディを見よ！」
ものすごい騒音妨害。

「うるせーんだよアホパンダ！」

ミケは大声を出していたパンダマンの後頭部を思いっきりぶん殴った。

「ゲバツ！」

奇声を発してパンダマンは倒れた。顔面を地面に強打しながら。そのまま永遠の眠りにつくがいい、パンダマン！

ミケは再び辺りの気配を探りはじめた。

「（敵なのか？ 敵だとしてもアホパンダをよこすなんて、もつとアホだ。狙いは……そうか、あのとときのスク水星人かっ！）」
きつとそんな名前の宇宙人ではないと思う。

さらにミケは推測を続ける。

「（スク水が狙いということは、ペン子が狙いということだ。だがどうしてたかがスク水がそんなに重要なんだ？）」

たかがじゃないと何度言わせれば気が済むのだッ！

ミケはいつに敵の気配を取らえた。

「そこにいるのは誰だ！」

電信柱の影から現れた漆黒の騎士。その頭部には狗のような耳。

さらに尻からは尾が伸びていた。

目を丸くしたパン子はミケと漆黒の騎士を交互に見て、

「ミケ様のお兄様？（ミケ様はカワイイ系で、お兄様はカッコイイ系だったんだ）」

「あんなヤツ知るか」

そう、ミケは相手のことを知らなかった。

しかし、相手は違うようだ。

漆黒の騎士の視線はミケに注がれていた。

「この卑怯者め。髪を染め、帽子を被り、さらには恥ずかしい女装までして我らを欺こうなどと。しかし、その程度の変装も見破れぬほど俺は節穴ではないッ！（絶対今の俺は決まってる！）」

「なぬーっ！」

驚きの声をあげたのはパンダマンだった。

「知らなかった。男だったのか」

なんだかガツクリしたようすのパンダマン。

を全員華麗にスルー。

ミケはとてもめんどくさそうな顔をしていた。

「オレはアンタのこと知らないし。別にアンタを欺こうと思ってないんだけど？」

「貴様が俺のことを知らないのは当然だろう。だが俺の部下なら知っている筈だ。どこにやった！」

「そんなやつ知らねーよ（いや、もしかしてあのスク水星人か？）」

「知らないとは言わせないぞ。あいつは単独で貴様を暗殺に向かったあと……消息を絶ったのだ」

「（海まで流されて未だに戻らないんだな、きつと）」
かわいそうに。

ここまでのことをまとめると、ミケと似た獣の耳を持つ宇宙人が、ミケの命を狙っているということ。

ここで一つの仮説が立つてしまった。

そうだ、すでにキミたちも気づいているだろう。

ミケは宇宙人なのだッ！

しかしまだ完全にそうと決まったわけではない。今までの話を集約して導き出された仮説にすぎないだ。

漆黒の騎士は大剣の柄に手を掛け、

「まだ名乗っていないかったな。これから斬る相手に名乗るのがせめてもの礼儀であった。覚えておけ、そして心に刻んでおけ、俺の名はポチだ！（き、決まった）」

おそらく決まったと思ったのはポチだけだっただろう。

静かに漏れる失笑。

漏れる、漏れる、パン子の口からついに笑いが漏れた。

「ありえないーい！ ポチだって、恥ずかしい。あんなにカッコつけ

てポチだって、ウケル。ぷぷっポチって」

ついにポチが剣を抜いた。しかし、その切っ先が向けられたのはパン子だった。

「なにが可笑しい女！ポチは由緒正しきワンコ族の英雄と同じ名前だ。全宇宙のポチに今すぐ謝れ！」

ペン子は『うんうん』と頷いて見せた。

「そうですね。ヒナはポチって名前いいと思います。これからも胸を張って生きてくださいね、ポチさん」

「礼を言うぞペンギン！」

ポチは自信を取り戻したようだ。かなり単純だ。

大剣の切っ先はミケに向けられた。

「エロリック皇子、一对一の戦いだ、かかって来いッ！」

「……エロリックってオレのことか？」

「ほかに誰がいるのだ。エロリック七世・デス・ニヤーとは貴様のことだろう！」

「そんな名前知らねーよ！（しかも地味に恥ずかしい名前だ）」

「そうか、貴様が知らないのも当然だったな。貴様は生まれて間もない頃に、時空乱流が起こしたゲートを通して、この辺境の地に飛ばされて来たのだからな」

「話が飛躍しすぎてわからないから詳しく説明してくれ」

まだわからないところが多すぎる。なんの目的でミケを狙うのか？

ポチはひとまず大剣を納め、長々と話しはじめた。

「アルニマ 今はネコデスと奴らは勝手に呼んでいるが、その星に住む悪しきニヤース族のニヤー帝国によつて、我らワンコ族は虐殺で多くの罪ない同胞が死に、住む場所も誇りすらも奪われた。最終的にアルニマからも逐われ、その衛星である不毛の地レッドムーに隠れ住んだのだ。」

長い苦しみに耐え、ついに復讐の時が来た。我らはニヤー帝国に内乱を起こさせ、皇帝を亡き者にした（実際はその生死は確認できていないが）。

だがしかし、また新たなニャー皇帝が即位した。さらに皇族直系の血を引く者がいることが判明した。おまえだエロリック。皇族の血は絶やさねばならんのだ、絶対に、そう絶対にだッ！」

「なんでそこまでして皇族の血を絶やしたいんだ？ 復讐のためだけなのか？」

「（貴様には サトリ の能力があるからだ。聞こえているな、エロリック！）」

ミケに衝撃が奔った。

それこそがミケを苦しめる元凶。

ミケの持つ サトリ は能動的ではなく、受動的な能力のために、聴きたくもない心の声が聞こえてしまうのだ。

「（ サトリ の能力はオレの経験上、心の内が全部わかってわけじゃない。けどそれを意識的に隠せる人間はあまりいないと思う。だとしたらポチの言うことにウソはなかったことになるけど。親父みたいにウソをウソだと思ってない場合は別だけど）」

いくつもの想いがこもった溜息をミケは吐いた。

やはり自分は人間ではなかったという決定打。自分と同じ仲間が宇宙のどこかにいること。しかし、やはりこの地球では孤独であるという強い疎外感。

再びポチは大剣を抜いた。

「話はもう終わりにしよう。武器を持たぬ貴様を斬るのは本意ではないが、ワンコ族の未来のために死んでくれ！」

大剣が唸り声をあげてミケの頭に振り下ろされる。

そのときパン子が叫んだ！

「待て！」

ピタッとポチが動きを止めた。

ハッとするポチ。

「しまった！ 女卑怯だぞ、我ら由緒正しき貴族は、しつげが行き届いていると知ってそのそうな掛け声を！」

「動物園の娘を舐めないでよね！（ために言ってみただけなんだ

けど) ミケ様はアタシがお守りするんだから!」

パン子の機転によってミケは九死に一生を得たが次はない。

再びポチが大剣を振り上げようとしたとき、今度はペン子が叫んだ!

「お手」

なんの躊躇もなくポチはペン子にお手をした。

「しまった! またもや卑怯だぞ! 礼儀正しきワンコ族が正式な挨拶を断れる筈がないだろう! (こいつら予想以上にできる)」

ポチが予想以上にできないだけだろう。

ミケはパン子とパン子を押しのけて前へ出た。

「これはオレの問題だ。おまえたちには関係ない。さっさとどっか消えろよ」

無言でペン子は一步引いた。しかしパン子は引かなかった。

「アタシはミケ様のことが好きだから!」

「だったらオレの言うことを聞けよ」

気持ちを逆手に取られ、パン子はなにも言えなくなってしまった。これで一対一の勝負。

ミケは一瞬にしてポチの懐に忍び込み、そのままアゴにパンチを食らわせようとした。

それを紙一重で避けるポチ。空かさず大剣が風を薙ぐ。

胸を真つ二つにするほどの一撃をミケは飛び退いて躲した。

ポチは微笑んでいた。

「できるな、さすがはエロリック皇子(やはり サトリ)の能力者は手強い)」

ミケはポチの心を聴いて首を横に振った。

「能力は関係ない。本能と経験で剣を振るうアンタの思考は聞こえない。もし聞こえたとしても、聞こえたあとに避けていたら確実に斬られる」

「(では サトリ)の能力を使わずに俺の攻撃を躲したと言うことか、屈辱だ!)」

猛攻を開始するポチ。

重量のある大剣が信じられないスピードで動き、目にも止まらぬ連撃を繰り出す！

それをしなやかな体の動きで次々と躲すミケ。

二人の戦いを見ていたパン子は眼を丸くしていた。

「（いつも体育見学のミケ様が……まさか強いなんて!?）」

「（親父のせいで何度も死にそうになって来たから、運動神経はあるんだよ!）」

心の中で叫んだミケだったが、次の瞬間には両膝に手をついて肩で息を切らせていた。

「ゼーハーゼーハー（もう体力の限界だ）」

これが致命的な弱点だった。運動神経があっても体力がなければ宝の持ち腐れだ。

ことごとく攻撃を躲され、ポチも焦りを覚えていた。

「（こうなったら奥の手だ、封印を解くぞ）我が狂剣ウルファングよ、思う存分暴れ狂うがいい!」

ポチの持つウルファングが唸り声をあげた。まるでそれは血に飢えた魔獣。

そう、この大剣は生きているのだ!

それゆえに封印を解いたとたん、勝手に動き出す。

目を丸くするポチ。

「ちよ、待てウルファング……おおとととととつ!」

あらぬ方向にポチが引きずられていく。まるでリードを持ったまま飼い犬に引つ張り回される飼い主。

「待て、待てウルファング!」

飼い主の言うことを聞かない狂剣。

引きずられて姿が見えなくなったポチだったが、しばらくして汗をぐっしより流して戻ってきた。

「封印を解くのはなしだ」

どうやら再びウルファングに封印したらしい。

見事なポチのひとり芝居だった。まさに無駄な時間を過ごしたように思える。

しかし、この時間の中にミケは体力を……取り戻していなかった。もう限界とばかりにミケは大の字に寝ころんでいた。

「あゝゝ死ぬうゝ（無理しすぎた）」

これはポチにとって絶好のチャンス。

「止めだエロリック！」

丸太を一刀両断するように大剣が振り下ろされようとしていた。しかし、その前にペン子とパン子が立ちふさがった。

ポチはためらわなかった。

「女を斬ったとあつては恥だが、ワンコ族の復讐を成し遂げるためなら、邪道と呼ばれても構わんッ！」

ワン！

イヌの鳴き声が出た。

なにがあるうと斬るつもりだったポチが止まっていた。一匹の野良犬を前にして。

その野良犬はペン子が魚肉ソーセージをあげた野良犬だった。

ポチは大剣を握ったまま動かない。

野良犬もそこを一步も動かない。

互に見つめ合い……ポチが負けた。

大剣を鞘に収めるポチ。

「同胞のための復讐だ。たとえ地球に住む犬種であろうと、その命を奪つては大義名分が成り立たん」

その言葉を残して立ち去ろうとするポチ。

次の瞬間、不良教師の乗った紅い大型バイクに撥ねられた！

ドゴオオオオオオン！！

盛大に吹き飛ばされたポチは宇宙に帰って行ったのだった。それを見ていた一同。

「……ええええええーッ！！！！」

愕然の終わり方であった。

番外編「それゆけパン子姫！」

うららかな陽気の中、トキワ学園の2年2組の教室では科学の授業が行われていた。

教壇に立つベルの目の前で爆睡しているパン子。

「ミケ様……むにゃむにゃ……」

その強い想いはたとえ夢であっても、ミケの サトリ の能力で、嫌々聞こえてしまっていた。

今日はお城の舞踏会ならぬ武道会。

紳士淑女が己の技と技を競って戦っていた！

おてんば姫パン子は、毒を盛ったり、人質に取ったり、恥ずかしい写真を駆使して、順調に対戦相手をコテンパンにしていくのだった。

しかし、そんなパン子姫の前に強敵があらわれた。

赤ラウンドから登場したのは、隣国のニャンニャン王国の王子ミケ。

そのネコミミを見た瞬間、パン子の脳天にイナズマが直撃クラッシュ！

ズキューン！

「なんてステキなネコミミなの。愛してます結婚してください！」

「よし結婚しよう！」

即決かよ！

その日のうちに二人は結婚式を挙げることになり、武道会は舞踏会へと華々しく変わったのだった。

だがここで運命のイタズラがッ！

時計の針が昼の十二時を指した瞬間、お城に流れるウキウキウオツチン。

ミケが急に慌てふためいた。

「しまった、昼飯を食べに帰らないと！」

走り出したミケをパン子を追いかけた。

「お待ちになってミケ様ーっ！」

ドン！

伸ばした手でパン子はミケを大階段から突き落とした。

「ぎやあああああ〜〜〜」

華麗な階段落ちを魅せるミケ。

社会の底辺まで転げ落ちたミケは血だらけになりながら、重大な異変に気づいた！

「サイフがねえ！」

ミケは階段の途中に落としたサイフに飛びつくが、無情にもそのサイフはいきなりあらわれたパンダマンに盗まれてしまったのだ。踏んだり蹴ったりのミケにさらなる不幸が落ちてくる。

天から金だらいがッ！

ガン！

ミケの脳天に金だらいが直撃したかと思うと、なんと体がカエルになってしまった！

なんてこつたい！？

それをパン子は食用とそうでない野草に分ける片手間に見ている声をあげる。

「なんてことなのミケ様がウシガエルになってしまふなんて、食用にされて美味しくいただけだかれてしまふ。嗚呼、なんとという愛の試練！」

しかし、いったい誰がミケにこんな呪いをかけたのだろうか？

急にあたりが暗くなりはじめ、地響きが木霊した。

ゴゴゴゴゴゴゴオオ！

巨大なまん丸な影が姿を現した。

「ふふふつ、我が名は大魔王ペン子。ミケ王子を元に戻して欲しいなら、地球の温室効果ガス排出量を6パーセント削減するのだ！」

「そ、そんな大規模プロジェクト、アタシにはどうしよもない……」

！」

「そんなことはない。一人ひとりが力を合わせ、電気や水、限られた資源を節約することが大切なのだ！」

「イヤ、そんなのイヤ！ アタシは貧乏生活なんてまっぴらごめんなのー！」

もうミケを助けることはできない。パン子はヨモギを握り締め絶望した。

そこへ紅いバイクに乗ってやってきた悪魔ベル。

「ちよつとそこのお嬢ちゃん？」

「なんかアタシに用？」

「早く借金返してくれないかしら？」

「え？ アタシ借金なんかしてないけど？」

「ここに悪魔の契約書があるからご覧なさい」
ビシツとバシツと突きつけられた契約書。

命なんかいらねーから、わしはステーキが食いたいんじやー！

Byパン

ダマン

契約を見たパン子は、

「これってお父さんの契約書じゃ？」

「そのお父さんが逃げちゃったから、娘のアナタに肩代わりしてもらうのよ」

「……お父さんは去年マグロ漁船の上から海に落ちてサメの餌になつて死にました。誰ですかパンダマンって？」

「とぼけてもムダよおん。きっちり魂を払ってもらわよおん！」
窮地に追いやられたパン子は、ここでビシツとペン子を指差した。

「アタシの命の代わりにペンギンのをあげます！」

「ええ！？」

驚くペン子。

しかも納得してしまうベル。

「それじゃあ、そっちの子の魂をもらいましょう」

近づいてくるベルに焦ったペン子はこの提案をした。

「ヒナとおともたちになったら、おまえに世界の半分をやるっ」

「うーん、悪くない条件ね。乗ったわ！」

契約成立！

こうしてその数年後、大魔王と科学者が手を組み、地球の温室効果ガス排出量は、見事6パーセント削減に成功したのだった。けれど、それはまた別のお話である。

話は戻って、パン子の前に立ちはだかるペン子とベル。

もうパン子には打つ手がなかった。

そんなときだった、小高い崖の上に逆光を浴びて立つ謎の人影！

「パンダだけに白黒つけようじゃねーか。正義のヒーローパンダマン参上！」

シャキーン！

首に巻いた赤いふんどしが風に靡いた。

崖の上からジャンプしたパンダマンが着地に 失敗した。

そのまま地面を転げ回り、ちょうどそこを通りかかった三輪車にひかれ、最後はたまたま電信柱の影にいた犬男の立ちシヨンを浴びた。

嗚呼、黄金水のキラメキが目染みるぜツ！

そして、ストーリー的になかったことにされた。

パン子の前に立ちはだかるペン子とベル。

こうなったらパン子に残された道はただ一つッ！

「この最終奥義を見てアタシを倒した者はいない……」

パン子は全身の力を足に込めた。

「トンズラ！」

脚力を活かした見事な逃走だった。

パン子は逃げた、ミケの首根っこつかんで逃げた、社会の荒波から逃げた。

それはめくるめく愛の逃避行。

パン子とミケのハネムーン。

そしてついにパン子は逃げ通したのだ。

嗚呼、短かった死闘が終わった。

数々の伝説の死闘に名を連ねないで語り継がれないことだろう。

「逃げ切ったアタシは人生というサバイバルゲームに勝った。なにどうしてミケ様が元のお姿に戻らないの!」

それは大魔王ペン子に勝ってないからだろう。

「嗚呼、どうしたらミケ様を……そうだ、こついうときは定番のキスね!」

キス⇨回復魔法というのが世界の定説だ。

見つめ合うパン子とカエル。

モーソー! トキメキ! ロマンズ!

さつそくパン子はミケにキスしようとしたのだが

「ゲローツ」

嫌そうな顔をしたカエルが逃げた。

まさかここにも最終奥義の使い手がいようとはッ!

逃げるカエル、追うパン子、そこにあらわれるパンダマン!

「今晚のオカズだー!」

パンダマンはウシガエル(食用)を強奪して逃げてしまった。

「ミケ様ーッ!」

パン子は地べたに這いつくばって、去りゆくミケに手を伸ばして叫んだ。

バシン!

強烈な一撃を頭に受けてパン子は目を覚ました。

目の前には丸めた教科書を持っているベル。

「授業中寝るのはかまわないけど、うっさいのよ!」

「……えっ、夢?」

キンコーンカーンコーン

「寝ている内に授業が終わってしまった。

そして、昼休みになってパン子はお弁当を食べることにした。

「今日のお弁当にかなあ〜。アレっ変な手紙が入ってる。なににな、今日のお弁当はお父さんの手作りなんだ、めずらしー」

そんでもってお弁当箱を開けるとそこにはなんと　ウシガエルの丸焼き。

げろ〜ん！

記憶のカケラ「裸足の少女」

まばゆい光によって目が霞む。

霧が徐々に晴れるように浮かび上がる風景。

幼い手を包み込む大きな手のひら。

手をつないだ先を見上げると、大柄な男がいつもと変わらぬ、自信に満ちあふれた笑みを浮かべていた。

情熱の色をした真つ赤なジャケットにマントを羽織り、おまけに頭にはシルクハット。片手に持ったステッキを、まるでバトンのように回しながら歩いている。

オレの親父だった。

今よりも若い親父の姿。

この世界はいつたいたいなんなんだろう？

小さな公園の横を通り過ぎようとしたとき、オレの足は不意に止まった。

楽しそうに遊ぶ子供たちの姿。

「よいぞ、自由に遊んでくるがよい我が息子よ」

親父に背中を押されたが、オレはその場を動かなかった。

不思議そうに親父をオレの視線の先を見つめた。

そう、オレは目を奪われていた。

楽しそうな空間の中に、そこだけぽつんと穴が開いたように、独りの幼い“少女”がいた。

その“少女”は公園の砂場で遊んでいた。

遊び道具はなにひとつ持たず、汚らしいところどころ破れた服を着て、裸足の“少女”は指の間を零れ落ちる砂とただ戯れていた。

同年代の子供の輪に積極的に入ろうと思わない。

けど、そのときはなぜか体が動いてたんだ。

オレは“少女”の前に立っていた。

“少女”は温かい笑顔でオレを見つめた。

優しくて温かい……でも、なぜかオレはその笑顔を見て、とても哀しい気分になった気がする。

親父はまるで魔法のような手つきで、棒付きのクルクルキャンディーを出すと、“少女”の前に差し出した。

“少女”は明らかに戸惑ったようすだった。手を伸ばしかけるが、すぐに悪いことでもしたように手を引つ込めてしまう。

「うまいから食べよ」

オレはそうぶっきらぼうに言って、無理矢理“少女”の手にキャンディーを握らせた。

はじめのうちはキャンディーを握ったまま、それをじーっと見つめていた“少女”だったが、やがて小さな口を開いた。

「ありがとう」

凍えるように震えた声だった。

けど、キャンディーを一口舐めた“少女”は、まるで雪解けの春が訪れたように、ほがらかな微笑みを浮かべた。

その日から、オレと“少女”は仲良くなった。

いつも二人で……二人だけで遊んでいた。

遊ぶ場所はいつも砂場。砂場の枠の中だけがオレたちの世界だった。

ある日、いつものように遊んでいると、周りの子供たちよりも少しい体の大きなガキ大将が、オレたちの世界に入ってきた。

ガキ大将は“少女”の作っていた未完成の砂の城を、何度も何度も踏みつぶして壊してしまった。

「砂場から出てけよ、いつもおまえたちばかりここで遊んでんないよー！」

たしかに、今までこうならなかったの不思議なくらいだ。

オレには他人を寄せ付けたくないという気持ちはあったが、はじめから誰もこの砂場には近づいてこなかった。

時折、公園に来ていた大人たち。蔑むような目でオレたちを見ていたような気がする。そして、オレはそいつらの心の声を聴いたよ

うな気がする。

……忘れてしまった。

でもきつと、わざと近づかないようにしてたんだ。オレのせいだろうか？

違うかもしれない。

はじめから“少女”は独りだった。

だからオレは……“少女”を……どうしても……。

気づいたときにはオレの拳がガキ大将の鼻にめり込んでいた。ぶっ倒れたガキ大将が鼻血を流しながら大泣きしている。

それでもまだ殴りかかろうとしていた。

けど、オレの前には哀しげな“少女”が立っていた。

“少女”は何度も何度もガキ大将に謝ったような気がする。

そして、オレの手を引いて公園から逃げ出した。

あの日から、“少女”は公園に姿を見せなくなってしまった。

オレが“少女”の居場所を壊してしまったのだろうか？

数日経った雨の日、また親父をあのかの公園の横を通り過ぎようとした。

雨の音だけが聞こえてくる寂しい公園。

でもそこに“少女”はいたんだ。

土砂降りの雨の中、傘も差さずに、砂場で独り遊ぶ“少女”。

オレは無我夢中で自分の傘を投げ出して、“少女”のもとへ駆け寄った。

“少女”はこんな寒い雨の中で、温かな笑みを浮かべてオレを出迎えたんだ。

そのあとのことはよく覚えてない。

あのとき、“少女”から大切なプレゼントを受け取った。

金色に輝く大きな鈴。

あやふやな世界。

頭に残り続ける激しい雨の音。

それからいつものように、親父の都合で町から出た。

“少女”にちゃんと別れを告げたのだろうか？
よく思い出せないのに、なぜかそのことを考えると、心が苦し
く死にそうになる。

第4話「惑い合うウンとホントと妖しき男爵」

ズンズンズンズン……

ミケは不機嫌そうな顔で歩いてた。

「（なんか調子悪いよな。今朝見た夢のせいかな？）」

学生寮に帰ろうとしていると、ペン子が前から歩いてきた。

目が合う二人……の間に割り込んできたポチ！

「今日こそ決着をつけてやる！」

が、そこにさらに割り込んできたマントの男がポチを押し飛ばした。

「我が息子よ、今帰ったぞ！」

真っ赤なジャケットにシルクハット。ミケの親父だ。

鼻血ブーしながらポチはミケの親父に切っ先を向けた。

「貴様何者だッ！」

ミケの親父は自信満々の笑みを浮かべ、白い歯をニカッとさせた。

「ははははっ、我が名は妖師奇バロン！」

バロンはマントを払い靡かせ、

「偉大な奇術師にして愚息ミケの偉大なる父だ！」

かなり派手な男だ。

父の登場にミケはため息を吐いた。

「オレよりアンタのほうがよっぽど愚かだろ」

「なにを言う我が息子よ。十歳にもなつて寝しょんべんをしていたのは、いったいどの誰だッ！」

「人の恥ずかしい過去を勝手に暴露するのやめろよ」

しかも、この話はパン子にまで聞かれていた。

「ミケ様カワイイ……（きつとひとりでトイレに行くのが怖かったのね！）」

こんなな面々によって話が軌道修正できなくなる前に、大剣を構えたポチが吠えた！

「ちょっとおまえら、俺のことを忘れていないだろうな！」
ええ、すっかり忘れていたともさ！

自分のポジションを誇示するかのようになりながら、ポチがミケに襲いかかった。

だが、その前に立ちはだかったバロン！

「なんと愚かしき。我が輩の息子に手を出すなら、容赦はせぬぞ犬
つころ！」

「ただのマジシャンになにができる！」

「手品師ではない、偉大なる奇術師と呼べ。喰らえ我が偉大なる奇
術 アン・ドウ・トロワ！」

タコ・殴・り！

バロンの熱い拳がポチの顔面に1、2、アツパーッと炸裂した。
奇術じゃなくてただの武術だ。

つぶれたアンパンみたいな顔をしてノックアウトしたポチ。

ペン子がポチに手を差し伸べた。

「だいじょうぶですか？」

返事がない。

ミケはそっけなく、

「そんなやつほっとけよ」

と言い放ったがペン子は心配そうな顔でポチを見ていた。

「早く元気になってくださいね」

笑顔のペン子を見て、ポチも一瞬だけ笑みを浮かべて気を失った。
バロンがミケに視線を向けると、その真横にはニヤニヤしている
パン子。ここでバロンに戦慄が走った。

「なんと喜ばしき！ 我が愚息に彼女ができたとはッー！！」

「彼女じゃねーよ！」

顔に真っ赤にしてミケはのどがつぶれるほど叫んだ。

だが、パン子はモーソーモードに突入していた。

「アタシってミケ様の彼女だったの？（どうしよう今まで気づかなか
った、損した気分。デートにも行かなきゃ。でもデートの最中で

ムラムラしちゃったミケ様に襲われたらどうしよう。むしろ襲って欲しいけど。てゆかアタシから襲っちゃったほうがいいのかな？）ミケ様大好きです！」

突然、ミケに飛びかかるパン子。

さらりとミケは避けた。しかも話をそらそうとする。

「親父、今度はどこ行つてたんだよ？」

ここ数日、バロンは家を空けていた。

「ふむ、金の工面をしとつたのだ」

「またやばい金に手を出したんだろ？ しかもその金を女に貢いだ」

「貢いだのではないぞ。目の前にいた困った女を助けたまでよ、ははっ！」

「（いつもそうやってこの馬鹿親父は騙されるんだよな。しかも騙されて清々しい顔してやがる）」

バロンはどこからともなく棒付きキャンディを出した。一つはクルクル、もう一つはスターの形だった。

「レディがいたら優しくする。それが偉大なる奇術師の勤め。さあ、そこにいるパン子とペン子、良き出逢いの証にキャンディでもどうかね？」

ここで補足しておくが、パン子もペン子も勝手にミケがそう呼んでいるだけだ。バロンも二人を見て同じあだ名を思い付いたのだった。ネーミングセンスが同じ。

パン子は飢えた猛獣のようにクルクルキャンディを掻っ攫った。

「わーい、アタシこの形のキャンデー大好き！」

このとき誰も気づいていなかったが、ペン子は一瞬だけ悲しげな表情を見せていた。けれど次の瞬間には満面の笑みを浮かべて、お辞儀をしてキャンディを受け取っていた。

「ありがとうございます」

バロンはマントを翻した。

「では立ち話など無粋だ、我が城へ招待しよう！」

と、やってきたのはミケが住んでいる学生寮だった。

「狭い城だが寛ぐがいいぞ！」

バロンはペン子とパン子に席を勧めた。

とりあえず絨毯に腰掛け、パン子はミケに尋ねる。

「お父様と住んでいらっしやるんですかー？」

ミケよりも早くバロンが答える。

「はははっ、我が息子が寂しがるのでな。一緒に住んでやっているのだ！」

これを聞いてムツとしたミケ。

「ウソつくなよ。ほかに住む場所がないからだろ」

「はははっ、言い方の違いだな。我が輩たちには敵が多いのでな、親友のこの学園の理事長がここに住んだらどうかと勧めてくれたのだ」

「敵が多いのは親父だけだろ」

今ではミケも変な宇宙人に付け狙われているが。ついでにパンダにも。

パン子はバロンの話に興味津々だった。なんせ将来のお義父様おとうさんだからだ。

「敵ってどんな敵がいるんですかー？」

「はははっ、敵はどこにでもいるぞ。飲み屋のマスターから秘密結社、魔物や宇宙人、最近は妻も我が輩の命を狙ってる気がするな！」

「奥さんがいらっしやるんですねっ！」

「十年以上前に謎の失踪を遂げてしまったがな！ おそらく敵の手に落ちて、洗脳されて我が輩の命を……なんと恐ろしき運命の悪戯！」

話の腰をへし折るためにミケがボソツと。

「全部誇大妄想だけだな（けど本人が全部本気だと思ってるから夕チが悪い）」

「我が息子よ、誇大妄想ではないぞ。我が輩は偉大なる奇術師ゆえ、常人には信じがたい出来事の数々に遭遇しているに過ぎんだ」

「奇術っていうけどな、オレは手品もどきしか見たことないぞ」

「それは奇術とは安易に人前で披露するものではただけだ。やるうと思えば雷雲を呼び、大洪水によってこの町くらいなら流せるぞ」

その話を聞いてペン子は本気で心配そうな顔をしていた。

「流されてしまったら困ります。きつと悲しむ人もいっぱいいるのでやらないでくださいね？」

「うむ、その通りだ。だからこそ我が輩は奇術を安易に使わんのだ」
ホントかウソかはわからない。本人が本気でそう思っているのは、ミケの サトリ では真実を知ることにはできない。

しかし、多くの人はバロンを“ほら吹き男爵”と称してる。

だがしかし、“信じている者” 略して“信者”がここに一匹。

「さすがミケ様のお義父様。本当に偉大な奇術師なのね！」

さらにもう一匹。

「バロンさんはほかにどんな奇術が使えるのですか？」

興味津々で目をキラキラさせているペン子。

「ふむ、浮遊術や水の性質を変化させたり、ほかには書に念力を込めたりだな」

どこかで聞いたことありそうな胡散臭さプンプン。

さらに今度はペン子が質問。

「ところでやつぱりミケ様も奇術が使えるんですか？」

「愚息には使えんよ。なんせ我が輩と血が繋がつとらんからなッ！」

……………。

「「ええ〜〜〜っ!!」」

ペン子とペン子のシンフォニー。

不思議そうな顔をしてミケは呟く。

「言っでなかつたか？」

二人はぶるぶる首を横に振った。

ペン子は過去の出来事を思い出しながら、

「ミケ様が実は皇子様みたいな話しか知りません！」

……………。

「なぬ〜〜ツ！」

驚いたのはバロンだった。

全員が情報を共有していないために、話がうまく噛み合わないのだ。

ミケがポチとはじめて出会ったときに、二人の間で交わされていた会話も、ほかの者が聞いたらなんのことも理解しにくかっただろう。そのときのことを、ミケは補足を加えながらバロンに聞かせた。

バロンの養子であるミケは、実はどこかの星の皇子だったこと。そして、ワンコ族という犬の耳としっぽを持った宇宙人に狙われていること。ただし、ペン子とパン子がいるために サトリ の話はしなかった。

話を聞き終えたバロンは目をカッと開いた。

「あの黒い鎧の男……たしかに犬の耳と尻尾がついておったわッ！（息子の耳を見慣れているせいで、うっかり見過ごしておった）」
慣れとは恐ろしいものなのだ。

バロンはおもむろに立ち上がり、身振り手振りを交えながら大げさに話しはじめた。

「あれは我が輩が妻を捜して世界中を旅していた時のことだ。その日はたまたま財布を持ち合わせておらんかったから、いつものように食い逃げをした。すると店のオヤジが鬼の形相で追いかけて来るではないか。追われた逃げる、当然の心理で我が輩は逃げた。気づけば町中 いや、世界中が我が輩を追いかけて来た」

ツツコミどころが多すぎる。

だが、話はツツコミなしで先に進んでしまう。

「我が輩がもう逃げ切れんと思った時、奇跡は起きたのだッ！」

空に次元と次元を繋ぐ ゲート が開き、我が輩を追いかけて来た借金取りどもが全員吸い込まれてしまったのだ。そして、替わりに赤子が降って来おった。これは天の助け、神が起こした奇跡、我が輩の腕の中にいる赤子は天使だと思つた。

さつそくこのネコミミの赤子を見せ物にするか、サーカスか何かに売り飛ばせば金になるのは間違いない。さらにその赤子は金になりそうな指環を持っておつてな、しばらくの間は生活に困らんかったわ」

ツツコミを入りたいが、もうバロンの話は止まらない。

「しかし、買い物が見つからず我が輩は途方に暮れた。そんなことで一年、また一年と経ち、その子供に情が移ってしまったのだ。これは我が息子として育てるしかあるまいと思った。なぜなら、さらわれた妻も子供好きだったからな。この子がいれば妻も帰ってくると思ったのだ。」

そして、我が輩は妻と一緒に失踪した飼い猫と同じ名前を子供に与えた。それがミケだ。猫のミケは頭脳明晰で、人語すら介するほどだったというのに、こっちのミケは本当に手のかかる愚息だ。妻も帰って来んしどうしようもない。

そこで我が輩は妻の面影を求めて我が息子に女装をさせたのだ。さすが我が輩と妻の子だ、妻に似て可愛い。誇りに思うぞ我が息子よ！」

もうツツコミを入れる気すら失せた。が、バロンはまだしゃべる気だ。

「そして、我が輩は息子と共に多くの冒険をした。ある時はマグロ漁船に乗り、ある時は徳川埋蔵金を探し、ある時は……おっと腹が空いたな。そろそろ晩飯の用意をしようではないか。パン子とペン子もぜひ今夜は我が城で夕食をどうかな？」

話が自由すぎ。

パン子がなにやらプラスチック容器を取り出した。

「実はミケ様のためにお弁当を作ったんですけど、渡しそびれちゃって……はい召し上がれ！」

と、出されたのはギユウギユウ詰めにしたししゃも。

それを見たミケは大きく飛び退いた。

「オレが小魚嫌いだって知ってて嫌がらせしてんのかッ！」

Baron は勝手にししゃもを食いはじめた。

「我が息子よ、好き嫌いはいかんぞ」

「アンタのせいで嫌いになったんだろ！ 牛乳が飲めないオレに力ルシウム不足がどーとかって、窒息するまで小魚を食わせやがって！」

「覚えとらんナツ！」

キツパリ言い放った Baron。都合良すぎ。さすが Baron だ。

そして、気づけばししゃもは全部 Baron に食われていた。

「お義父様に全部食べてもらえたなんて、ミケ様が全部食べてくれたのと同じです！」

意味不明な理論を展開するパン子。

ししゃもを食って満足そうな顔をする Baron。

「旨いししゃもをごちそうになっては、やはり豪勢な夕食でもてなさねばならんな。我が息子よ、この金でひとつ走り何か食材を調達してくるのだツ！」

ジャジャーン！

Baron が取り出したのは札束の扇だった。

その輝く札束を見たパン子は泡を吐いて失神。

ミケは明らかに嫌そうな眼をしている。

「どんなヤバイ金だよ？」

「賭で勝った金だ」

「（親父のことだから万馬券とかじゃなくて、もっとヤバイ賭だろうな）」

そんなことをミケが思っている横では、ペン子が必死になってパン子を起こそうとしていた。

「山田さんだいじょうぶですか？ 目を覚ましてください」

カツとパン子の眼が開き、飢えた獣のように Baron に飛びかかった。

「カネーッ！」

一瞬の隙を突かれて札束がパン子に奪われた！？

暴走したパン子はそのまま窓を飛び出し逃走してしまった。

バロンは慌てず騒がず、

「盗まれてしまった物は仕方があるまい。パン子にもやむにやまれぬ事情があったのだろう」

と、アツサリ。

「そーゆー問題じゃねーだろ！」

怒ったミケは急いでパン子を追いかけて飛び出した。

全速力で走るミケ。だが、すぐに力尽きてミケは歩くことにした。

「どこ行きやがった？」

まったく足取りがつかめないまま住宅街へ。

やがてミケは見覚えのある公園の横を通り過ぎようとしていた。

「（ここは？）」

記憶に引っかかる風景。

公園の砂場にはパン子がいた。しかも、札束を埋めて隠そうとしているところだった。

「パン子ーッ！」

ミケはパン子に飛びかかった。

思わずパン子は両手を広げてミケをキャッチ！

「ミケ様ーッ！」

ガツシリ抱き合う二人。

「放さないぞパン子！」

「いやん、放さないで」

どうにかミケはパン子から札束を奪い取った。

そして、改めて公園とこの砂場を眺めた。

パン子も同じような瞳をしていた。

「懐かしいなあ。小さいころ、独りぼっちでこの砂場で遊んでたんだっけ（友達いなかったし）。そうそう、あのころは貧乏すぎちゃって、クツすら買ってもらえなくて……あはは」

ミケは引っかかるものを感じたが、そのことはあえて口に出さず、「だからって、ひとの金を盗んでいってことにならないだろ」

ピーン！

突然の気配。

「ここで会ったが百年目、今こそ決着をつけてやる！」
ポチだった。

しかも、今回のポチは本気だ。

「我が剣技 暗黒剣の恐ろしさを見せてやる！」

ポチの持つ大剣が黒い炎に包まれた。こんな技持つてるならさっさと出せよ！

轟々と燃えさかる大剣の一撃をミケは紙一重で躲した。そのときに、札束を手放してしまった。

「札束がッ！」

燃えた。

黒い炎が引火した札束は一瞬のうちに消失した。

それをこの場に駆けつけたバロンが目撃していた。

「なんとあるじまじき！」

バロンは怒りに燃えていた。

「この犬っころめ、我が偉大なる奇術の餌食になるがよい ウノ・

ドス・トレス！」

タコ・殴・り！

フルパワーでポツコポコにされたポチは、最後にアッパーを喰らって大きくを空を飛び、道路まで飛ばされたところで……

ドゴオオオオオオン！！

不良教師の乗った紅い大型バイクに撥ねられた！

さらに壮大に宙を舞ったポチは、そのまま宇宙の彼方まで吹き飛んだのだった。

札束は跡形もなく灰になった。

バロンはどこからか指環を取り出す。

「夕食をごちそうすると言ったが金がない。しかし奇術師たるもの
二言はない。そこでこのミケの指環を質に入れて来よう！」

「はあ~~~~っ!？」

ミケは驚きながらバロンの腕を掴んだ。

「親父！ どうしたんだよこの指環！？」

「うむ、世界中を探してようやく見つけたのだ。我が輩がおまえを拾った時に一緒に持っていた物だ」

「苦労して見つけたもんをアッサリまた売ろうとするなよ！！」

「だが、奇術師に二言はない。我が輩は指環を売るぞッ！」

いきなり走り出すバロン。

必死になって追いかけるミケ。

だが、やっぱりミケは……力尽きた。

バタン！

つと、ミケは倒れてしまった。

「馬鹿親父……」

ガクッ。

第5話「変態！山田どうぶつ園」

ミヤアミヤアニヤンニヤー！

休日の午前。

ミケは公園のベンチでぼーっとしていた。

あたりにはいつの間にかネコたちが集まってきてしまっていた。

「あゝ、またか」

いつもこうだった。外でぼーっとしていると、飼い猫や野良猫が、次から次へと集まってくる。

ネコたちはミケに甘えるように、頭を擦りつけてくる。

「（もしかしてこれも皇族の力とかなのか？）」

際限なく集まってくるネコにミケが困っていると、そこにちょうどパン子が現れた。

「ミケ様ーッ！ どうしたんですかこのネコちゃんたち？」

「別に（偶然またこの公園でパン子と……か。でもあの“少女”がパン子ってわけないよな）」

あやふな過去の記憶。

つい最近見た過去の夢。

裸足の少女。

あえてミケはそのことには触れなかった。

「どういうわけかネコがいつも寄ってくるんだよ。野良猫も混ざってて、オレに媚びられても飼う気はないしな」

「だったらアタシが飼います！ だって動物園の娘ですから！」

安請け合いにしか聞こえなかった。

ミケは疑いの眼差しでパン子を見ている。

「本当に動物園の娘なのかよ？（ってことは、あのパンダマンが園長ってことか？ そもそもこいつんち相当な貧乏じゃないのか？ 動物園なんてやってるわけないだろ）」

そーゆーわけでミケは野良猫大行進をしながら、山田どうぶつ園

に足を踏み入れることになったのだった。

「よく来たな、わしがこの山田どうぶつ園の首領だ！」

今日も首に巻いた赤いふんどしを靡かせ登場パンダマン。

ミケは呆気にとられていた。

「ここ学校の裏庭だよな？」

そう、パン子に連れられやってきたのは、トキワ学園の裏庭の一画だった。そんな場所に建てられた入場ゲートのアーチ。よく見るとアーチは段ボールで出来ていた。

しかも、入場料五〇〇円の立て看板が。

ミケは無視して入ろうとしたが、すぐさまパンダマンが立ちはだかった。

「五百円出しな」

「そんな金出せるかッ！」

「この動物園は貧乏人の来るとこじゃねーんだよ。金がないならさっさと帰りな」

「（貧乏人はおまえだろ）わかったよ、帰るよ」

このままだとミケが帰ってしまう。慌ててパン子が割り込んだ。

「ちよつとお父さん、アタシの彼氏なんだからタダで入れてあげてよ！」

「それとこれとは別問題だ。白黒つけなきゃいけないのさ、パンダだけになッ！」

「ちよつとミケ様も帰ろうとしないでよ、アタシがどうにかするから！」

必死なパン子はミケの袖をつかんで放さない。

仕方なくミケは、

「わかったよ、パンダオヤジ。ここにいるネコたちを無料でこの動物園に提供してやる。これで入場料タダにしてくれないか？」

「よし乗った！」

即決パンダマン。

だが、この取引どう考えてもボツタクリだ！

野良猫たちの問題も解決したし、ミケは園内に入ろうとせずつとせずつと帰ろうとした。それに気づいて必死にパン子が止めた。

「ちよつとミケ様！ せつかくだから中に入ってくださいよ！」

「……まいつか（別にヒマだしな）」

アーチをくぐると、そこにはすぐウサギたちがいた。

愛らしいことは違いないが、ウサギしかない！

「詐欺だろコレ！」

ミケは叫んだ。

五〇〇円も払ってウサギを見せられるだけなんて、なんたる詐欺

商法！

しかもよく見ると、ウサギの柵はアイスの棒や割り箸……なぜか一本だけ混ぜてる歯ブラシで作られていた。

パンダマンはご丁寧に歯ブラシを指さして、

「ここがわしの自信作だ。この歯ブラシ、オサレだろ？」

華麗にミケはシカトした。

辺りを見回してみたが、やっぱりウサギ以外はいない。ほかにある物と言ったら、謎のボロ小屋だ。あの中にほかの動物がいるのだろうか？

という淡い期待を抱いてみる。

ミケはパン子と顔を見合わせる。

「あのさ、ウサギしかないのか？」

「今はウサギしかないけど、いつかはこの動物園でパンダを飼う

ことが夢なの！」

壮大な夢だ。パン子にとっては壮大すぎる夢だ。

さらにパンダマンまで入ってきた。

「だから我ら家族はパンダの格好をしているのだ！」

しなくていいよ。

ミケは回れ右をして帰ろうとした。

だがパンダマンが立ちはだかる！

「待ちな小僧。追加料金で五百円払えば水族館も見られるぜ」

「水族館まで手広くやる気かよ（すでにこの町には水族館あるだろ、そこと張り合う気なのか？）。で、その水族館にはなにがいるんだよ？」

「まだ釣れてない」

「釣るのかよ」

「骨の展示ならいろいろあるぜ。あとヒトデ手裏剣コーナーや、ウ二（の空）玉入れコーナーも設置済みだ」
「やっぱりミケは帰ろうとした。」

だが、再びパンダマンが立ちはだかる！

「待ちな小僧。取って置きがまだあの小屋の中にあるんだぜ？」

あのボロ小屋の中にいったいなにが？

残念な結果は目に見えていたが、なにがあるのか気にならないわけではない。

ミケはパンダマンに案内されて小屋の中に入ることにした。

「おっと、土足厳禁だぜ」

便所サンダルを脱いで中に入っていくパンダマン。

この時点でミケの不審はマックスだった。

それでもここまで来てしまっただけは仕方がない。ミケは先を進んだ。パンダマンが叫ぶ。

「これが取って置きのパンダの展示だ！ どうだ可愛いだろ！」

まさか本物のパンダが！

いるわけなかった。

そこにいたのはパンダのきぐるみを着た五つ子ちゃん。パン子の弟たちだ。

さらにパンダマンは台所を指さした。

「あんなのもいるぞ！」

そこにいたのはバニーちゃんだった。若くて綺麗なバニーちゃんだが、

「アタシの母です」

そう言ったパン子とそっくりだった。

パンダマンに似なくて本当によかった。

一通り家族紹介が終わったところで……って、ひとんちの家族見せられただけかッ！

なんたるボツタクリ！！

やっぱり失敗したと後悔しながら帰ろうとするミケ。

だが、またまたパンダマンが立ちはだかった！

「待ちな小僧。まだ取って置きのヤツがいるんだぜ」

「もうお腹いっぱいだよ」

「デザートは別腹だぜ小僧。おい、ちょっと来てくれるか？」

少し遠くから、

「はい」

と返事をしてやってきたのは、まん丸ボディの　ペン子だった。

ミケは誓った。

「（もう絶対に騙されない）」

こうしてミケは人間不信に陥ったのだった。

パンダマンは誇らしげにペン子を紹介しようとしているが、もうすでに知っている。

「この娘むすめが今日から山田水族館のアイドルを担当してもらうことになったペンギンだ」

アイドルという言葉聞き捨てならなかったパン子。

「山田どうぶつ園のアイドルのアタシと張り合うつもりなのね！」

パン子は火花を散らす、ペン子はのほほんとしている。

「がんばってペンギンの布教活動をしたいと思います。よろしくお願ひします」

いつもの面々が集まっただけじゃないか。

これで五〇〇円なんてやっぱりボツタクリだ。

今度こそ、今度こそ絶対にミケは帰ろうとした。

だが、しかし、再び、またまたパンダマンが立ちはだかる！

「待ちな小僧。最後の取って置きがあるぜ？　今度は本物中の本物

だ

「ここまで来たら……とか、これで最後だから……とか思ったら負けだ。」

「ミケは負けなかった。」

「帰る」

引き止められる前にミケは急いでパン子の家をあとにした。

が、玄関を出てすぐのところまでポチと鉢合わせ！

すぐあとを追ってきたパンダマンが誇らしげにポチの肩に手を回した。

「ウチの新しい仲間だ。どう見てもこの耳やしっぽ本物だろう？」

地球じゃここしか見られない代物だぜ」

最後の取って置きつてこいつのことかーッ！

「なんでこんな場所にいるんだよポチ！」

「まさかこんな場所に出会うとはな、運命とは皮肉なものだなエロリック」

無駄にカツコをつけるポチ。

「だからなんでこんな場所にいるんだって？」

「話せば長くなるが、この星に来るとき宇宙船が壊れてな。そのあと仲間とはぐれ、住む場所も頼る人もいなかった俺をバニーちゃんが救ってくれたんだ。どこかの国の猫どもと違って、本当にバニーちゃんは良い人だぞ」

「どこかの国とオレは関係ない」

見知らぬ同族たちが住むニヤー帝国。ポチの話だけを聞けば、あまり良い印象は持てないが、やはりピンと来ないのも事実。ポチを含めるワンコ族、ニヤー帝国のニヤース族、どちらにも言い分はあるだろう。

「でも、オレのこと殺りたいんだろ？」

ミケの真剣な眼差しがポチの心を射貫いた。

ポチは大剣の柄に手を掛けたが、それ以上は動かなかった。

「（俺はなにを迷っている）」

「聞こえてるぞ？」

「うるさいエロリック！（サトリ を防ぐ特殊訓練を受けたが、そんなものほとんど役に立たない。だが悪あがきとも言っべき対処法ならある。そう、こうやって頭の中で物事を考え続けることだ）」
「そつちこそうるさいぞ」

二人が対峙していると、ペン子がやってきた。

「あ、こんにちはポチさん」

「ああ、こんにちはペンギン（今日も素敵なお顔だ、癒される。バニーちゃんとペンギンだけが、この辺境の地でのオアシスだ）」

ハツとしてポチはミケに顔を向けた。するとミケは『聞こえてるぞ』と言わんばかりの顔をしていた。

慌てるポチ。

「（落ち着け俺。暗黒公子と呼ばれるこの俺が、この環境に感化されているとでもいうのか。というのもエロリックに聞かれている。マズイ、ほかのことを考えるんだ。そうだ）たまには肉食いたいな

（って声に出してどうする俺！？）」

軌道修正できない慌てっぷりだった。

パンダマンがガシツとポチの肩に腕を回した。

「わしも肉が喰いてーぜ」

ミケがボソツと。

「アンタは笹でも喰ってるよ」

「笹なんざ人間様の喰いもんじゃねー！ あんなもん喰うヤツの気が知れねーな」

「（パンダ全否定かアホオヤジ）」

ここでミケもハツとした。

「（オレも感化されるんじゃないか。周りの変なヤツらに汚染されている気がした）」

急にミケは不機嫌そうな顔をしてこの場から早足で立ち去ろうとした。

ところどころに立ちはだかる謎の影！

今度はパンダマンではない、ひき逃げの常習犯ことベルだった。
「ここがウワサの不法占拠のウサギ小屋ねえん。学園の敷地にこんな建物作られちゃ困るのよねえん」

学校の地下に変な部屋作ってる人の言えることか？
不法占拠でポツタクリの山田どうぶつ園の首領ドンがベルに吹っかけようとしていた。

「ねーちゃん、入場料は五〇〇円だぜ！」

「入場料は絶対に払いたくないけど、代わりにコレもらってくれないかしらあん？」

「もらえるもんならなんでももらうぜ、借金以外はなッ！」

ベルは白衣のポケットから、抱えるほど大きな段ボール箱を取り出した。空間的に不可能な現象が起きたが、そこはあえて誰もつかまない。

パンダマンはなんの躊躇もなく段ボール箱を開けた。
ガブツ。

あ、なんか箱から出てきた動物にパンダマンの頭が丸呑みされた。
「ぎゃああああっ！（く、喰われるー！）」

てか、すでに喰われてる。

パンダマンはどうか頭を抜いて逃げ切った。

そして、彼は見たのだ！

「パンダじゃねーか！」

そう、パンダマンの頭に喰いついたのはパンダだった。

パンダマンは頭からぴゅーぴゅー血を噴き、パンダと睨み合っ
一触即発だった。

「なんでパンダごときが人間様を喰おうとすんだ！」

あんた本当はパンダそんなに好きじゃないだろ？

この状況を作り出したベル、サラツと解説。

「パンダって雑食よ、だってクマだもの。まあ普通の環境じゃ笹ばかり食べてるけど。あーちなみにこの子は、ただのパンダじゃないから」

そりゃそうでしょうよ。あんたが連れて来たパンダですものね。で、どのようなパンダなんですか？

「実はこの子、パンダじゃなくてシロクマなのよね。遺伝子操作で色つけてみたんだけど、しょせんシロクマはシロクマっていうか、ついたの色だけじゃなくて極度の凶暴性とか、鋼鉄のかぎ爪とか、牙の間から毒液を出す能力とか……」

とかとか言ってる間に、パンダマンは白目を剥いて地面の上で痙攣していた。

まるで陸に打ち上げられた魚みたいにぴっちぴっちしている。

そして、動かなくなつた。

パンダマン！

なんて誰も叫んでくれない。というか、パンダマンなど誰も眼中になかつた。

そんなことよりも今大事なことは！

「うんこ出そう」

ベルは猛ダツシユでこの場から消えてしまった。

残された偽パンダは目に入ったモノに襲いかかる。

その視線の先にいたのは、ペン子だ！

この偽パンダも運が悪い。最強の呼び声が高いペンギンバトルスーツに挑もうとは。返り討ちに遭うのは目に見えている。

だが、ペン子は逃げた。

「シロクマクロさん乱暴は良くないと思います。みんな仲良くしましよっ？」

説得だった。

そう、たとえこのきぐるみがどんな力を秘めていようと、ペン子がそれを使わなければ発揮されることはない。

ペン子戦う意志なし！

とにかく逃げ回るペン子だったが、急にその動きがスローモーションになったかと思うと・・・停止した。

「ペンギンスーツが動かなくなりました」

ペン子ピーンチ！

大剣を抜いたポチが地面を蹴って疾走する。

「今助けるぞペンギン！」

偽パンダに振り下ろされる一撃。だが、その攻撃はいとも簡単に、鋼鉄のかぎ爪によって弾かれてしまった。

「このパンダ……できるッ！」

ポチは柄を握り直した。

すでに偽パンダは標的をポチに換えている。

うおおおん！

威嚇するように偽パンダは立ち上がった。その全長はなんとポチの二倍。決してポチの身長が低いわけではない。ポチは一八〇センチ以上あるのだ。

そんな偽パンダの頭めがけて、さらに高い位置から降ってくる人影。シャベルを振り上げたミケだった。体力はないがすごい跳躍力だ。

ドゴッ！

脳天クラッシュを喰らった偽パンダが目を回してピヨった。

だが、むしろミケのほうが衝撃でシャベルを握った手を痛めていた。

「いつてーっ！ マジ折れた手首絶対折れた、マジ死ぬ！」

手首を押さえながらのたうち回るミケ。

偽パンダがミケに覆い被さるうとしていた。

「逃げるエロリック！」

全速力でポチが走った。

ドスン！

偽パンダが倒れ地響きが鳴り響く。

ミケは？

ポチに抱きかかえられていた。

「オレは男にお姫様抱っこされる趣味はないぞ？（こいつオレを助けたのか？）」

「こつちもそんな趣味などない！（なぜ俺は　　）」
思いついてポチはすぐにミケを放り投げて遠くへ逃げた。
その行動の意味をミケもすぐに察した。

「（あいつ、オレの　サトリ　が届かないところに逃げたな）」
偽パンダは倒れたまま動かない。

ミケは恐る恐る偽パンダに近づく。

「どうやら気を失った……ん？（なんだこれ、背中にフアスナーがあるぞ！？）」

これは禁断のフアスナーだ。

テーマパークにいる幻想の住人たちの触れてはならぬ禁忌^{タブー}。

人は見るなどと言われると、どうして見たくなくなってしまふ心理が働く。多くの場合、それを破ったがために悲劇が訪れる。

鶴の恩返し、青髭、パンドラの箱、女性のすっぴん……例を挙げればキリがない。

ミケの手はすでにフアスナーへと伸びていた。

しかしミケが手を触れることなく、そのフアスナーは勝手に開きはじめた。

開かれた偽パンダの背中からまばゆい黄金の光が漏れ出した。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

それは蝶が羽化するように、偽パンダの中から謎の影が……
シャキーン！

超絶進化によってついにその真の姿を顕現させた前代未聞のスー

パーヒーロー！

赤いマフラーを風に靡かせ、ランニングシャツに股引に便所サンダル。

まさかコレは！？

パンダマン……じゃな……い……！

たしかにパンダの被り物をしているが、その顔はテライケメン！
そのときちょうどこの場にやってきたパン子。

「あ、お父さんこんなとこにいたの？　お母さんが呼んでるかから

早く来てよ」

そのままパンダマン貳号の腕を引っ張って家に入って行ってしまった。

家族が気づいてねえーッ！

ミケは深く頷いた。

「まあ、本人たちがそれでいいならいいんだよ」

やっとこの場に戻ってきた、やっぱり出なかったベルによってペングインスーツも修理され、これにて一件落着。

そして、みんなもこの場から去っていった……痙攣するパンダマンを残して。

誰も気づいてねえーッ！

番外編「G O G O パンダマン」

ちよー番外編 G O G O パンダマン

コンビ二の前で子供たちがシャーベットを食べていると、そこへあらわれる謎の影！

首に巻いた赤いふんどし靡かせて、冬でも夏でもオールシーズンランニングシャツ。

でも寒いから股引はいたりするけれど、股引って本来なにかの下に着るものでしょ？

そんなスネ毛カールで便所サンダル、今日も変態パンダマン！

「おうおう、子供の分際でアイスなんか食ってんじゃねーよ、笹でも食ってる笹でも！」

ものすごい言いがかりだった。

理不尽な変態。パンダの登場に怯える子供たち。

さらにパンダマンはケツあごを子供たちに近づけた。

「オイ、おまえらアイスの棒置いとけ」

恐喝だ、恐喝に間違いない！

きよとんとする子供たちに、パンダマンは青ヒゲをジヨリジヨリ子供のほおに押し当てた。

変態だ！

「おまえらにとってはたかがアイスの棒かもしれんが、わしにとつてはな……わしにとつては壮大な夢の一本なんだ！」

脅された子供たちは恐怖のあまり、まだ残っているアイスを投げ出して逃げた。

地面に落ちた溶けかけのアイスを三秒ルールで拾って食べるパンダマン。

「うまいー！」

一方そのころ。

一方そのころ、今日もいい汗を流したパンダマン貳号は、次のバイト先の歌舞伎町界隈へ向かっていた。

そんなときパンダマンは地獄二丁目に向かっていた。どうにか地獄を脱出しようとするパンダマンを追いかけてくる地獄の番犬。

今日はなにかと犬に縁のある日だった。

地獄の三丁目までやってきたパンダマンは力尽きた。

そんなとき、天から一本の糸が伸びてきた。

「これで腐れ地獄から脱出してやる。生き返って死ぬ前にステーキを食ってやる！」

パンダマンは糸を必死で登りはじめた。

それからしばらくして、ふと下界を見下ろすと、地獄の亡者どもが糸を登って来るではないがッ！

「てめーら糸が切れるだろ、降りろ降りろ！」

ここで糸が切れると見せかけて、突如糸がツルツルっと上で吸い上げられた。

スポン！

パンダマンは地獄の海　激辛ラーメンのスープの中から飛び出した。

そのまま頭に斬新な麺で作ったツラをかぶりながら、パンダマンは誰かの爆乳に飛び込んだ。

もにゅっと。

なにが起こったのかわからないパンダマンが顔を見上げると、そこには悪魔の形相をしたベルの姿が……

「このクソパンダ！」

怒りの鉄拳を喰らったパンダマンがぶっ飛ぶ。

鼻血ブーしながらパンダマンは呻いていた。

「わしの血が……血を補給するためにステーキを……」

息絶え絶えのパンダマンをスルーしながら、ベルはこの状況を瞬時に理解した。

「どうやら 歪み が発生して、どこかとラーメンが ゲート で繋がってしまったようね」

よくわからないけど、ソーユーことらしい。

ベルは胸の谷間からタバコとライターを出して、一息つこうとしたところで、まだパンダマンが生きていることに気づいた。

「アタクシの神聖な研究室を血で汚けがしてるんじゃないわよ！」

瞬時に白衣のポケットから殺虫スプレーを出して噴射！

シュゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！

発煙筒を使ったみたいにモックモクになったその場所で、パンダマンらしき影が四つん這いになって動いていた。

そして、煙が晴れたそこにいた驚愕の生命体 人面パンダ犬！

なんと怖ろしき珍獣。

「パンダなのに犬なんて白黒ついてねーじゃねーか！」

もともとパンダなのにオヤジだ。

人面パンダ犬はそう叫びながら逃げていった。

そして、人面パンダ犬は都市伝説となった。

繁華街のゴミ箱をよく漁っているという人面パンダ犬……。

そう、次はキミの町にも現れるかもしれない！

「こ、これはこれは偉大なる大魔王アーン様！」

《今まで連絡一つ超越さずなにをしておったのだ！》

「いやっ、それが……宇宙船が爆発し仲間たちも行方不明となり、このパソコンも修理が必要だったので、地球ではなかなか部品が見つからず」

「言い訳など聞きたくないわ！」

「申しわけございません大魔王アーン様」

「エロリック暗殺はどうなった！」

「それが……」

ブチッ。

いきなり通信が切れた。

ポチが横を見ると五つ子の一匹がノートパソコンを勝手にいじっていた。

「大魔王様との通信中になんてことを！ と思ったけど、まあいいか。このまま電源も落としておこう」

不慮の事故ということにした。

ペン子のストーカーをするミケのストーカーをするパン子とポチ。
「なんでアンタが！」 & 「なんで貴様が！」

ペン子とポチは顔を見合わせた。必然の鉢合わせだった。

今や同じ屋根の下に住んでしまっているが、この二人は顔を合わせる度にケンカが絶えなかった。

「ミケ様に指一本でも触れたら殺すから！」

「エロリックは必ず殺す！」

パン子の視線の端で動きがあった。

「あっ、ミケ様動き出した」

「本当だ。だが、どうしてエロリックはペンギンをつけ回しているのだ……腹が立つ」

「それはアタシも同感……って、もしかしてアンタ、ペンギンのことが好きなの！？」

「そ、それは……」

急に慌てだしたポチ。わかりやすい反応だった。

人の弱みを握ったパン子はニタ〜っとする。

「あのペンギンのこと好きなんだあ〜。だったら付き合っちゃえばいいじゃん？」

「馬鹿なツ！ 誇り高きワンコ族の貴族の俺が辺境の地の女となど

……」

「でも好きなんですよ？ ほらほらさっさとコクリやがれえええツ
！」

パン子は渾身の馬鹿力でポチの背中を押し飛ばした。

「うお〜〜っ！」

押されたポチはそのままペン子の元へ。

「あ、ポチさんこんにちは」

「こんにちは」

ドン！

ポチは止まれずそのままコケた。

「大丈夫ですか？」

ペン子に優しく手を伸ばされ、ポチは顔を真っ赤にして自ら立ち上がった。

「鍛えてるから大丈夫！」

と言いながら、鼻からブーしていた。

ペン子はハンカチを出して、鼻血を拭いてあげた。

目と鼻の先ほどの距離にペン子の顔がある。ふっくらした唇がそこに……そんなことされたら余計にブー！

「きゃっ！」

返り血を浴びたペン子。

血だらけのその姿を見てポチは悶々してきた。

「（駄目だ血を見たら興奮してきた。俺は誇り高きワンコ族の騎士だ、いつでも俺は冷静だ。よしっ、いける！）すまなかった、俺の血で貴女を穢してしまうなんて」

真剣な眼差しだったが、鼻血ダラダラ垂れ流し。

「謝らないでください、ヒナは大丈夫ですから。ヒナよりもポチさんが貧血にならないかと心配です」

「最近の良い肉食べてるから大丈夫！」

でも鼻血ダラダラ。

ペン子はどこかに持っていたタオルで血を拭き、ポチの鼻血もようやく治まったところで、会話が途切れた。

焦るポチ。

「（なにを話せばいいのだ。気まずいぞ、どっという会話をしたらいいのだッ！）」

ポチがなにか突破口がないかと辺りを見回すと、遠くで看板を掲げているパン子の姿が目に入った。

そこには『告白しろ！』と書かれていた。

挙動不審なポチをペン子が不思議そうな顔で見た。

「どうかしましたか？」

「す、す……スキヤキにしようと思う今晚の夕食は（なに言ってるんだ俺は）」

「おいしそうですね。でもお肉ばかりではなくてお魚もちゃんと食べてくださいね」

「ペ、ペンギンさんは夕食の献立は？」

「グミです」

「はっ？」

「ヒナはグミが主食なんです。お一ついかがですか？」

袋詰めグミを差し出された。

「一つ頂こう」

ポチが袋の中から摘んで出したのは、ペンギンの形のグミだった。それを知ったペン子はニッコリ笑顔。

「ラッキーですね、それ一個しか入ってないジャイアントペンギンです」

「ジャイアントペンギン？」

「絶滅してしまったと言われているペンギんです。でもヒナはきつと絶滅したのではなくて、お空を飛んで別の安全な場所に移住したのだと思うのです」

「ペンギンが好きなのか？」

「はい、幼いころからずっと好きです」

「そうか……俺も貴女のことか、す」

シャリン

鈴の音がしてポチは辺りを見回した。

ペン子も同じようにキョロキョロしていた。

急にペン子が真面目な顔をして、

「あの、綾織さんのことどうするおつもりですか？」

「綾織……エロリックのことか。どうするもなにも抹殺するのが俺の使命だ」

「そうですか……」

影のある表情をしながらペン子はうつむいてしまった。

ポチは言葉にできない苦しみに襲われた。

「（俺は……ペンギンのこんな表情……いつも笑顔なのに。しかし俺は絶対に使命を果たす。なぜならそれがワンコ族の為だからだ）
そう思い続けてポチは今もここにいます。」

「ニヤール帝国の政治は狂ってる。すべてはニヤール族の皇族どものせいだ。やつらは人を信じると言うことを知らない。知る必要もないと思っっている。裏切り者たちを次々と血祭りに上げ、やがて盲目的な疑いがすべての人に向けられる。種族の違うワンコ族はそのいい標的だ」

すべては サトリ があるがゆえに……。

ポチは拳を握った。

「すべては死んでいった同胞たちの復讐。そして、自由のある未来を勝ち取るため」

ずっとうつむいて話を聞いていたペン子が、哀しみの瞳をポチに向けた。

「憎しみはきつと新たな憎しみを生みます。その憎しみの芽を摘み続けるつもりですかポチさんは？」

「俺は俺の使命を果たさなければならぬ」

「憎しみや悲しみの連鎖は巡り巡ります。自分とは無関係だと思っていた人々まで輪が広がり、やがては親しく想っていた人にも憎まれるかもしれませんね。まるで世界そのものが自分の敵のように…
…そう、世界が自分の敵」

最後の言葉は呟きながら、まるで内に込めるような言い方だった。ポチの中でためらいが生まれた。

「（ニヤース族に憎まれ恨まれるのは覚悟の上だった。それはワンコ族とニヤース族だけの問題だったからだ）地球育ちのニヤース族の皇子か」

「もう輪は大きく広がっています。綾織さんはなにも知らずに育ち、ポチさんたちの争いには関係ないはず。なのにどうして傷つけようとするのですか？」

「（不安な要素は早いうちに摘み取らなければならない。やってることはニヤースの皇帝と同じだな）貴女はエロリックのことが大切なのだな」

「はい」

物陰でこれを聞いていたパン子は嫉妬の嵐。

「（ペンギン絶対クロス！）」

ついにパン子が飛び出した。

そのことに気づかずペン子は話し続けている。

「綾織さんだけじゃなくて、みんなのことが大切です。世界中のすべてのものが、みんなが幸せになればいいと思っています」

この言葉は頭に血の昇ったパン子の耳には届いていない。

「ミケ様はアタシのものなんだから！」

突然のパン子の登場にペン子はぼか〜んとしてしまった。

「ほよ？ 山田さんこんにちは」

その笑顔の挨拶がパン子の逆鱗に触れた。

「アンタなんかキライ！ アンタなんかいなくなればいい！」

「ヒナがなにかしたらなら、本当にごめんなさい」

辛い顔も、悲しい顔もせず、優しい顔をしながらペン子は謝った。さらにそれがパン子には気に入らなかつた。

「どうして……ミケ様はアタシだけのものなのに、ミケ様のことがスキなのに、スキなのに、大スキなのにいーっ！」

大粒の涙を流しながら顔をくしゃくしゃにした。

ペン子は無垢な笑顔だつた。

「山田さんはしあわせになつてくださいね。ヒナは応援しています」

「アンタに応援されても意味ないの！」

「でもヒナは本当に山田さんにしあわせになつて欲しいのです」

「だからキライ、本当にキライ、アンタなんか大ツキライなんだから……！」

いつもならそのままパン子は走り去つていた。だが、今日はずいにペン子に飛びかかろうとした。パン子の腕が強く握られ引き止められたポチに。

「そこまでにしておけるに堪えない。まだ止めないというのなら、誇り高きワンコ族の騎士はどんなことがあつても姫を守るぞ」

「……………」

パン子は目を丸くして、ポチの手を振り払うと、なにも言わず走つて逃げた。

逃げる最中、パン子は隠れていたミケと目が合ってしまった。

ハツとしたパン子はさらに大泣きしながら逃走した。

ミケはどうしていいかわからず、あの場所を去つた。

行く当てもなく町を歩き、意味もなくコンビニに入ろうとした。

そのコンビニの前に、同じ学校の男子生徒たちが、二人たむろつているのが見えた。

ミケは視線を合わせずに、そのまま横を通り過ぎようとしたのだが。

「（キモイのが来た）」

聞こえてしまった。

だがミケは構わずコンビニの中に入った。

ミケがマンガ雑誌の立ち読みをはじめると、男子生徒たちが話をはじめた。

「あいつ知ってる？」

「二年の転校生だろ？」

「あれ女装らしいぜ？」

「キモくね？」

「しかも人間じゃなくて、あのニツトの下に猫みたいな耳が生えてるらしいぜ」

「キモッ」

その会話はミケに聞こえていないつもりだった。

しかし、彼らの言うとおり、ミケの耳は人間のそれとは違っていた。

すべてを聞きながらミケは我慢した。

「（いつものことだな。オレの周りにいたヤツらに隠れて見えないだけで、本当はオレのことをよく思っていないヤツらなんていくらでもいる）」

これまでミケが経験して来たこと。なにも今にはじまったわけではない。

男子生徒がせせら笑っているのが見えた。

そこへ新たな男子生徒がやって来た。ミケのクラスメートだ。

クラスメートの男子はそこにいた二人組に挨拶をする。

「阿久藤先輩こんにちは」

「よお宇田桐。ちょっとこっち来いよ、あいつおまえと同じクラスだろ？」

指を差されたミケは顔を伏せた。

「はい、そうですけど？」

「キモくね？」

「えっ？（別に俺は……）」

戸惑う宇田桐だったが、もうひとりの先輩に、

「キモイよな？」

同意を強く促され、

「はい、キモイと思います」

心にも無いことを言った。

ミケはマンガ雑誌を持っていた手が震えるのを押さえられなかった。

「（また裏切られた。こうも簡単に、人は裏切る）」

同じクラスメートだったので、宇田桐の心は普段から聞こえていた。それにはミケに対する悪意は一つもなかったことを知っていた。だから余計に胸が痛かった。

相手は話を聞かれてるなんて思っていない。だからそのまま済ませればよかった。それがミケにはできなかった。

ミケは息を吐きながらマンガ雑誌を棚に戻すと、静かな足取りでコンビニを出た。

そして、三人の男子生徒を心の底から睨み付けた。

無言でそこを動かないミケ。

阿久藤が睨み返しながら口を開いた。

「なんだよ、キモイ目で見んなよ（こんな格好してんのに、ちんこ生えてると思ったらマジキモいな）」

ミケは言い返さなかった。言葉よりも拳が出ていた。

「あがッ！」

顔面に一発喰らった阿久藤が地面に転がる。

もう一人の先輩が突進して来たが、ミケは難なく躲した。殴られた阿久藤が目血走らせながら吠える。

「三人でやるぞ！」

先輩二人が同時にミケに襲いかかって来た。

残った宇田桐の心の声が、

「（どうしよう?）」

しかし、先輩たちを前にして抗うことはできなかった。

三人がかりでミケは襲われ、ついに腕を掴まれてしまった。

いくら体力がなくとも、一對一くらいなら負けない自信がミケにはあった。

だが、数に負けた。

気づけばミケはアスファルトに頬を叩きつけられ、体中を蹴られ踏まれていた。

痛みに耐えるミケの視線の先には、コンビニからこちらを見ている客や店員たち。誰も外に出て来ようとしない。巻き込まれるのは誰も好きはずがない。

もうミケは逃げる体力も残っていない。

目を閉じるミケ。涙を流すことはなかった。

「全部わかり切ったことだ」

やがて地面に一つ、二つと雨粒が落ちた。

急に降り出した雨。

周りにいた奴らがどこかに消えるのがわかった。気配が遠ざかっていく。

まだ誰も助けてくれない。

誰かの心が聞こえた。

「(なにあの耳、動いてる!?)」

ミケは少し離れた場所に自分の帽子が落ちていることに気づいた。

一生懸命それを拾おうと手を伸ばすが、届かない。

この猫の耳さえなければ人は助けてくれただろうか　こうなる

前に。

ミケの目の前で小さな手が帽子を拾い上げた。

「だいじょうぶお姉ちゃん？」

ミケが視線を少し上げると、そこには幼い少女が立っていた。

いたいけな少女。

丸く澄んだ瞳がミケとその耳を映し出している。

ミケは最後の力を振り絞って立ち上がった。

そして、乱暴に帽子を奪い取った。

その弾みで少女は転んでしまったが、ミケは構わず帽子を被り直し背を向けた。

少女が去っていく足音が聞こえた。

幼い声で少女が泣いている。

雨の中で少女が泣いている。

どこかで少女が泣いている。

ミケは酷く心が痛くなつて首につけている鈴を握りしめた。

そして決して振り返らずに逃げた。

多くのモノからミケは逃げた。

やがて寮の近くまで逃げ帰ってきた。

誰とも会いたくなかった。特に知り合いとは絶対に会いたくなかった。

しかし、その願いすらも裏切られた。

そこにはペン子がいた。

「どうしたのですか綾織さん!？」

傷つき薄汚れたミケを見て驚いたようだった。

すぐにペン子は近づいて来たが、ミケは残っている精一杯の力で押し飛ばした。

「来るなよ!」

「どうしたのですか?」

「心配したふりするなよ」

「ヒナは心から綾織さんのことを心配しています」

「良い子ぶりやがって。どうせおまえもオレのことを! (クソッ、なんでこいつの心だけ聞こえないんだ!!)」

心が聞こえることにより傷つき。

聞こえないことにより恐怖を覚える。

ミケはなにも信じられなくなっていた。

だから心にもないことを……

「おまえのこと嫌いなんだよ!」

世界が静まり返った。

悲しい顔をしたペン子の瞳から、一粒の涙が流れ頬を滑り墜ちた。涙は地面で四散して消えた。

土砂降りの雨の音。
痛む胸。

ペン子は何にも言わず去っていった。

その姿が、あの泣きながら去っていった少女と重なった。

第7話「メタモルフオーゼ」

ドンドンドンドンドンドン！

ミケの部屋のドアをタコ殴りするパン子。

今日でミケが学校を休んで三日。

その間、パン子は毎日通い詰めたが、扉が開かれることはなかった。代わりに一度だけドアを蹴った衝撃と音があった。

今日もめげずに部屋のドアを叩き続けるパン子ちゃん。

「（アタシ負けない！）」

ドンドンドンドンドンドン！

ガッン！

中からドアを蹴る音がした。

「うつせーんだよパン子！」

ついにミケの声があった。

パン子は一步前進した気分だった。

「ミケ様、学校行きましょうよー。今日もお弁当作ってきました。な、なんと砂糖入りの厚焼きたまごですよー！（ちよっとコゲちゃったけど）」

ガチャ。

カギの開く音がした。

そして、勢いよくドアが開かれドゴッ！

パン子は鼻を強打した。

「うつつ、ミケ様……開けるなら先に言ってくださいよ」

「うるせーな」

そこにはミケが立っていた。立っていたのだが、立っているのはいるのだが、立っている姿を見てパン子は眼を丸くして驚愕した。

「ええええつミケ様?!」

「なんだよ?」

「だって、いつもと……」

いつも被っているニットキャップはなく、髪の毛も黒じゃなくて白銀。しかも、男子の制服を着ている！

「ミケ様、不良になられたんですかーッ！」

「ちげーよ。髪の毛はこつちが地色なんだよ」

睨まれたパン子はさらにミケの違いに気づいた。

「あっ！？ ミケ様って黒い瞳でしたよね？ 赤に変わってるーッ！」

「赤じゃなくて緋色だよ。今まで黒いカラコンで隠してたんだよ）そう、オレはなにもかも偽っていた」

瞳の色まで見ているパン子のストーカーっぷり。

なぜミケのことなら気づくのに、父親が変わっていても気づかないのだッ！

パン子は急にモジモジして顔を真っ赤にした。

「（ミケ様テライケメン。女装も良かったけど、まさか男装するとここまでとは。ああん、素敵すぎて萌え死ねる。今日もごはんがおいしく食べれそう）」

そんなパン子を放置でミケはさっさと学校へ向かった。

ミケの登校は瞬く間に騒ぎとなった。

あの可愛かったミケちゃんが不良の道に走った。

そんな噂が口々に囁かれたが、

「（あたしこつちのほうが好きかも）」

女子のウケは好いようだった。

しかし、男子生徒たちの見る目は良いものとは言えなかった。

ミケを睨む者、蔑む者、避ける者。今日のミケの姿だけが関係しているのではなく、どうやらこの三日の間に不穏な空気が流れたらしい。

ミケのことを睨んでいるヤツも、パン子が通り過ぎると笑顔で挨拶をする。さらにペン子に笑顔を向けられると顔がゆるむ。ついでベルが通り過ぎると背筋を伸ばして、九〇度に頭を下げる。

この学園にいる変わった女子三人は、決して嫌われ者ではない。たとえパンダでもペンギンでもデビルでも、中身である人間性によって好かれたり慕われたりウニヨウニヨウニヨウされたりにしているのだ。

しかし、ミケの態度は転校初日から今日まで変わらず、人を避け、素っ気なく扱い、ときにシカトした。人望があるとは言えなかった。もともとアンチミケの流れがあることを、ミケ自身も気づいてはいたが、それが表面化してくることはなかった。

「（生ぬるい環境でオレの感覚が鈍ってたんだな）」
キツカケに後押しされた流れは、急速に事を荒立てていく。そのキツカケはおそらくアレだろう。

ミケの前から上級生の面々がやって来た。

「（オレが殴ったセンパイか。後ろからも気配がするな）」
振り返るとやはり後ろからも獣の群れがやって来た。

全部で二十人くらいだろうか。どんな格闘の達人であつても、この数を倒すのは現実的ではない。

逃げるにしても、ここは狭い廊下だった。

ミケは天井を見上げた。

「（もつと高ければあいつらのこと飛び越せるのにな）」
次に開かれた教室のドアを見た。

そこしかないと判断したミケは急いで教室に駆け込んだ。すぐに轟き声が後ろから迫ってくる。

廊下では逃げ切れないという判断は正しかっただろう。

しかし、こことて袋の鼠。

ネコなのにッ！

教室にある二つの出入り口は塞がれた。

ミケは窓を見た。

「（二階なら平気なんだけどな。ここ三階だもんな、飛び降りたら足折りそう）」

危険を感じた無関係の生徒たちが教室を出たり、端に寄ったりして嵐に備えた。

一斉に襲いかかって来る男子生徒たち。

ミケは突進して来る生徒を跳び箱のように飛んだ。

机や椅子が倒され、瓦礫の山を築いていく。

軽やかに机の上に飛び乗ったミケ目掛けて椅子が飛んで来た。椅子を投げたのはあのミケに殴られた阿久藤だ。

椅子を躲そうと机を蹴り上げたとき、力が入り過ぎてバランスを崩してしまった。

「（ヤバイ！）」

と思つたときには倒れて、脇と肋骨を椅子の背に強打していた。

歯を食いしばりながら床に転がったミケ。

すぐに何人も男子が飛び乗って来た。

山の下敷きになったミケは窒息しそうだった。

「引きずり出せ！」

誰かが言つた。

ミケは足首を掴まれた。そのまま床を引きずられた。机や椅子に体中をぶつけたが、奴らが構うことはない。

両腕も左右の二人によつて固定され、背中に誰かが乗った次の瞬間には、顎を持ち上げられ海老反りにさせられていた。

上に乗った阿久藤がミケの耳を引っ張つた。

「ギヤアアアッ！！」

強烈な痛みでミケはのたうち回リたかつた。だが、体は身動き一つできないように押さえつけられている。

耳が引き千切れそうだった。

下卑た高笑いが聞こえて来る。

「この怪物野郎！ キモイ耳なんかつけてんじゃねーよ、アハハハハハ！」

ミケじゃない声がする。

「気持ち悪い耳で悪かつたな、この猿どもがッ！」

その声は？

ドガッ、ドゴッ、ズゴン！

次々と男性生徒が倒されていく音をミケは聞いた。

「なんだよコイツ!? コイツにも耳があるぞ!」

そう、この場に現れたのはポチだった。

ポチは次々と向かってくる猿どもをタコ殴りにしていく。

気づけばミケの上に乗っている阿久藤以外、全員泡を吐きながら気絶させられていた。

ミケは頭を後ろに大きく振り上げて阿久藤の顎に頭突きを喰らわせた。

「ガグツ!」

怯んだ阿久藤は思わずミケの耳から手を放していた。その隙にミケは全力で立ち上がって背中から阿久藤を振り下ろした。

阿久藤は尻餅について背中を床に打ち付けた。

反抗的な緋色の瞳でミケは阿久藤を見下す。

激昂した阿久藤がミケにタツクルした。

避けられなかったミケはそのまま椅子と一緒に押し倒され、再び阿久藤がミケの上に馬乗りになった。

「この野郎そんな眼で俺を見るなツ!」

阿久藤の拳が何度も何度もミケの顔面を殴った。

ポチが阿久藤の襟首を後ろから掴んで、そのまま引つ張るように投げ飛ばした。

瓦礫の山の中につつこんだ阿久藤。

そして、そのまま気を失った。

この騒ぎを聞いて駆けつけたパン子が前のドアから飛び込んで来た。ほぼ同時にパン子がもう一つのドアから入って来た。

パン子はパン子を確認するとプイっとそっぽを向いた。

ミケは見るも無惨な姿だった。

顔は痣だらけで腫れてしまい、鼻や唇から血が出ている。

すぐにパン子はハンカチを出して駆け寄ろうとしたが、先にパン子がポケットティッシュを出して駆け寄った。

「ミケ様大丈夫ですか!」

「近寄るなよ！」

ミケは立つのもやつとであったが、うまく上がらない手でパン子を振り払った。

よろめきながら歩き出すミケ。ペン子はただ見つめるだけで近づけなかった。

しかし、次の瞬間！

ミケは椅子を倒しながら転倒し、そのまま気を失った。

ベッドの上で目覚めたミケ。

目を開けた先にはポチがいた。

「なんでいるんだよ？」

「貴様が気を失ってる間に報復がないとも限らん」

「報復するならアンタがオレにだろ？」

「誇り高きワンコ族はニヤース族のような卑怯者ではない。やるなら正々堂々と戦う」

「いっそのこと意識がないうちに殺して欲しかった」

体中が痛い。悲しいほど痛い。

痛みで悲しいのではなく、この痛みの元凶になったモノが、痛みの大きさと比例しているように悲しさを呼び起こす。

ポチは天を仰いだ。

「ニヤース族で サトリ の能力を持つ者は忌み嫌われる。辺境の地であるここですら、貴様は嫌われ者だ」

「知ってるよ」

「そんな能力は不幸しか喚ばない（あるべきではない力だ）」

「オレもそう思う」

ミケ自身ももっとも痛感している。自分の人格を形成した要因で、大きな割合を占めているのはこの能力にほかならない。

ミケはベッドから体を起こした。

「オレと戦え」

「傷ついた貴様とは戦えん（無惨な貴様に勝ったとしても、後味の

悪さを一生背負いそうだ)」

「真剣勝負にコンディションなんて関係ねーだろ」

鬼気迫るほどミケの眼差しは真剣そのものだった。

それにポチは根負けした。

「（傷ついた躰にも関わらず、戦うことを決意した戦士の申し出を断つては、逆に恥じる生き方をしたことになる……か）いいだろう、しかし勝負をするからには一切の手を抜かん」

「オレは端から全力でやるつもりだ（それで死ねればいい）」

二人は屋上へ向かうことにした。

まだ授業中で誰の邪魔も入らないはずだ。

屋上は潮風が吹いていた。

少し離れた位置で対峙する二人。

ポチがミケの足下に鞘に入った長剣を投げた。

「俺の予備の剣だ。せめて武器くらい持て」

「オレに武器なんか与えて後悔するぞ」

二人は鞘から剣を抜いた。

どちらも仕掛けない。その場に立ち、神経を研ぎ澄ましている。

ポチが口を開く。

「ペンギンのことどう思ってる？」

「嫌いだ。アンタは好きなんだろ？」

「うるさい、人の心を勝手に聞くな！（本当に嫌な能力だ）」

「（別に サトリ で聞かなくても見ればわかるけどな）どうしてこんな話した？」

「貴様がペンギンのこと影でこそこそ尾行しているからだ（どう考えてもペンギンのことが好きとしか）」

緊張を解いてミケがフツと笑った。

「ペン子のストーカーしてたのはな、あのきぐるみを脱ぐ瞬間に立ち会いたかったからだよ」

「変態かッ！」

「違いわボケッ！」

神速のツツコミだった。

ミケはその理由を語りはじめる。

「ペン子には サトリ が効かないんだよ」

「サトリ の能力でもすべてを知ることができないと聞いたぞ？」
ミケ以外の事例の予備知識ならば、ポチのほうも豊富かも知れない。
い。

「オレもそう思ってる。けど、まったく聞こえないなんてありえない。だからオレはあのきぐるみのせいじゃないかと思って、脱ぐ瞬間をずっと狙ってたんだよ」

「サトリ の能力は多くを知ることができるが、ときに酷く盲目なのだ。 サトリ の能力が効かない人間がいると、それが心配の種になるというわけだろうか？（貴様は サトリ の能力なしで人の心を知る方法を知らんのだな）」

「サトリ の能力で人の心を聞いた方が確實だよ。人はウソをつく」

「人を信じられないことは悲しいな」

「信じないんじゃない、事実が聞こえてしまうんだよ。だからオレは人といられない、孤独なんだ」

その言葉にポチが首を横に振りながら言う。

「事実……すべてが聞こえないというのに事実か。ペンギンの心は見通せないのにな」

「……………」

言葉を失ったミケは、すべてを消し去るように、がむしゃらにポチへ斬りかかった。

ポチはミケの一撃を大剣で受け、そのまま薙ぎ払った。

剣ごと押し飛ばされたミケはそのまま激しく地面に転がった。手から離れた長剣。これが最後の力だった。

もう本当に身動きできないミケに、ポチは大剣を振り上げた。

ミケが死を望んでいることを、 サトリ などなくともポチは感じ取った。

一瞬のためらい。

強い風が屋上に吹き、その風と共に現れた真つ赤な男。

「犬っころ、我が息子から離れてもらおうかッ！」

そこに立っていたのはバロンだった。

ポチは大剣を下げた。戦う意志は消えていた。鞘を拾い上げるポチはミケとバロンに背を向けていた。

「邪魔が入ったから戦いをやめるのではない。貴様は決して孤独ではないからだ」

ミケはこれまで多くの出会いと決別を経験してきただろう。きっと最後はことごとく別れたはずだ。

しかし、バロンだけはずっと傍にいた。姿を消したポチ。

バロンが手を貸そうとしたのを無視してミケは自力で立ち上がった。今は手を借りる気にはなれなかったのだ。

「我が息子よ、その怪我はあの犬っころにやられたのか？」

「違う。その前に学校のヤツらにやられた」

「またか。我が輩の目から見て、この学園は今までの中ではマシだと思ったのだがな」

「今までの中ではな。でもどこも同じだよ、結局は」

ミケはバロンを置いてこの場をあとにした。

まだ生徒たちは授業中だが、ミケは構わず寮まで戻って来た。

部屋の中に入るとすぐにベッドで横になろうと思ったが、テーブルの上に牛乳パックが置いてるのを見つけて足を止めてしまった。

「（親父がしまい忘れたんだな。オレには絶対飲むなって言いながら、親父は牛乳大好きだから毎日飲んでるよな）」

ミケは牛乳を片づけるのも面倒で、そのまま通り過ぎようとしたのだが、

「（牛乳アレルギーだから飲んだら死ぬぞって言われてるんだけど、飲んだ記憶すらないんだよな。本当に飲んだら死ぬるのか？）」

牛乳パックを手にとって、口を開けて匂いを嗅いだ。それだけではなにも起きない。

「（こんな世界滅んじまえばいい。でもそれは無理なのはわかってる。だとしたら道は一つだ）」

ミケは牛乳を一気飲みした。

パックのままでは飲みづらく、口の端から白い液体が垂れ流れる。空になるまで飲み干したが、なにも起きなかった。

「牛乳ってうまいな（しかもなんか力が湧いてきたような）」
現に身体の痛みが消えていくような感覚だった。

ドグウンツッ！

急に心臓が大きく脈打った気がした。

「うっ……身体が……（クソツ、なんだこれは!?!）」
呼吸が乱れ、動悸が激しくなる。

「（これがアレルギーか）」
胸が苦しく身体が熱い……しかし気分は昂揚していた。

「（なにか……来るぞ!）」
ドグウンツッ！

ミケの身体が跳ね上がった。

白銀の髪がざわざわっと動き、凄まじい早さで伸びはじめた。
ドグウンツッ！

今度は臍が膨れ上がり上半身の服が破れた。露わになった皮膚は白銀の短い毛で覆われている。

ミケの視線の先で、自らの手の爪が鋭く、まるで猛獣のように伸びはじめた。

手の甲も毛に覆われてしまった。

そのとき、玄関のドアが開きバロンが帰って来た。

「今帰ったぞッ！ 我が息子よ帰っておるか……なんとあるまじき！」

バロンはそこに気高く立っている獣を見た。

白銀の鬣たてがみを噴き出す氣によって靡かせながら、燃えるような緋の

ドゴオオオオン！

ロケット弾はミケに直撃して大爆発を起こした。

煙が晴れると、窓の吹き抜けがだいぶ良くなっていた　　という
か、窓側の壁がすべて崩れ落ちていた。

しかし、そこにミケは立っていた。

美しい白銀の毛。そこに一滴の血すらついていない。

ベルが叫ぶ。

「うんこ漏れそう！」

このチャンスを逃してはならないとベルはトイレへ駆け込んだ。

ミケは明確な目的はないらしく、そこにある机や椅子を滅茶苦茶
にひっくり返して暴れた。いや、戯れていると言ったほうがいいか
もしれない。

そんな教室が大惨事になっている中、パン子は一番後ろの角席で、
すっかり熟睡していた。授業中に眠くなったのだから仕方がないッ！

生徒たちの大半はすでに避難して姿を消してしまった。数少ない
逃げないで見守る者の中にペン子がいた。

そして、勇敢にもペン子はミケに近づいた。

「綾織さんその姿どうしたのですか？」

いつもと変わらぬ笑顔で投げかけた。

だが、急にミケはその標的をペン子に定めた。

鋭い爪をペン子に振り下ろされる！

「させるかエロリック！」

キンッ！

大剣がミケの爪を退けた。

ペン子を守るように立つポチの姿。

「姫をお守りするのは騎士の勤め（今日の俺は決まってる！）」

ガルルルルル！

ミケが低く喉を鳴らした。

大剣を構えてポチはペン子を後ろに下がらせた。

「安全な場所に。どうやら今のエロリックは半端な超獣化ちやうじゆうかをして、

さらに自我が保てないらしいな」

寝ぼけているパン子が手を挙げた。

「はい先生、超獣化ってなんですかー」

そう言っただけ寝た。

「超獣化とは我ら獣人の一部が有している変身能力のことだ。学者たちは先祖返りだと言っているが、俺は進化だと思っている。超獣化した者は強力な力を手に入れるからだ。しかし、理性や知能が著しく低下することが多く、本能の赴くままに行動することを考えると、先祖返りという説が正しいのかも知れない。変身の切っ掛けには個体差がある……俺の場合は大量の血によって、エロリックの場合？」

「牛乳だ！」

と言っただけ現れたのはバロンだった。

ピュピュピュ……

アラームのような音が響いた。

バロンの時計の音だった。

「おっと、営業の時間だ。では諸君、さらばだ！」

バサツとマントを翻しながら姿を消したバロン。

そんなこと構わずミケとポチは戦いを繰り返していた。

大剣はその大きさゆえに小回りが利かず、ミケの爪の攻撃にかなり踏み込まれてしまう。

そしてついに覚醒おぼめるパン子！

「きゃっ、なにあの狼男！」

寝起きで驚いたパン子にペン子が教える。

「綾織さんです」

「ペルシャ猫男だったの!？」

ミケとの戦いで手が離せないポチだったが、どうしても修正したくて叫ぶ。

「ニヤー帝国の皇族はアルビノの獅子。つまりホワイトライオンだ
！」

「ライオンってネコじゃないじゃん……ポチって意外にバカなんだ」
フンと笑うパン子の横で申し訳なさそうにペン子が、

「ライオンさんはネコ科の動物ですよ」

「えええっ！」

動物園の娘に衝撃が走った。さすが名ばかりの山田どうぶつ園の娘だ。

追い詰められたポチはついに狂剣の力を解放しようとした。

「止むを得ん。我が狂剣ウルフアングの力を今こそ」
などと言ってる間にミケはパン子に襲いかかっていた。

「やめてミケ様！」

しかし、パン子の声はミケに届かなかった。

鋭い爪が振り下ろされる。

すぐにポチがパン子の前に回り込む。

「疾風斬り！」

難い大剣がミケの腕を斬った。

ウオオオオン！

鋭い爪はポチに振り下ろされた。

「クッ！」

後方に大きく飛ばされたポチ。その漆黒の鎧の胸当てには、深い爪痕が穿たれていた。

「鎧を着ていなければ確実に即死だったな……」

互いに牽制し合うミケとポチ。

その間にペン子が立った。

「もうケンカは止めてください。これ以上誰も傷ついて欲しくありません」

しかし、その声すらミケには届かず、あろうことかその牙をペン子に向けようとしたのだ。

そのときだった！

「待ちな！」

その声にミケは動きを止めた。それほどまでに鬼気迫る男の声だ

った。

「今日こそパンダだけに白黒つけようじゃねーか。帰ってきた正義のヒーローパンダマン参　ぶげッ！」

ミケのフックパンチを喰らったパンダマンは、吹き抜けのよくなった窓から飛んでいった。

自分で飛ばしたパンダマンを追いかけてミケが外に飛び出した。猫の習性だ。

ペン子も三階から飛び降りてミケを追う。

校庭に出たミケはパンダマンをボールにしてじゃれている。

「うぎゃ〜殺される〜いてーマジいてー！」

血だらけになるパンダマン。

一方そのころ、ホストからIT社長に転身したパンダマン三号は、一〇〇億円の契約書にサインをしようとしている、まさにそのときだった。

そのとき、パンダマンは血だらけになりながら、地面に血のサインを残していた。

『知ってるか？パンダのしっぽって白なんだぜ？わしは今日知った』
そんなこと書いてるヒマあるなら逃げるよ。

ペン子は両手を大きく広げて叫ぶ。

「もうやめてください！」

ミケはペン子に飛びかかった。

両手を広げたままペン子はそのを動かさず、自分の胸に突進してきたミケを力一杯受け止めた。

「傷つくのも傷つけるのも……もう嫌なの！」

高ぶった感情で叫んだペン子は、そのままミケに押し飛ばされて地面を何度も何度も転がった。

ペンギンスーツがペン子の体を守ったが、頬は少し擦りむいてしまった。

壁のない教室の縁に立つペン子は泣いていた。

「あんなのアタシがスキなミケ様じゃない！」

今までミケに邪険に扱われても一途だったパン子が、ついにミケを突き放した瞬間だった。

立ち上がったパン子は再び両手を広げた。

再びミケがペン子に飛びかかる。

ペン子はそれを全力で受け止め、ミケの躰を強く抱きしめた。

「あなたは孤独じゃない。だからひとを拒まないで……」

しかし、再びペン子は押し飛ばされて地面を転げ回った。

トイレから戻っていたベルがいつの間にかパン子の横に立っていた。

「ペンギンスーツの実力を持つてすれば、あんなネコ簡単に始末できるのにねえん」

まぶたを腫らしたパン子の中で気持ちが悪巻いていた。

ミケに襲われたときの恐怖。鋭い爪があと一歩で自分の身体を切り裂いていた。そのときにミケと自分との間に、大きな隔たりがあると感じてしまった。

でも……

「ミケ様はアタシが助ける、絶対に元に戻してあげるんだから！」

「それこそアタクシの求める青春ねえん！」

ベルは歡喜に打ち震えて身もだえたが、

「でも、ただのきぐるみでどうやって立ち向かうつもり？ 弱点で

も知っているのかしらあん？」

「そうだ、ミケ様は寒いのが苦手！」

「ふん、ならアタクシが少し手を貸してあげましょうねえん」

そう言ってベルが自慢げに白衣のポケットから取り出した、謎のコントローラー。

ジャジャーン！

「気象コントローラーよおん！ このコントローラーを操作して雪にセットしてボタンを押すと……」

ゴオオオオオオオオ！

いきなり猛吹雪に包まれ視界がゼロに等しくなった。もうペン子

とベルのいる場所から、ミケやペン子は確認できない。

吹雪に紛れた白銀のミケ。その姿はペン子にも発見できなかった。ペンギンスーツには防寒機能もついていたが、ここであえてペン子はペンギンスーツを脱ぎ捨てた。

吹雪に包まれるペン子。かろうじて両手を広げる輪郭だけが見えた。

白に閉ざされた世界の向こうから、獣の咆吼が聞こえた。

雪を蹴り上げてミケがペン子に襲いかかった。

鮮血が雪の上で迸り、刹那に消えた。

腕から血を流しながらペン子はしっかりとミケの躰を抱きしめていた。

「ヒナの心の音が聞こえますか？」

ミケはペン子の胸に抱かれながら、その心臓の音を聴いた。

穏やかすぎるほど落ち着き、一点の乱れもなく、心地よく脈打つ心の音。

風に乗ってミケの毛が抜け落ちていく。

そして、膨れ上がった筋肉が徐々に縮んでいき、ペン子の胸の中にはいつものミケがいた。

「……ペン子……子？」

薄れゆく意識。まぶたが重く閉じていく。

気を失ったミケの身体が膝から崩れた。

ペン子はミケのことを優しく包み続けた。

やがて吹雪は二人の身体を雪に沈め、冷たく閉ざされた世界に封じ込めた。

燦然と輝く日差しがまぶたを照らす。

ミケは目を覚ました。

雪解けの春が訪れたような温かい陽気。

「ミケ様ー！」

雪を掘り起こしたパン子がミケを見つけた。瞳に涙を溜めながら

も、歡喜に満ちあふれた表情をしていた。

サトリ で聴かなくとも、その表情がなにを意味するかミケは強く感じ取った。

ほかのクラスメートたちも心配そう顔、嬉しそうな顔をしながら、ミケとペン子を雪の中から掘り起こしていた。

ミケは自分の身体がペン子に包まれていることに気づいた。いつもと同じペンギンのきぐるみを着たペン子に。超獣化したあとの記憶がミケはあやふやだった。それでもおぼろげに残る記憶から、暴れ回り、ペン子を傷つけてしまったことは覚えていた。

ミケのすぐ目の前にあるペン子の顔は微笑んでいた。

「綾織さんだいじょうぶですか？」

「……ああ」

その笑顔にミケは癒された気がした。

見つめ合う二人。をペン子が引き裂いた。

「ペンギンのクセになんでミケ様に抱きついてるの信じらんない！」
パン子は雪の中からミケを引っ張り出して自分が抱きしめた。

ぼわ〜んとしながらペン子は、

「吹雪の中でペンギんさんたちがおしくらまんじゅうをして、体を温め合う行為をハドリリングというのです。今回は二匹だけでしたので、そう呼べるかわかりませんが」

「そんな話聞いてないしー！」

わめくパン子をうつとうしそうにミケは押しのけた。

「オレに抱きつくなよ」

だが次の瞬間、膝が崩れて倒れそうになったのを、いつかミケのことを裏切った宇田桐が肩を貸して助けた。

「あのときは本当にごめん」

涙を流していた宇田桐にミケはなんと声をかけていいかわからなかった。

ただ、小さく頷いて見せた。

白銀の獣。

飢えた獣はなに飢えていたのだろうか？

「……みんなありがとう」

ミケは小さく呟いた。

そして、校庭の真ん中には二つの尻尾が雪の中から生えていた。片方の尻尾が丸くて黒いことは言うまでもない。

番外編「ぺんぎん番長」

金属バットから滴り落ちる血。

青痣や血だらけになって気を失っている青年の山の頂に、そのセーラー服の“少女”はいた。

長袖のブラウスは返り血で真っ赤に染まり、バットを握る手もぬめりとしている。

“少女”にはここにいる男たちに、ほとんど見覚えがなかった。

中高生、それに無職の未成年、中には成人男性も混ざっていたかもしれない。多くの男たちが“少女”に襲いかかり、そして半殺しにされた。

折り重なった人の山の中から男が這い出して来た。その男はナイフを握り締め、“少女”の背後から突進して来た。

“少女”は呆然とそこに立ちつくし、一点の曇りもない蒼穹をただ眺めていた。

もはや男は体力も残っておらず手元が狂ったのか、ナイフは“少女”の脇腹を掠めたかのように見えた。だが、それでも刃は肉まで達し、鮮血が滲み出す。

バットを握る手に力が入った刹那、“少女”は振り向きざまにバットを横振りにして、鈍い音と共に男を薙ぎ倒したのだった。

“少女”は無表情だった。

空はあんなにも澄み渡っているのに、“少女”の心は晴れない。

“少女”はバットを投げ捨て、どこにいる持ち主に返した。そして、この場をあとにしようとした。

すると、前から“少女”と年代代か、少し幼いくらいの同じセーラー服の少女が駆け寄って来た。

「姐さん！」

手を振って寄って来る少女に“少女”は視線すら合わせなかった。知っている顔ではあった。同じ中学、同じ施設で暮らしている茜と

いう少女だ。

施設で暮らしていると言っても、そこにはほとんど帰っていない。帰る場所など自分にはないと“少女”は思っていた。

すでに両親はこの世にいない。その後、一人暮らしの祖母に引き取られたが、いつしかその祖母もさじを投げた。原因が自分にあることは“少女”もわかっていた。

しかし、“少女”は世界に反抗し続けた。

世界とはすべて。環境やそこに住む人々や運命そのもの。

“少女”は運命に抗いたかったのかもしれない。

だから“少女”はいつも独りだった。

「姐さんケガはないツスか？」

それなのに、今はこの茜に付きまとわれている。いくら振り払っても茜を付いて来た。

はじめのうちはそれが鬱陶しくもあつたが、今はそれが心に、心になにか感じたからこそ、さらに“少女”を閉ざした。

毎日のように喧嘩に明け暮れ、やがては誰も“少女”に手を出さなくなった。

それによつて“少女”は喪失を感じ、さらなる孤独を感じた。

今まで自分を育てて来た人たちや、面倒を看てもらった人たち、

“少女”はその人々に“いらぬ子”の烙印を押され続けた。

そして、再びのその烙印を押されたのだ。

喧嘩という形であれ、“少女”と関わりを持っていた奴らも、もういない。

気がつけば茜すら“少女”の前に顔を出さなくなっていた。

はじめは気にもしなかった。はじめから受け入れるつもりがなかった茜が消えても、気にすることではない筈だった。

しかし“少女”は自分と茜を引き受けている施設に足を運んでいった。

施設にいる子供たちは、明らかに嫌な顔をして“少女”を出迎え、

大人たちは表面的には温かく迎えた。

“少女”にはすべてわかつていた。

大人のそういうモノは、幼い頃から感じ取っていた。

この場所に茜の姿はなかった。

さらに大人たちに尋ねると、皆口を濁した。

癪に障った“少女”は男性職員の胸倉を掴みすべてを吐かせた。

“少女”を襲う酷い喪失感。吐き気がするほどだった。

茜は死んだ。

悲しみよりも、なぜか憎しみが沸いた。

なぜか茜のことが憎くて憎くて……でも、その先には悲しみがあつた。

さらに職員を問い詰めると、茜はどうやら男と一緒に、男の部屋で死んでいたらしい。それ以上のことはわからないと言った。

“少女”は職員の顔を殴り倒し、そのまま施設を飛び出した。

多くの記憶が埋ずもれていくような感覚に陥った。

世界が色を失い、音さえも忘却された。

ただ聞こえて来るのは茜の声だけ。

いつそこに立ったのかは覚えていない。

“少女”は髪を風に靡かせながら、歩道橋の柵の上に立っていた。世界が揺れた。

空が墜ちていく。

“少女”の躰に伝わった衝撃。

しかし、その衝撃はとてもやわらかいものだった。

「これはこれはお嬢さん、どこにお出かけかな？」

“少女”は驚いてそのシルクハットの男の顔を見た。そして自分がその男に抱きかかえられていると気づいた。

世界に色と音が戻ってきた。

「我が輩はこの通り、地獄から天国へ向かうところだ」

シルクハットの男は後ろから追いかけてくる強面の男たちに目をやった。

「地獄の鬼どもがしつこくてな。逃げ切れぬと思っていたところにお嬢さんが降って来た。空から何か降って来た日は、我が輩はいつもツイておる。さしずめお嬢さんは幸運の女神ということだ」

「わたしが幸運の女神なんてありえない！」

「少なくともまだ我が輩は不幸にはなっておらんがな」

シルクハットの男は“少女”を抱えたまま走った。途中で降ろすこともできたのに、なぜかそのまま走り続けた。

やがて煌めく海が見えてきた。

「海を渡って隣の国に渡れば奴らも追いかけては来られんだろう」

「えっ、ウソでしょ!？」

シルクハットの男は歩道を飛び出し砂浜を駆けだした。そのまま本気で海に向かっていている。

「わたし泳げない！」

“少女”の叫びを聞いてシルクハットの男は急に足を止めた。

「ならば計画変更だ……と言っている間に鬼どもに追いつかれてしまった」

十数人の男どもに取り囲まれていた。

「もう逃がしやしねーぞこのペテン師野郎！」

男の一人が吠えた。

シルクハットの男は“少女”を砂の上に降ろした。

「ペテン師とは失礼な。喰らえ我が偉大なる奇術 アイン・ツヴ

アイ・ドラいつ！」

ゴキツ、シルクハットの男の腰が鳴った。

殴った二人の男とも共にシルクハットの男は砂の上で身悶えた。

その間にほかの男どもが襲ってこようとしていた。

“少女”が拳を握る。

吹き荒む風。

血の嵐。

男どもは一人残らず片付けられた。

シルクハットの男は息を吹き返しニカッと笑った。

「その気高き薔薇のごとき姿、我が輩の妻にそっくりだ」

そして、シルクハットの男はどこからか、棒付きのクルクルキャンディを取り出した。

「我が輩の命を救ってくれたお礼と、友情の証に受け取るがいいッ！」

そのキャンディを見た“少女”は、蕾が花開いたような満面の笑みを浮かべた。

つい先ほどまでの殺伐した戦いが嘘のように、“少女”とシルクハットの男は和やか海岸線を歩いた。

「我が輩の息子もお嬢さんのように強く育ってくればよいのだなあ」

「息子がいるの？」

「赤子の時から貧弱でな。ひねくれておって、ちょっと変わった子だが、愛すべき我が息子だ」

なぜか“少女”は涙が零れてきた。

シルクハットの男はハンカチで“少女”の目元を拭いた。

「塩水などここにはいくらでもある、もう十分足りておるよ」

「変な人……」

「変な人ではないぞ、我が輩は偉大なる奇術師だ。お嬢さん、なにが好きなものはあるかね？」

「ねことペンギン」

「それは結構なことだ、実に素晴らしき。我が息子も昔テレビでやっておった『ペンギンのマジカル大冒険』が好きだった。我が輩と同じ奇術を使うペンギンが、空を飛んだり、悪党を懲らしめたりする……そんなアニメだったか？」

この奇術師を名乗る男は、どこからか一枚のチケットを取り出した。

“少女”がそれを受け取ると、シルクハットの男はマントを翻して歩き出した。

「また運命が交差すれば出逢えることもあるだろう。さらばだ未来

ある少女よ、はっははっ！」

風のようにシルクハットの男は消えてしまった。

“少女”の手元に残ったチケット。それは水族館のチケットだった。

水族館はすぐ目と鼻の先だった。

“少女”は誘われるように水族館に向かった。

平日でも水族館は人で溢れかえっていた。

何種類もの魚たちや海の動物たちがいたが、“少女”の目的は一つだった。

ペンギンの水槽。

生のペンギンを見たのはこれがはじめてだった。ペンギンはおろか、水族館にきたのでさえはじめてだった。

「これがペンギン」

愛らしい姿で歩くペンギンたち。そうかと思うと、水の中では驚くほど俊敏に華麗に泳ぐ。

まるで空を飛んでいるようにペンギンたちは水の中を泳いでいる。

“少女”は今見ているすべてを心に刻んだ。

この記憶は数少ない“少女”の大切なモノとなる。
絶対に忘れない。

“少女”は時間の経つのも忘れ、ずっと水槽に張り付いて見ていると、

「ペンギン好き？」

女の声でハツとした。

白衣を着た女がタバコを吸いながら水槽の前に立っていた。

“少女”は鋭い眼で女を睨み付けた。

「ペンギンの前でタバコ吸わないで」

「きつとペンギンだってタバコ吸いたいわよ」

「そんなはずないだろ！」

「アタクシの故郷のペンギンはタバコも好きだったし、空も飛んでたわ。こっちの世界のペンギンは……ただ可愛いだけね」

まだ“少女”が睨んでいることに気づいて、女は火のついたタバコをそのまま白衣のポケットに入れた。

“少女”は女のことを無視して再びペンギンに魅入ろうとした。だが、

「ペンギンのこと好き？」

「……………」

「ねえ、ペンギンのこと好き？」

「……………」

“少女”は仕方がなく頷いた。

すると女は笑った。

「もつと素直にしてたほうが可愛げがあるわよ。ねえ、ペンギンになってみない？」

唐突な言葉に“少女”は理解こそできなもの、なぜか大きく頷いていた。

そして、“少女”はペンギンのヒナへ…………

記憶のカケラ「赤い靴の少女」

閉ざされた暗闇。

目を開けたその場所も、今は酷く寂しかったように思える。

いつものように、まるで同じ日が繰り返すように、砂場だけが二人の世界。

たしか……そうだ“少女”は“赤い靴”を履いていた。

いつも足を引きずっていて、まるでその歩き方が……似ていた。

「おまえぺんぎんみたいな歩き方するんだな」

「ぺんぎん？」

“少女”は目をまん丸にしてオレに尋ねた。

「そうだよ、ぺんぎんだよ。おまえぺんぎんも知らないのか？」

「なあにぺんぎんって？」

「ぺんぎんってカツコイイんだぞ。空を飛んだり敵と戦ったりするんだ」

「ミケちゃんはぺんぎん好きなのお？」

「大スキに決まってるだろ」

「じゃあ もスキになる！」

抜け落ちた夢。

「 とオレは今日からぺんぎんスキの仲間だな！」

どうしてもそこが欠落している。

これは過去の記憶なのか？

それともただの夢なのか？

あの“少女”は誰なんだ？

まどろみ。

そして、世界を壊すように未完成の砂の城が踏みつぶされた。

「砂場から出てけよ、いつもおまえたちばかりここで遊んでんなよ……」

オレはガキ大将を殴っていた。

そして、泣きながら何度も謝る“少女”の姿。

オレは堪らずもう一度ガキ大将に殴りかかるうとした。

しかし“少女”はオレの手を引いて逃げた。

どこまでも逃げた。

二人の世界を探して逃げたんだ。

すぐに息を切らせてオレは一步も動けなくなってしまった。

ブロック塀に寄りかかるオレに、

「ありがとう」

と“少女”は言った。

オレはなんだか照れくさくて、

「別に、オレはおまえのことキライじゃないから、守ってやったんだよ」

「

「のことキライじゃないの？」

「おまえのことキライじゃないよ。スキだよ」

「もミケちゃんのことスキになっていいの？」

「勝手にしろよ」

「うん！」

それから、そう……たしか……

「ミケちゃんに　　の大切なものあげる。あしたまた会おうね」

“少女”のその言葉が頭から離れない。

明日また会おうって言われたのに、オレは会わなかった。

次の日は雨が降っていて外に出かけなかったんだ。

その翌日も雨は降っていて、その激しさを増していた。

その日は親父に連れられて嫌々外に出たんだった。

この公園の横を通り過ぎようとしたとき、オレは驚いてしまった。

雨の降る寂しい公園に“少女”はいたんだ。

慌てたオレは傘を投げ捨てて、とにかく無我夢中で“少女”のも

とへ駆け寄った。

オレを出迎えた温かな“少女”の笑顔。

でも、微笑む唇は紫色をしていて、青白い顔で震えていた。

この寒い雨の中、どのくらいオレのことを待っていたのだろうか？
“少女”はオレにある物を手渡した。

黄金に輝く大きな鈴。

「ミケちゃんにこれあげるね。これをつけたら、ミケちゃんが近くにきたとき音でわかるから」

オレはその受け取った鈴を……投げ捨てたんだ。

「おまえもオレのこと気持ち悪いねこの耳が生えたやつだと思ったんだろ！」

鈴は猫の耳が生えたオレへの当てつけかと思ったんだ。

“少女”は酷く悲しい顔をしながら嗚咽を漏らして、オレのことをじつとただ見つめていた。

オレは公園を飛び出した。

入り口には親父が立っていたが、親父の手も振り切ってオレは走った。

あやふやな世界。

頭に残り続ける激しい雨の音。

雨は次の日も降り続き、やがて晴れた明るる日。

オレは“少女”に謝りたくて、あの公園に行った。

でも、そこには“少女”はいなかったんだ。

砂場に行くと、そこには泥を被った薄汚れた大きな鈴が落ちていた。

服で拭いてやると、それは黄金に輝いた。

こんなに鈴は輝いているのに、それを見ていると心が苦しくて堪らなかった。

それからオレは二度と“少女”に会うことはなかった。

親父の都合で町を出るときも、ずっと黄金の鈴を握り締めていた。

この鈴だけは決して手放さない。

絶対に失ってはいけないものなんだ。

第8話「二人の煌めく獅子が交わるとき」

ズゴオオオオオオオオオン！！

突如、星空から落下して来た帚星が砂浜に激突し、砂塵が噴火したように天高く舞い上がった。

砂嵐はやがて潮風によって流され、クレーターの中心にある謎の楕円状の物体が姿を見せた。

楕円状の物体は貝が口を開くように、ゆっくりと天井部を稼働させる。

その中から人影が立ち上がった。

月光を浴びて輝く白銀の軽鎧^{けいがい}。

風に靡く白銀の髪の上で小刻みに動く獣の耳。

自らの長く伸びた尻尾を手元で弄びながら、瑞々しい唇で艶笑を浮かべた。

「薄汚れた空気……まさかこんな辺境の地に 聖杯 があるとはな」
玲瓏な声音がさざ波の音と共に響き渡った。

休日の朝、女装プラス白銀の髪とネコミミを隠すニットキャップ姿のミケは、とある部屋の前に立っていた。

ドアが開き玄関から出てきたのは、笑顔のペン子だった。

「おはようございます綾織さん」

「おは、おはよう……（なに慌てるんだよオレ）」

「なにかご用ですか？」

「いや……そのさ……今日ヒマ？」

明らかにミケは動揺しているそぶりだった。

不思議な顔をしてペン子は首を傾げる。

「ひまですけど？」

「あのさ、親父から水族館のタダ券二枚もらったんだけど」

「行きます！」

即答だった。

この会話を物陰から聞いていたポチとパン子。

「なぬーッ！ あれは明らかに許せん抜け駆けだ」

「ミケ様が、アタシのミケ様が……ペンギンとデートなんて！」

ポチとパン子は互いに顔を見合わせ、深く頷いて示し合わせた。

さっそく水族館に出かける二人を追って、地獄の果てまでストーカーしてやる！

水族館は家族連れやカップルでごった返していた。

しかもパン子は写メを撮ろうとする人々に囲まれてしまう。ペン

子は快く写メに応じるが、その間ミケは不機嫌そうな顔をしていた。

そして、パン子も人に囲まれていた。

ポチはというと、今は変装で目立たない格好をしており、耳もニット帽を被って隠している。

「これではペンギンを見失ってしまうではないか」

「下手するとパン子とはぐれそうだな」

「「え？」」

ニット帽とニットキャップの二人が顔を見合わせた。

ミケが声を荒げる。

「なんでポチがいんだよ！」

「たまたまだ、たまたまに決まってるだろう！（貴様とペンギンの尾行しているなど言えるか）」

「聞こえてるぞ」

「卑怯だぞその能力！」

「オレだって聴きたくて聞いてるんじゃないよ！」

二人が言い合っていると、やっと解放されたパン子がやってきて、遅れてパン子もやってきた。

ここでパン子とパン子が鉢合わせ。

「おはようございますポチさんと山田さん」

「お、おはよう……（最悪）」

ばつが悪そうにパン子はいさつを返した。

明らかに三人はこの状況を痛いほど把握しているが、のほほんとしたペン子はわかっているのだろうか？

「お二人も水族館に遊びにきたのですか？」

「そうです！」

ポチ即答。

ペン子はポチとパン子を見つめて、にっこり微笑んだ。

「ではポチさんと山田さんはデートなのですね」

このセリフは死の呪文級の攻撃力だった。

思わずフリーズするポチとパン子。

数秒してパン子が解凍した。

「勘違いしないで誰がこんなヤツとデートなんか！ そっちこそアタシを差し置いてミケ様とデートなんてしないで！」

「うーん、言われて見ればデートに見えますねヒナと綾織さん」

ここでミケがムキになつて、

「別にデートなんかじゃねーよ、親父からタダ券もらったから、誰でもよくなって」

「だったらアタシを誘ってくださいよー！」

パン子はミケの肩を持ってブンブン揺さぶった。

こっちも解凍したポチは、

「（ペンギンと二人つきりにさせんぞエロリック）では、せっかくだから四人で水族館を回ろう」

「それがいいですね」

笑顔でペン子は同意した。

仕方がなく四人で水族館を回る事になった。

いろいろな水槽を見て回っているうちに、いつの間にかミケの横にパン子、ポチの横にペン子という配列になっていた。

「（ふふっ、勝つたなエロリック！）」

その声を聴いたミケは振り向いて思いつきりポチを睨んでやった。やがて四人はペンギンの水槽の前まで来た。パン子は軽くスルーしようとしたが、ミケの腕を引っ張っても動かない。仕方がなくペ

ンギンを眺めることにした。

ペン子はあまり楽しそうな顔をしていなかった。穏やかな表情ではあるが、どこか哀しげな。

「本当は一年に一回しかここにこないのです。特別なその日にだけ、悲しかったり、辛かったり、嬉しかったり、たくさんあったその日の思い出がここにはあるから」

ペン子の横顔を見つめていたミケは目を伏せた。

「ごめん、誘ったりして」

「いいのです、ぺんぎんさんを見られるのは嬉しいですから」

二人の間に流れる空気に断ち割って入るペン子。

「ミケ様イルカショーがはじまるらしいですよ。行きましょ行きましょ」

強引にミケの腕をグイグイ引つ張ってペン子行ってしまった。

シヨースタジアムに続く渡り廊下は橋のように下が空洞になっている。

ペン子は途中で立ち止まって、海のほうを指差した。

「あ、赤い風船が飛んでるー」

同じ方向を見たミケは殺気のようなものを感じた。

シユオーーーーーーン！

衝撃波の音がした刹那、崩れ落ちる渡り廊下。悲鳴があげなら人々が落ちていく。

ミケはペン子を抱きかかえどうにか無事に着地した。ペン子とポチも無事のようにだ。

しかしほかの人々は瓦礫の下敷きになったり、落ちた衝撃で負傷した者がほとんどだった。

「オレが狙いなのか？」

ミケはポチに顔を向けた。

「俺はそんな連絡受けていないぞ（通信拒否していたが）」

不甲斐ないポチには任せておけず、新たな刺客がミケを狙いに来たのかもしれない。

突如、轟音を立てながら床が割れた。衝撃波が通った道だ。その道はペン子に続いていた。

「きゃっ！」

ペン子の身体が何十メートルも後方に飛ばされ、道路を走っていた車にぶつかって、さらにそれでも勢いは治まらず、車ごと近くの店に突っ込んだ。

事故の煽りを受けた車が次々とクラッシュして、辺りは大惨事となった。

白銀に輝く小柄な影を見たポチは驚愕せずにはいられなかった。

「獅子煌帝アレック、どうして貴様がこの星にいるのだッ！」

煌帝と呼ばれた者はまだ幼い子供だった。

「ほう、暗黒公子ポチではないか。戦線を離脱したと聞いていたが、こんなところで会おうとはな。目的は余と同じか？」

「（同じ目的だと？ 奴の目的はいつたいなんだ？）」「

「違うのか、ではなぜここにいる？」

ポチがなにかを考える前に、アレックの サトリ で聞こえてしまったのは、

「（皇帝ということ……まさか、オレと関わりがあるのか）」「

ミケの心の声だった。

見る見るうちにアレックの表情が増悪に染まり、全身の震えを押しさえられずにいた。

「ありえん。そんな偶然が許されてたまるか。そこにいるのは女……

……いや、まさか、そのアルビノ特有の白い肌と髪、そしてよく見れば緋色の瞳。馬鹿なッ！」

刹那にしてアレックはミケの懐に入り、そのままミケを押し倒して馬乗りになった。

「この亡霊めッ！」

叫びながらアレックはミケの帽子を剥ぎ取った。そして、眼を剥いて嗤った。

「クッ、クハハハハハッ、兄上か、貴様が兄上か、なぜこんなと

ころにいる？ 今頃現れて何になるというのだッ！」

アレックはそのままミケの首を締め上げた。

「くっ……（オレは同族にまで命を狙われてるのかよ）」

しかしミケを救おうとしたのはワンコ族であった。

薙がれた大剣を躲すためにアレックがミケを残して飛び退いた。

「ほう、それが噂の狂剣ウルフアングか。余の獅子王剣とどちらが強く残酷か試してみるか？」

アレックが鞘から長剣を抜いたと同時に衝撃波が趨った。

間合いを詰めることはおろか、躲すことすらできずにポチの胸は血を噴いていた。

膝から崩れ落ちるポチを見てアレックは嗤った。

「弱すぎる、弱すぎるぞ暗黒公子。だが余の一撃を喰らっても躰が断絶されぬとは、肉体だけは強靱と見える」

「肉体ではない、心が強靱なのだ。俺の本来の目的はエロリックの抹殺だったが、俺がエロリックに憎しみを覚えることはなかった。

しかし貴様は違うぞアレック！」

傷口が開くのも顧みずポチはアレックに斬りかかった。

「貴様はニヤー帝国を具現化した悪そのもの、絶対に殺さねばならないのだッ！」

地球にやって来てからというものの、いつしか平和な飽和状態の中にポチは浸りきっていた。だが、アレックの出現はポチの中に眠っていた憎悪を蘇らせた。

ポチの渾身の一撃が振り下ろされた。

ぶつかり合う金属が吼えた。

刃を交え、その先で視線を合わせる二人。アレックの躰が押されている。

押しているポチの躰が見る見るうちに変わりつつある。

しかし、アレックが一気に力を込めて剣ごとポチを押し返した。

「暗黒公子ともあるうものが、下品な戦いをするのだな……超獣化するつもりかッ！」

ポチの着ていた服が弾け飛び、躰が膨れ上がると共に骨格が變形していく。黒く長い毛が全身を覆い流れ、四つ足の大狼が吠えた。ウオオオオオオン！！

大狼の巨大さは象ほどもあり、それよりも遙かに俊敏で獰猛だった。

巨大な鉄球のような大狼の前足がアレックに襲いかかる！

アレックは突きの構えで迫ってくる足を迎え撃った。

「ぐわッ！」

強烈な一撃を喰らって弾き飛ばされたアレックだが、その刃は前足を貫通していた。

首を大きく振りながら吠える大狼。暴れ狂いながら刺さった剣を口に啜えて抜き捨て、さらにその口から地獄の業火を吐いた。

刹那にして辺りは火の海に沈んだ。

その海の中から長剣を構えたアレックが飛び出した。

「死ねーッなにい！？」

勢いづいていたアレックの目と鼻の先に現れたミケ。強烈なパンチがアレックの頬を抉った。

しかし、殴られバランスを崩しながらも、アレックの刃は大狼の肉を深く突き破った。

剣が刺さったまま大狼がのたうち回る。

アレックの顔が憎悪に彩られる。

「おのれーッ、心臓を外したではないかッ！」

だが、心臓に近い位置に剣を突き立てられた大狼は苦しみ藻掻き、やがては床の上で痙攣して躰の自由が利かなくなってしまった。

アレックは髪の毛を掻き毟った。

「過去の亡霊が今更なぜ黄泉返つたのだ。貴様のせいで、貴様のせいで、余の人生は破滅だーッ！」

「オレがてめえの人生になにしたってんだよ！」

互いに素手で殴り合い、腕が交差したと同時に二人揃って頬が抉られた。

衝撃により後方に飛ばされたアレックは床に手を付き、ミケは躰の側面から床に落ちて転がった。

ゆっくりと立ち上がったミケは両手を膝について息を切らせている。対照的にアレックは息一つ切らせず嘲り嗤っていた。

「クククツもう体力の限界か？ まさか指環リングをなくしたのではあるまいな？」

「（リング……オレが親父に拾われたときに持ってた指環やちわか）」

「そうだ、そのリングだ。サトリの能力を制御し、アルビノである我らに力を与える。なるほどリングを持たぬから貴様の心の声が聞こえたのか」

「そつちからは聞こえて、こつちからは聞こえないわけか。こつちの立場になってわかったけど、最低だなこの能力」

今までと立場が逆転したミケ。あまり心地の良いものではなかった。

素早く動いたアレックは離れた場所に落ちていたウルフアングを拾い上げた。

「白獅子の血統は余だけで十分！」

斬りかかってくるアレックをミケは躲そうとするも、思うように脚が動かずもつれてしまった。このままでは斬られてしまうというとき、両手を広げたパン子のアレックの前に立ちはだかった。

「ミケ様は殺させない！」

「どけ女ツ！」

アレックは重い大剣を両手から片手に持ち替えて、手のひらでパン子の頬を叩き飛ばした。吹っ飛ばされたパン子が道を開け、アレックはそのまま大剣を薙いでミケを斬ろうとした。

だが、そこにミケの姿はない！？

「もうやめてください」

ミケを抱きかかえそこに立っていたのはペン子だった。

ペンギンスーツは汚れ、衝撃波を喰らった背中には小さな亀裂が走り、そこから火花が散っている。

アレックは正直驚いたようだった。

「生きていたのか 聖杯 の宿主」

「ヒナが 聖杯 の宿主？」

「知らんのか、貴様の内に封印されているという パンドラの箱と、その中にあるという 聖杯 を？ それとも惚けているのか？」

「それはいつたいなんなのですか？」

ペン子の表情を見る限り本当に知らないらしい。それにはアレックも納得したようだ。

「封印のせいか声が聞こえん」

ミケ同様にアレックにもペン子の心の声が聞こえないらしい。

ならばとアレックは語りはじめる。

「余の目的は 聖杯 の探求。 聖杯 とは仮の名で、実際のところはそれがなにかわかってはおらぬ。宇宙法則を覆すほどの強大な力とされているらしいが、詳細は不明だ。

余はそれを手に入れようと思ったが、封印の解き方がわからぬ。ならばそのような得たいの知れぬ力は人の手に渡る前に破壊するまでのこと。

兄上、貴様に出会ったのは偶然だ。本当に腹の煮えくりかえる偶然だ」

すでに床に降ろされていたミケは心の底から自分の運命を呪った。「偶然のせいでオレは兄弟に命狙われるのか。生まれたときから本当に嫌な運命だな」

それを聞いたアレックの顔に憎悪が浮かぶ。

「嫌な運命だと？ 余の背負わされたモノに比べれば生ぬるい。このような平和呆けた世界で生きてきた貴様など、幸運すぎる」

「てめえになにがわかるんだよ！」

「貴様こそ余のなにがわかるというのだ。余の苦しみは余にしかわからぬ。誰よりも余の苦しみは過酷なのだ！」

ペン子が凜として言い放つ。

「苦しみは比べるものでも、比べられるものでもありません」

「貴様に余のなにがわかるのだ。女のくせに腹が立つ、今すぐ斬って捨ててくれる！」

大剣を構えたアレックの懐にミケは忍び込んだ。

「させるかッ！」

ミケのアップパーカットが決まった。

しかし、アレックは狼狽えずに大剣を振るった。

それをペンギンの羽翼フリッパーで受け止めたペン子。だが受けきれずにフリッパーは切断されてしまった。だがもう片方のフリッパーでアレックを叩き飛ばした。

「ごめんなさい！」

すぐに謝るペン子だったが、彼女のほうが重傷に思われた。片腕が完全に消失していたのだ。

言葉も出ないミケの視線を感じたペン子は笑った。

「だいじょうぶですよ、この通り」

ペン子はきぐるみの中に引っ込めていた腕をひょいっと出した。どうやらフリッパーを切断される寸前に腕を引っ込めたらしい。

しかし、なぜかペン子はすぐに出した腕をきぐるみの中にしまっってしまった。

フリッパーの一撃で何メートルも飛ばされていたアレックは、ゆっくりと立ち上あがると口から血の混ざった唾を吐き捨てた。

「互いに守り合う存在か……余は今、明確な目的を決めた。やはり

聖杯 は諦める」

その言葉を聞いてペン子は表情をやわらかくして、なにか言おうと口を開いたが、さらにアレックは続けた。

「その女を殺すことが兄上を苦しめる方法だとわかったからだーッ！」

斬りかかって来るアレック。ペン子はその場から逃げないつもりだ。残った腕を広げてアレックを受け止めようとした。

ミケは体力がもう残っていなかったが、命を削る思いでアレックに飛びかかった。決死の突撃はアレックが躲す隙も与えず、二人は

「な……なにを……」

「クハハハハッ、もう貴様にはなにもない。躰を動かす力も、サトリ さえも失われたのだ。今の貴様にはなんの取り柄も残されていない。生きる価値などないのだ！」

「生きる価値はあります！」

叫んだのはペン子だった。

狂気を浮かべたアレックはペン子を睨む。

「あとは貴様だけだ。貴様を殺せば、それで本当に兄上にはなにもない！」

アレックは大剣を拾い上げ、鬼気を纏いながら飛翔した。

「そうはさせぬぞ 吉・弐・参！」

紅いマントが翻されアレックを呑み込むほどの光の玉
光氣弾こうきだん
が放たれた。

謎の一撃を受けたアレックを尻目にバロンが叫ぶ。

「ひとまず我が息子と逃げるのだッ！」

ペン子はすぐにミケを抱きかかえたが、そこで戸惑った。

「みなさんを置いてはいけません！」

「あとは我が輩がどうにかする、行け未来ある少女よッ！」
切迫した状況で、ペン子は心を決めて逃げ出した。

「逃がすかーッ！」

アレックが再びペン子に襲いかかろうとしていた。

だが、ここでバロンが！

「すまん、忘れ物だ！」

バロンの手からペン子へ小さな輝きが投げられた。

それは指環だった。

ペン子はそれを取ろうとするが、ミケを抱えて逃げることに必死だったので、上手くキャッチできない！

指環はペン子の頭上を越えて

「金目の物だーッ！」

叫んだパンダマンにキャッチされ、そのまま強奪された。

逃走するパンダマンを追ってペン子もその場から逃げ出したのだ。
った。

番外編「アレキサンドライトの光」

血みどろの戦場、屍の山から聞こえて来る呻き声。
白銀の軽鎧が朱に染まっていた。

十二歳の誕生日をアレックは戦場で迎えた。

皇帝に即位したのは八つの時。それから常に最前線で戦い続けた。ニヤール帝国の政治は暴力と恐怖による圧政。それ故に獅子の王者は自らが戦うことによって、その権威を示さねばならなかった。闘神に昇華され崇められ恐怖されることが、皇帝の生き残る道だった。煌めきは短い。

太古の煌帝たちは戦乱も多く短命であったと伝わっている。だが近年になってからは、その地位は確立され、長い統治をした煌帝も存在した。

しかし、先代の煌帝は短命であった。

長らく起こっていなかった内戦が勃発したからだ。

実際の生死は明らかになっておらず、行方不明になったのちも長らく公にされずに隠されていた。数年が経ったのちに崩御が国民に伝えられ、新たな煌帝が即位した。早すぎる即位だった。

アレックは屍の中に虫の息の自国兵を見つけた。

「役立たずめ」

唾を兵士の顔に吐きかけ、さらに頭を踏みつぶして足を小刻みに動かした。

「うっ……うっ……（煌帝陛下……お助けを……）」

「汚い声で鳴くな、鬱陶しい」

長剣が兵士の首に振り下ろされた。

切り落とされた首はアレックによって蹴られ、死の山を転げ墜ちて逝った。

歴代の煌帝の中でも、アレックの残虐性、攻撃性、カリスマ性は抜きに出ており、まさに獅子王に相応しいと側近たちは持て囃す。

長い歴史の中で培われて来た、彼ら特有の価値観による賛美。

怨念に満ちた呻き声がそこから中からあがって来る。

皇族に伝わる指環は サトリ の能力を制御できる。

あえてアレックはそれをせずに聴いた。

「クククツ、ハハハ、ハハハハハハハハハハッ……！」

狂気に満ち溢れたアレックの嗤い声が死の丘に木霊した。

戦場から帰還すると、側近たちが誉れの口上を述べようとするが、アレックは早々に人を避けて湯浴びに向かった。

広い浴槽にただひとり。

通例では何人も侍女たちが皇帝の躰を流していたが、アレックは常にひとりで湯を浴びた。

桶に溜めた湯を頭から被ると、足下が紅い水に浸る。

深い溜息。

アレックはなだらかに膨らむ乳房に手を添えた。

また少し大きくなったような気がする。

「気持ち悪い」

この胸を見る度に心臓が苦しくなり、やがて吐き気がしてくる。

すぐにアレックは浴室を出て、身体を拭くと早々に服に着替えた。

肌は極力隠し、厚着をする。

言い知れぬ苛立ちを覚えながら自室に入ると、そこには優雅なド

レスを着た母が椅子に腰を掛けアレックを待っていた。

「お帰りなさいサンドラ」

「もうそのような名前と呼んで欲しくない」

母は明らかに哀しい顔をした。

アレックには二つの名があった。

アレクサンダーにして、アレクサンドラ。男と女の名。

愛称はアレックにしてサンドラ。

生まれた時につけられた名がアレクサンドラ。

兄が行方不明になったのちにつけられた名がアレクサンダー。

アレックは女でありながら皇帝として育てられた。

しかし、それに反して影で母はアレックを女兒として扱い続けた。
「新しいドレスがあるの、着て見せて頂戴」

母が差し出したドレスはフリルがふんだんに使われた、いかにも女の子らしい可愛い服飾だった。

手を伸ばしかけたアレックだったが、否定するように首を横に振った。

「母上、もうこんな真似やめていただきたい。余は皇帝アレクサンダー二世・デス・ニヤーなのです」

「貴女はサンドラ、わたくしの可愛い娘」

「できることなら……余もできることなら……」

アレックは瞳に溜めた涙を隠しながら母の胸に顔を埋めた。
優しく包み込まれる母の温もり。

苦しい胸の葛藤。

母から得る甘い誘惑の安らぎ。

急にアレックは母の体を押し退けた。

「いけません。女々しさは弱さに繋がる」

「女々しいですか……」

「そう、皇帝は雄々しくあるべきなのです」

「戦乱の時代には相応しい言葉ですわね。戦うことが男の領分。平和だった時代が懐かしい……リックが生まれたあの瞬間が、わたくしの幸せの絶頂だったのかもしれない。貴女も別の環境で生まれていれば、女性として生きられたのに」

常日頃から母はよく兄の名を口にした。その度にアレックは憎悪を膨らませていった。

「兄上は死んだのです」

「いいえ、きつとどこかで生きております。あの時、掴んだあの子の尻尾が抜けさえしなければ、時空乱流に吸い込まれることはなかったのに。しかし、ニヤルマリンの指環が、あの子をきつと守ってくださいます」

「いいえ、兄は死んだのです」

「リックさえ帰って来れば、貴女はもう煌帝を続けなくて済むのですよ」

「何を今更！」

過ぎ去った過去は返って来ない。

煌帝になったことは本望ではないが、過去を無かったことにはできない。

もう兄は絶対に死んでいなければならなかった。

「余は引き返せないのです」

アレックは小さく呟き、母を立たせて背中を押した。

「お帰りください。今はひとりになりたい」

母を無理矢理部屋から追い出し、アレックはベッドに飛び込んだ。近くにあつた人形を抱き寄せ、膝を抱えて丸くなる。

「なぜ余はこんな苦痛を強いられるのだ。時代か、社会か、父上か、それとも母のせいか！」

薄汚れボロボロになった人形が強く握り締められた。

「（男児として育てることを決めた父に恨みをぶつけたくとも、もう死んでいる。復讐などできる筈もない）」

だからと言って母を恨むことはできない。心を許せるのは母だけだ。

では、この恨み、誰にぶつければいい？

「（兄上、万が一どこか遠い場所で生きているのなら、余は貴様を恨む。貴様さえいなくなれば、貴様がいなくなったのがいけないのだ）」

行方不明になったことは兄の意志ではなく事故だ。それでもアレックは見たこともない兄を恨んだ。そうするほかになかったのだ。

アレックが独りの世界に浸っていると、それを壊すように部屋の扉が激しく叩かれた。

不機嫌そうな顔をしてアレックが扉を開けると、側近の一人が慌てた様子で詰め寄って来た。

「ワンコ族が攻めて参りました！」

「なぜ、なぜ今更ワンコ族が……ろくな兵力も持つてはおらんだらう」

「それが長らく続く我が国の内戦を影で手引きしていたのがきやつらしいのです」

「クククツ、面白い。レッドムーンに追放されてもまだ懲りぬのか。いいだろう、今度こそ一匹残らず根絶やしにしてくれよう！」

その日から、戦渦は瞬く間に広がり、人々は血の雨の中で苦しみ藻掻いた。

戦いが激しさを増す中で、アレックは力を求めた。

すべてを圧倒する絶対的な力。

アレックは自分が女でありながら煌帝を演じることに劣等感を感じていた。故に異常なまでに力を欲した。

そして、ワンコ族もまた力を求めていることをアレックは知る。

宇宙の秘宝。

パンドラの箱 と 聖杯 。

ワンコ族の手には渡せない。

そして、アレックが向かった先は 地球。

第9話「対を成すモノたち」

しとすと……しとすと……

雨粒が落ちる音。

外は肌寒く静かな雨が降っていたが、ミケは温かさに包まれながら目を覚ました。

「オレは……？」

視線の先には優しい顔をしたペン子の姿。ミケはペン子に抱きしめられていた。

「だいじょうぶですか綾織さん？」

「ダメだ……疲労感で腕を持ち上げる気力もない。ほかのみんなは？」

「わかりません。でもきつとだいじょうぶです、偉大なる奇術師のバロンさんがついていきますから」

いったいなにが起きたのか？

アレックに力を奪われた。体力も サトリ の能力も。けれど本当に サトリ の能力を失ったのだろうか？

そこにはなにも変わらないペン子がいた。

サトリ の能力を失っても、ペン子に対する印象や想いは変わらない。

優しい笑顔。

果たしてそれを信じていいのだろうか？

ミケは苦悩の表情を浮かべる。

「実はオレには人の心が聞こえる能力があったんだ。今は失われたけど、失われる前からペン子の心の声は聞こえなかった。それが不安で仕方なかったんだ」

「そんな能力があったのですね。でもどうして不安なのですか？」

「世の中には嘘をついたり裏切ったりする人間がいる。心の声が聞こえないと言うことは、それが見抜けなくて、いつ人に裏切られる

のかビクビクしなきゃいけないんだ。サトリ を失った今、とても怖くて仕方ない」

「ヒナのこと怖いですか？」

数秒間、ミケはペン子の瞳を見つめていた。

そして

「怖くない」

正直な言葉を伝えた。

にっこりと微笑むペン子。

「でしたらほかの人のことも怖くありません。人の心の中が覗けなくても、人は人を信じます。みんなそうやって生きていますから、綾織さんにもできます」

世の中には疑い深い人間もいるだろう。だが、それがすべての人ではない。

「でもオレは怖いんだ。できればもう誰にも会いたくない ペン子以外には」

「バロンさんにもですか？」

「親父なら大丈夫かも知れない」

「では山田さんは？」

「微妙だけど大丈夫な気がする」

「ポチさんは？」

「あいつは……オレの命を狙っているけど、信じられないのとはまた話が別で……」

「ほかにもクラスのみんなや、ミケさんが知っているみんなのことを、ひとりひとり考えてみてください」

これまでミケのことを裏切って来た人間もいた。それがすべてではないことをミケは知っている。

ミケは『起こるかもしれない』『起こらないかもしれない』『そういった不確定な未来への不安に労力を費やして来た。起こらなかったとき、それは費やした労力が無駄になり、起こったときは費やした労力の上にさらに労力が加算される。頭ではそれがわかっていて

も、人は未来に不安を覚える。

「わからない。わからないっていうのが正直な気持ちだと思っ」

サトリ の能力で人の心が聞こえていたときも、聞こえなかった今になっても、どちらも『わからない』のであれば、サトリの能力とはいったいなんだったのだろうか？

たしかポチが サトリ の能力が盲目だと言っていた。

「オレは サトリ があろうがなからうが信じることをしなかった」
ミケは重く暗い表情をした。

その重苦しい雰囲気をぶち壊すようにふすまを開けて源さん^{げん}がッ！

「テレビを見る！」

腹巻きに股引姿が誰かを彷彿とさせる爺さん。

ミケはいろんなモノが吹っ飛んだ頭で眼を丸くした。

「誰だよこの爺さん！」

すぐにペン子が説明を入れる。

「ここはそこにいる源さん八八歳の六畳一間の寝室です。ご迷惑かと思っただですが、ほかに近くで行く場所がなくて」

その辺りの話はひとまず置いて、ミケはペン子に肩を借りながら隣の茶の間に移動した。

テレビに映し出されていたのはアレックの姿だった。

アレックは暴れ周り、人を傷つけ、建物を破壊し、大破させた車の上に乗っていた。

《どこに行っただ！ おのれ、絶対に探して血祭りに……ん、遠くに見えるのは、おそらく余を撮っているのだな》

アレックはカメラ目線になって叫ぶ。

《ペンギン女よ、すぐに余の前に姿を見せろ！》

「ヒナは行ってきます」

すぐに行こうとしたペン子の手をミケは握った。

「行くな。ここにいてくれ」

「ごめんなさい。綾織さんに止められてもヒナは行かなくてはいけないのです」

ペン子はミケの手を優しく振り解いて行こうとした。

しかし、急にその身体が音を立てて倒れた。

それでもペン子は這って動こうとしたが、ペンギンスーツが動いてくれない。

「ごめんなさいペンさん。あなたに無理をさせてしまっ……。でもお願いだから動いてください」

遠くから聞こえてくるバイク音。

バァギーン！

窓ガラスを割って庭から紅いバイクに跨った白衣の女が入ってきた。

「発信器を辿ってきてあげたわよ可愛い教え子ちゃん」

ベルはすぐさまバイクを白衣のポケットにしまい、慌てず騒がず周りが呆気にとられている中、ペンギンスーツの状態を調べた。

「無理させちゃって、修理するのめんどくさいのよね。あーあ、仕方ないから直るまでこっち着てなさい」

そう言いながらベルは白衣のポケットから、ペンギンスーツを取り出した。

「じゃじゃ〜ん、PENGIN ペンギン SUI スワンよ。機動力はIIより断

然上よ」

イワトビペンギンタイプのペンギンスーツで、頭部の黄色い飾り羽根が印象的だ。

「ありがとうございますベルさん」

「まあモルモットの面倒を見るのもアフターサービスのうちね。はいはい、ネコとジジイはさっさとほかの部屋に行きなさい！」

ベルによってミケと源さんはケツを蹴られて隣の部屋までぶっ飛んだ。

そして、ミケはさらに瀕死に陥るのだった。

降りしきる雨の中、人の多い場所を狙ってか、アレックは駅前の広場にいた。

その場に真剣な眼差しをしたペン子が現れる。

「お待たせしました」

「逃げずに来たか、そのまま隠れていればよいものを」

「呼び出したのはあなたです。昔からヒナは呼び出されたら、なにがあるうと絶対にその場所に行きます」

「そこが地獄だとしてもか？」

おそらくアレックは地獄と呼べる場所に何度も行った……いや、その地獄を作り出した張本人だろう。

ペン子は深く頷く。

「はい、地獄でも、それ以上の場所でも、どこへでも」

「口で言うのは容易い」

「だからヒナは行動で示します」

「では死んでもらおう！」

獅子王剣が鞘から薙がれたと同時に衝撃波が趨る。

すぐにペン子はフリッパで顔を隠した。衝撃波を喰らったと同時に、数十センチ押されたがそこで耐え、抜けていった衝撃波が後ろにあった店を半壊させる。ペンギンスーツは無傷だった。

フリッパを下げて顔を見せたペン子。その表情は無機質だった。

こんな表情、ミケたちには見せたことがない。

「じつはヒナは頭にきています」

「それがどうした？」

「いけないと思いつつも感情を抑えられないヒナがいます。こんな自分が嫌いで嫌いで仕方がありません。だから変わるうと思つたのに、どうしてまた……」

震える声で、情緒が不安定になったペン子は、突然泣き出した。

「わたし昔からあまり泣かないのに……自分で覚えているだけなら本当に数えられるくらいしか泣いたことないのに……」

いつも笑顔だったペン子からは想像もできないほど、顔が崩れるほど泣きじゃくっていた。

アレックは長剣の切っ先を地面に滑らせながら疾走した。

「女々しい奴め！」

長剣が振り上げられた。

ペン子はフリッパーで防ぐも、今度は大きく後ろに吹き飛ばされ、閉められた商店のシャッターにぶつかつた。

ゆっくりと立ち上がり瓦礫の中から出て来るペン子。

「やっぱりだめ。どうしていいのかわからない。あなたを止めなくてはいけないのに」

「余を止めるには、余を殺すことだ」

「それはできません絶対に。できるなら傷を一つつけることすらしたくありません」

「偽善だな」

冷たい一言はペン子の胸まで届いた。

「……そうかもしれません。だって本当はあなたを憎いと思つてしまつたことがあるから。それが本当に嫌で、もうヒナはなにもできないかもしれないかもしれません」

「戦意喪失というわけか。余には関係のないことだが」

相手が武器を捨てようとも、はじめから武器など持つていなくても、煌帝アレックは相手を殺す。

長剣を構え直すアレック。

そこへ一台の紅いバイクが二人を乗せてやつて来た。

バイクから降りたミケは両膝に手を付きながらアレックを睨んだ。

「……ペン子に……手を出すな」

激しさを増す豪雨。遠くから雷音が聞こえる。

アレックは嗤っていた。

「立っているのもやつとではないか、この死に損ないがッ！」

「死に損ないついでに……ペン子は守らせて……もらうぞッ！」

しかし、叫ぶと同時にミケは地面に両手をついてしまった。

もうペン子はなにもできなかつた。ミケの姿を見た途端に崩れるように地面に座り、涙が止まらなくなつてしまつたのだ。その瞳はミケから伏せられていた。

「ミケちゃんに……こんな姿見られたくないのに、今の嫌な自分を……見られたくないのに……」

その言葉を聞いたミケの脳裏に“少女”の幻影がフラッシュユバツクした。

赤い靴の“少女”。

あの“少女”は赤い靴など履いていなかった。その足は血だらけだったのだ。

ミケは這ってでもペン子の元へ行こうとしていた。

「絶対に守ってやる……なにがあるうとな……昔にそれは決めたことだ」

しかし、ミケの躰は言うことを利かない。

そこへ差し伸べられる大きな手。

「我が息子よ、手を貸すか？」

「……親父」

「すまん、いろいろ手間取ったのだ」

ミケはバロンの手をがっしりと握った。

そのとき、ミケはある物を同時に握らされ受け取った。

開かれたミケ手のひらには、猫の眼に似た宝石に似た指環があった。

閉じられていた猫の眼が開くッ！

立ち上がったミケの白銀の髪が逆立ち、今までなかった長い尾が生え、やがて静寂と共にすべてが治まった。

バロンはその変化に気づいて再びこう言った。

「我が息子よ、手を貸すか？」

ミケは首を横に大きく振って見せた。

「いいや、オレの意地がある」

その変化にアレックも気づいていた。

「貴様が力を取り戻したところでなにも変わらん！」

アレックはミケではなく動けずにいるペン子に斬りかかろうとしていた。

疾走するアレックの前に突如ミケの残像が現れ、強烈な拳を頬で受け止めた。

血の混ざった唾が飛沫になって飛んだ。

口元を拭きながらよろめくアレック。

「なかなかのパンチだな」

「親父仕込みだ。本当は親父には女を優しくしろって言われてるんだけどな。てめえは別格だ」

「戦いに男も女も関係ない。余も女扱いされるのは虫唾が走る」

二人の会話を聞いていたバロンは顎を外していた。

「なんとあるまじき、あやつお嬢さんだったのかッ！（ボッコボコにしてしまった）」

シヨックを受けまくるバロンだが、後悔先に立たずである。

拳を鳴らすミケ。

「本気で行くぞ」

「元より余は本気だ」

速い！

互いに凄まじき速さであったが、ミケのほうが勝っていた。

アレックは為す術もなく全身に連打を浴びていた。

下からのパンチによってアレックの躰を宙に飛ばし、さらにミケは飛翔して上からアレックを地面に叩きつけた。

地べたに這い蹲るアレック。

「おのれ、このような屈辱はじめてだッ！ 余は、余は誰よりも強くなければならない。さもなければ残された道は死なのだッ！！」

剣を持つことも忘れたアレックが四つ足の獣のように飛びかかって来た。

ミケは赤子の手をひねるように、難なくアレックを殴り倒す。

再び地べたに這い蹲ることになってしまったアレック。

まるで四つ足の獣のようにしてアレックがゆっくりと立ち上がる。

「おのれおのれおのれーッ！」

ドグウンッ！

アレックの躰が大きく跳ねた。

「余は皇帝でなければならぬ！」

ドグウンツッ！

曇天を奔る稲妻の咆吼。

稲光を背にしたアレックの白銀の髪が波打つように揺れた。

その肢体に変化が訪れる。太ももに伝わる鮮血。全身を包み込む白銀の毛。鎧を破りながら骨格から何から変化していく。

それはアレックにとってではじめての超獣化であった。

巨大な牝獅子が覚醒おぼめた。

二階ほどの高さから緋の眼で見下す牝獅子。咆吼でミケを威嚇した。

刹那、ミケは巨大な前足によって大きく吹っ飛ばされていた。変身前のアレックを凌駕していたミケですら躲せなかったのだ。

ミケは全身を打撲したが、その痛みもすぐに治まっていた。

「今なら牛乳を飲まなくても変身できる気がするけど、オレはもう二度としない！」

そのミケの視線はぐったりとするペン子に向けられていた。

あえて超獣化はしない。おそらく今のミケであれば、完璧な超獣化を遂げられ、その力はアレックと同等か、それ以上の力を手に入るだろう。だがその道をミケは選ばなかった。

牝獅子は暴れ狂っていた。もはやミケやペン子など関係なく、破壊の限りを尽くす魔獣。ミケが少しずつ大切さを自覚しはじめた想い、世界が破滅させられようとしていた。

果たしてこの魔獣を止められるのか？

ミケがバロンに向かって叫ぶ。

「親父、やっぱ手貸してくれ！」

「二本だけならよいぞ。作戦はあるのか？」

「ない！」

言い切ってしまうほど切迫した状況だった。

バロンが手のひらの上に拳を叩く。

「尻尾を切るといふのはどうだ？ 尻尾がなかったおまえはこんな巨大な獣に変身したことはないぞ。ただ指環がなく力が足りんかったという可能性もあるが」

「だったら指環だ、指環さえなくなれば体力が激減するはずだ……違う、指環の力を使えばアレックがオレにしたように力を吸い取れるかもしれない！」

ミケは素早い動きで牝獅子に近づいた。

「とは言ったものの、指環の使い方がわかんねえーよ！」

猫眼の指環が鳴いた。静かな輝きを放ったミケの指環がなにを訴えている。

「行ける！」

指環の使い方はわからなかったが、漲る自信をミケは感じた。

凍てつく吹雪を口から吐く牝獅子。そこにミケの姿はない。ミケは驚異的な跳躍力で天高く飛翔していた。

牝獅子の毛にしがみついて振り落とされまいとするミケ。

「力を貸してくれオレの指環！」

ミケは牝獅子の背中を叩くように手のひらを押し当てた。そのまま腕ごと呑み込まれる感覚がした。力が、力が流れ込んで来る。

しかし、なんとという力だッ！

決壊したダムのごとく流れ込む力に耐えかねミケの躰が弾き飛ばされた。

地面に激しく叩きつけられるミケ。

「大丈夫か我が息子よ！」

すぐにバロンが肩を貸してミケを立ち上がらせた。

「クソッ、あいつの力が強すぎるんだ。指環だ、やっぱり奴の指環を先にどうにかしないと、オレの指環の力は使えない！」

ニアルマリンの指環はアルビノである彼らに力を与える。そのエネルギーを絶たなければ、いくら同じ指環で力を吸おうとしても無駄なのだ。

牝獅子は本能の赴くままに、その標的は小さきものに向けられた。

巨大な緋色の眼球に映し出されるペン子の姿。ただそこで静かにペン子は泣いていた。

鋭い爪がペン子に振り下ろされる！

「ペン子！」

叫ぶミケ。ここからでは間に合わない！

ドゴオオオオオン！！

突如、爆撃を受けた牝獅子。白銀の毛が焼け焦げ、剥き出しにされた皮膚が爛れ、倒れた巨躯を地面に激しく叩きつけ地響きを轟かせた。

なにが起きたのかわからなかった。

バロンが空を指差し叫ぶ。

「あれを見よ！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴオ……！！

厚い雲海の中から穂先が顔を覗かせ、まるで重苦しい行進曲を奏でるように巨大戦艦が光臨した。

拡声器を使った低い声が町中に木霊する。

《我が名は大魔王アーン、唯一にして絶対の支配者なり！》

巨大戦艦はミケたちの真上で停止した。

《この星は今ここにワン帝国の植民地とする。刃向かう者は容赦しない！》

その力を誇示するため、巨大戦艦から地獄の業火にも似た破壊光線が撃ち放たれた！

町を趨った光線は次々と建物を崩壊させ、数百メートルにも及ぶ焼け野原を海の向こうまで続かせた。

絶望的な光景だった。

傷つき血だらけになった牝獅子がよろめきながら立ち上がった。

雷音が響いた。

咆吼と共に牝獅子の口から凍てつく光線が放たれた。強烈な一撃を受けた巨大戦艦は傾くが、すぐに体制を整えて反撃した。

ミサイル弾の雨が牝獅子に降り注ぐ。

獣の絶叫があがる！

全身を赤黒く染めた牝獅子が轟音を立てながら倒れた。

《哀れなり、それが地獄の悪魔をも震え上がらせると謳われた白獅子の姿か。軍を引き連れずに単独でこの星に来たのが貴様の運の尽き、己の力を過信したな》

巨大戦艦から六機の小型宇宙船が飛び立った。

《ニヤアの煌帝を生け捕りにしろ。そして パンドラの箱 を無傷で捕らえるのだ！》

小型宇宙船が地に降り立つ。開いたハッチからマスクと防護服を装備した者ども飛び出し、巨大な牝獅子を取り囲み、さらにはペン子の元へ向かおうとしていた。

爆発の余波を受けていたミケは地べたに這い蹲りながら意識を取り戻した。

「クソツ、なんだあいつら……早くペン子のところに！」

足を引きずるミケは急いでペン子の元へ向かうが、ワンコ族の兵士のほうが早かった。

兵士たちのライフルが向けられた 彼らの行く手を阻むポチとパン子に。

素肌の胸に何重にも包帯を巻かれたポチは、パン子の肩を借りながら、ペン子を守るように自国の兵士たちの前に立ちはだかったのだ。

兵士たちが道を開けた。そこに現れる漆黒の甲冑で全身を包んだ大魔王アーロン。

仮面兜の中から重低音が響いた。

「暗黒公子ポチよ、なぜ我らの前に立ちはだかる？」

「大魔王アーロン様、目的が違うのではありませんか？」

「我が望みは全宇宙を支配することだ」

「ニヤース族を討ち果たし、母星アルニマを取り戻すのが我々の目的ではないのですか？ 我らは復讐のために立ち上がった筈だ。なぜこの星を支配し、さらにはそこにいるペンギンまで！」

「誇り高きワンコ族の騎士が叛乱をする気か！ 叛逆者を殺してしまえッ！」

兵士たちがライフルをポチに向けた。
そこへ現れるミケ。

「手を貸すぞポチ。つーかなんでパン子までいんだよ！」

「だってミケ様のことが心配だったから」

パン子は泣きそうな顔をしていた。だが今は泣かなかった。

アーロンはミケの姿を見て察したようだ。

「そやつがエロリック皇子か、寝返ったのだなポチ！」

「寝返ったつもりなど毛頭ない。だが騎士が仕えるのは正義、道を誤った暴君を正すのもその勤め！」

傷ついた躰に鞭を打ってポチが大剣を振り回す。

兵士の持つライフルを次々と切り落とすポチ。ミケも兵士たちを殴り倒していった。怯む兵士たち、地面を激しく叩く雨音に掻き消されるアーロンの喚き声。

このまま行けばミケたちに道が開けそうだった。

だがしかし！

兵士たちはミケとポチの隙を突いてペン子とパン子を人質に取ったのだ。

アーロンが怒鳴る！

「抵抗をやめるのだ、そのパンダを殺すぞ！」

後ろから羽交い締めにされたパン子は、口を塞がれながらなにか喚こうとしていた。

「（ごめんなさいミケ様）」

ミケとパン子は動きを止めるほかなかった。すぐに二人を拘束する兵士たち。

勝ち誇った顔をするアーロン。

「なかなかの余興であった。それではファイナレを飾るとしよう」

アーロンは死んだように無表情なペン子に近づきながら、アラベスク模様に似た装飾をされた 銀の鍵 を取り出した。

兵士たちがペン子のきぐるみを脱がせる。
露わにされたその躰。

スクール水着に包まれたその躰には無数の傷痕があった。おそろくどれも古いもの。

切られた痕、火傷の痕、縫った痕やみみず腫れがそのまま残った痕。

どんな痛ましい拷問を受けたのかと思うような、見るに堪えない傷痕ばかりであった。

決して人前では脱がないペンギンのきぐるみ。

すべてはおそらくこの傷痕を隠すため。

アローンは 銀の鍵 をペン子の心臓に突き刺した。

剥き出しにされたペン子の眼。

叫び声があがった、それはアローンの悲痛な絶叫であった。

「ギヤアアアアッ 吸い込まれるーッ！」

アローンの躰がひしゃげながら限りなく細くなり、蜷局を巻きながらペン子の躰の内に吸い込まれてしまった。

一瞬なにが起こったか理解できなかったが、その理解の先には恐怖があった。

アローンの近くにいた兵士も主君と同じようにペン子の躰に呑まれる。

苦悶に満ちた叫び声を背にしながら、兵士たちがミケたちを置いて逃げていく。

マントを翻しながらバロンが現れた。

「いかん、あの封印は絶対に解いてはならんだ。逃げるぞ、いや逃げ切れん！」

バロンは呆然と立ち尽くすミケの手を引き、さらにパン子とポチも自分の元へ引き寄せた。

闇 が、ペン子から流れ出す 闇 が、すべてを呑み込み浸食していく。

その 闇 はまるで生あるモノのように、悲鳴をあげ、泣き叫び、

嗤いながら世界を呑み込む。

Baron はステッキで魔法陣を宙に描く。

「一世代の偉大なる奇術を　　ッ！」

闇　　がすべてを呑み込んだ。

辺りにあった建物も逃げ惑う兵士たちも、天にあった巨大戦艦まで、何もかも何もかも　　闇　　が丸呑みにした。

第10話「幸せペンギンは空を飛ぶ」

.....。

ついに パンドラの箱 は開かれ、厄災が世界に飛び出した。世界各地で異常気象による自然災害が起き、急に犯罪が増加し、人々はいがみ合い、憎しみが溢れ、悲嘆がいつまでも木霊した。しかし、彼らは絶望しなかった。

「オレが絶対にペン子を助けてみせる！」

ミケはペン子を救うことを決意していた。なにがあるうとこの想いは変わらない。

傷だらけのポチも同じ気持ちだった。

「貴様だけ格好の良いことをさせてたまるか。もちろん俺もいくぞ」「ケガ人はすつこんでろよ」

「怪我など理由にならん。魂が朽ち果てようとも騎士は姫を守る！」横から女性の声が割り込んできた。

「くっさ〜」

柿ピーをつまみにビールを飲んでいるベルだった。

「アタクシの神聖な研究室を臭いセリフで穢さない頂戴。てゆーか、アナタたちなんでここにいるのよ？」

ベルの視線の先にはミケ、ポチ、パン子、バロンがいた。

バロンは紳士らしく紅茶を飲みながら、無法者らしく勝手にくつろぎながらベルに視線を滑らせた。

「簡単に説明させてもらおうとだな、ゲート を開いたらここに出たというわけだ」

「なるほどね、歪み がある場所は出口になりやすいものねえん」凄まじい理解力だった。状況を瞬時に把握したようだ。

パン子はひとり部屋の隅に立っていた。

「（このままペンギンがいなくなったらミケ様はアタシのもの）」

頭を過ぎった黒い考え。

それを聞いてしまったミケはパン子に平手打ちをしようと近づいたが、その足は途中で止まった。

「（でも本当はあの子がいなくなったら悲しい。だってあの子バカみたいにアタシにも優しくくて、みんなからも好かれて、だからミケ様を取られそうで嫉妬して。本当はごめんねって言いたいのに、だって本当はパンダなんかよりペンギンのほうが好きなんだもん）」
いつも空回りしてばかりだった。傍目から見れば酷い子に見えるが、それはミケを一途に思い、周りが見えなくなっていただけ。

それはミケにもわかっていた。

「（オレのせいなのかもな、パン子を暴走させてるのは）」
ミケはこっさりパン子を見つめていた目を伏せた。

少し離れたところにいたパン子が近づいてきた。

「アタシは待つてる（だってきつと嫌われてるから、アタシは行かないほうがいい）」

そう言っただけパン子は部屋を飛び出して行ってしまった。その背中にミケは手を伸ばすが、追いかけることはできなかった。

ミケが別の場所に視線を移すと、壁に備え付けられた巨大モニターが目に入った。

そこには荒果てた町と、その中心にある漆黒のドームが映し出されていた。漆黒のドームは 闇 だった。泥が流動するように動き、徐々にその浸食範囲を広げていく。

おそらくあの中心にペン子がいる。

映像を見るバロンの表情は重々しかった。

「（このような結果になるとはな、使い方を誤った末路だ）」
ミケがバロンに詰め寄る。

「親父、あれがなんだか知ってるんだろ？ つーか、なんで知ってるんだよ」

「仕方あるまい。我が輩の偉大なる奇術の冒険譚を披露しよう」

「話は簡潔にしるよ」

壮大な物語になる前に牽制した。

バロンは立ち上がり、両手を広げ話しはじめた。

「あれは我が輩が宇宙の命運をかけて戦った時のことだ」

「（またはじまった。本人がマジだからどこまでがウソなのかわかんねーよ。絶対に誇大妄想だと思ってたのに、本当に変な魔法使いやがったし）」

ミケはバロンの奇術とやらをずっと信じていなかったが、この場所にミケたちを瞬間移送させたのは、そのバロンの奇術だった。

「我が息子が簡潔にしろと言ったので短く話すが、パンドラの箱という奇術的な秘宝を手に入れた我が輩は多くの敵に狙われた。

あの箱の中身は宇宙法則を覆すほどのモノが入っておるらしいからな。おそらくそのせいで妻もさらわれたのだろう。

そんなわけで我が輩はその力を使って、とある“少女”を救ったというわけだ」

見事に端折ったぞ！

いくつかの疑問がミケにはあったが、ただ一つハッキリと確信したことは、

「今回の騒動は親父が原因かッ！」

胸ぐらをミケにつかまれながらバロンは首を横に振った。

「確かにあの“少女”の内に秘宝を入れたのは我が輩だが、“少女”の命を助ける手っ取り早い方法がそれだったのだ。決して楽がしなかったわけではないぞッ！」

「親父とペン子どういふ関係なんだよ！ 命を救ったってなんだよ！」

「それは本人に直接お前が聞くのだ。我が輩は教えてやらんもんね！」

逃げるバロン。

すぐにミケを追いかけようとしたが、モニターを見ていたポチが驚いた声をあげる。

「あれを見る！」

闇 のドームのすぐ脇に人影が倒れている。
さらにドームからなにかが吐き出された。
モニターが倒れる人にズームされる。
裸の少女 アレックだった。

静かな町、雨の音だけが響いている。

アレックのいた場所に急いだミケとポチ。

しかし、そこはすでに 闇 に呑まれたあとだった。

闇 の広がる勢いは小康状態に入ったのか、あまり動いていないように見えるが、またいつ動き出すかわからない。警察によつて非常線が張られ、住民たちの避難が行われているが、彼らはこれがいったい何なのか知るよしもない。

ポチが辺りを嗅いだ。

「こつちだ、奴の臭いがする」

そのままポチに連れられて移動すると、シャッターの閉められた店の軒下で、蹲っているアレックの姿を発見した。

アレックは目を開いているにも関わらずミケたちに気づかない様子で、瞬きもせず身体の芯が震えている。その顔は恐怖に引き攣っていた。

ずっとアレックに怒りを覚えていたミケだったが、今のアレックに殴りかかるような気はまったく起こらなかった。そこにいたのは“ なにか ”に怯えるただの少女。

ミケは自分の上着をアレックの背中に掛け、その場にしゃがみ込んだ。

「なにがあつたんだ？」

「……………」

アレックは答えず地面を見つめながら、その手はミケの袖を掴んでいた。震えがミケに伝わってくる。その震えは決して寒さのせいではないことがわかる。

ミケはポチに顔を向けた。

「服とか探して来いよ、毛布でもなんでもいから」

「誇りある騎士は泥棒のような真似はしない。それに俺を使いつ走りにするな」

「探して来いよ」

「自分で行け……ん、なんだ？」

ポチの視線の先に雨に濡れて歩くチワワがいた。

「あああつ、まさかアーロン様の超獣化したお姿かッ！」

慌てたポチは駆け出し、それに気づいたチワワは驚いたようすで逃げ出した。そのままポチはチワワを追って姿を消してしまった。

ミケは最初からポチなどいなかったことにした。

震えるアレックを前にしてミケはどうしていいかわからなかったが、自分がそうされたときのことを思いだして優しく抱きしめた。

「（オレはこいつがどんな人生を歩んできたか知らない。オレの知っているこいつは周りを巻き込んで酷いことをしたこと、オレのことが大嫌いだってこと、そしてペン子の命を奪おうとしたことだ。オレのことが嫌いなのは別にいい、でもほかのことは絶対に許せない）」

許せないが、今こうして抱きしめている。

「（妹）」

その言葉がミケの脳裏を過ぎった。

今までずっと家族と呼べる存在はバロンだけだった。だが、ミケは孤独だった。周りがミケを孤立させたのか、それともミケが自ら周りを避けたのか……。

ミケは自分と同じようなアレックの白い肌、白銀の髪、緋色の瞳そして猫の耳を見つめた。

それは無意識なのかアレックがミケにしがみついた。

まだ幼い身体、幼い少女なのだ。

「（なのになんで……どうしてこうなったんだ）」

アレックのやったことは許せなかったが、その背景になにがあったのか考えると、単純に怒りをアレックだけにぶつけていいのか。

ミケはペン子の優しさを思い出していた。

急にアレックの身体がビクツと動いた。そして震える奇声をあげた。

「ひゃああああああっ！」

「どうしたんだ!？」

「怖い……怖い……なんと……怖ろしい……」

アレックの眼は剥き出しにされ、開いたままの口からは涎が垂れていた。

ミケは涎を自分の袖で拭いてやり、とにかくアレックの幼い体を抱きしめた。

なにかアレックは呟いている。

「余は絶対でなければ……捨てられる……母も殺される……あの中には絶望があった」

「あの中?」

「余の絶望……それ以外の絶望……有りと有りゆる……宇宙に存在する……絶望」

「なんのことを言ってるんだ?」

「あの女は……絶望の中に……あの女の絶望も……いくつもある絶望……一つを具現化した象徴……宇宙に存在する絶望の一つ……余はもう駄目だ」

「しっかりしろ!」

ミケの声が届いているのかわからない。アレックは焦点の合わぬ眼で、独り言のように呟いているだけだった。

しかし、その仄暗い瞳がミケの瞳を見た。

「兄上……指環の眼を閉じる……余はそうやって……還った」

「あの中から還った? 中に入るなら指環の力を……サトリの能力を閉じるってことか?」

「……眼を閉じれば……すべてを拒絶できる……それで……」

突然、ミケの体がアレックによって押し飛ばされた。

雨の地面に尻と手をついてしまったミケ。

その手が見る見るうちに朱い海に沈んでいく。

ミケはその場を動けず声すら出せず、その光景を見てしまった。
ワンコ族の兵士の持つ剣がアレックの腹を貫いていた。

アレックは最期の力を振り絞って剣を奪い取り、渾身の突きで兵士の心臓を貫いた。

最初に兵士が倒れた。

次にアレックがよろめいた。

「これも……また……余の絶望の……一つであった」

静かにアレックが崩れ落ちた。

時間の動いたミケがすぐにアレックを抱きかかえた。

「アレック！」

すでにアレックは息絶えていた。

その死に様は無惨に、恐怖に歪んだ表情をしていたのだった。

ミケは最後までアレックを許せなかった。

しかし、その死に絶望した。

ミケは雨水の来ない場所にアレックを寝かせ、その体に自分の上着を掛けた。

その場に死したアレックを残していくことは躊躇われたが、これ以上の絶望を引き起こさないためにも、一刻も早くペン子の元へ行かなくてはならなかった。

ミケは歩き出す、何よりも暗い漆黒の 闇 の中へ。

閉ざされた 闇 の世界。

その場所は酷く寒く、どこまでも闇色が広がっていた。

自分の身体さえも見えず、進んでいるのか、戻っているのか、自分がどこに向かって歩いているのか、方向感覚を狂わされる。

ミケは指環の 眼 を閉じていたが、その声はどこからか聞こえて来る。

叫び声、泣き声、嗤い声……ほかにもさまざまな絶望した声が聞こえて来た。

もしもここで 眼 を開いたら、これ以上の恐怖が襲って来るの
だろうか？

この場所でアレックはいつたい何を見たのか？

ミケは極力考えないようにした。

ここの寒さは悪寒だ。たしかに気温そのものも低いような気がするが、それよりも寒さは心にくる。少しでも気を抜けば、なにかが
躰を蝕んで来そうなの。

歩いてても歩いてても暗闇。時間の感覚すら狂っている。

ミケは決して足を止めなかった。

自分がどこを歩いているのかわからなかったが、ペン子の元へ辿
り着けると信じて歩いた。

首につけた大きな鈴を握り締めるミケ。

いつか出逢った“少女”にもらった大切な鈴。

あの日の後悔をもう忘れない。

きつと忘れようとしていたのだ。記憶は月日が流れあやふやにな
り、大切なことを忘却させた。けれど、思い出さなければいけない
大切なこと。

まだ残された大切なものがあるはずだった。

鈴がひとりでに鳴った。

凜と響いたその音色と共に、黄金の鈴がほのかに輝きはじめた。

ほんの少しだが世界に色が灯った。

今にも 闇 に呑み込まれてしまいそうなのその輝き。

どんなに小さな輝きでも、それはミケに勇気を与えた。

その勇気でミケは今こそあの“少女”に言わなければならなかつ
た。

「ごめん」

言葉は波紋のように広がった。

そして、ミケの目の前に突然現れた大きな卵。

ミケはその卵に触れてみた。酷く冷たく、閉ざされ、ミケを拒否
している。

この卵の中に“少女”がいるとミケは確信した。

「お願いだからこの中から出てきてくれ！」

その叫びは刹那に 闇 の中へ呑み込まれる。

卵がさらに冷たくなつたように感じる。

凍り付いていく卵。さらに閉ざそうとしている。拒絶しているのだ。

なにをするべきかミケはわかった。

指環についた宝石が鳴いた。

そして、開かれる猫の 眼 。

嗚呼、心の声がミケの内へと流れ込んで来る。

わたしは望まれない子供でした。

きつと母も仕方がなくわたしを生んだのでしよう。

父はわたしが生まれて間もなくして死に、未婚の母とわたしを置き去りにしました。

おそらく母はわたしを仕方なく育てることにしたのでしよう。

母は自由奔放な人でした。

そのせいなのか、わたしのことを忘れてしまつたり、故意にないことにしていたような気がします。

幼いわたしを独り置いて出かけ、食べ物を与えることも忘れました。思い出したようにわたしの世話をする母の顔は、とても嫌そうだったことを覚えています。

ある日、わたしの生活に知らないおじさんが入ってきました。

おじさんはわたしのことをよく叩いたり、踏んづけたりして遊ぶ人でした。

それからしばらくして、わたしに弟ができました。

生まれたばかりの弟は神に祝福され、誰からも可愛がられる天使でした。

しかしそれからというもの、母も知らないおじさんも、わたしを見るたびに暴力を振るうようになりました。なぜそのような仕打ち

を受けなくてはならないのか、わたしにはわかりませんでした。ただわかることは、弟が生まれてからそうなってしまったということ。

だからわたしは思いました。

弟なんていなくなってしまうばいいのに。

残酷な願いでした。

その願いが天に届いたのか、しばらくして弟が高熱を出して寝込んでしまいました。

本当に苦しそうな顔をする弟の姿を見て、わたしは酷く胸が苦しくなりました。

後悔したわたしは自分が死んで弟が助かるように願いました。数日して弟は元気を取り戻しましたが、わたしは死にませんでした。

代わりに死んだのは母でした。交通事故でした。

知らないおじさんの暴力は激しくなりました。

お腹を踏まれながら見た天井には、神様はいませんでした。神様はわたしを見ることすらしないのです。

わたしは許す限りおじさんの目から離れた場所に行き、おじさんが近くにいるときも、一言も発せずただ部屋の片隅で身を潜めました。

このまま姿が消えてしまえばいいと思いました。

だから殴られても蹴られても踏まれても、声すら出さないようにしました。そうしていれば自分が消えると信じていたのです。

やがておじさんに見向きもされなくなりました。

きっとわたしはいらぬ子になったのです。いらなくなるということが消えるということなのです。

誰からも必要とされていないことがわかりました。

そこにいれば嫌われてしまう。

公園で遊んでいても、みんなわたしのことを嫌って近づいてきません。

そんなときでした　わたしの前にミケちゃんが現れたのは。

ミケちゃんはいっぱい遊んでくれました。

ミケちゃんはわたしのことキラリじゃないって、スキだって言うてくれました。

ひとからスキと言われたのは、始めてでした。心の中に温かい光を入れてもらったような気がしました。

あのとこの世界は、ミケちゃんとふたりだけの世界は、とても輝いて見えました。

わたしはミケちゃんがスキでした。

だからわたしの大切なものをプレゼントしようと思いました。光になるなにかを。

雨の日の公園にプレゼントを持って行きました。

けれどその日はいくら待ってもミケちゃんは来ませんでした。でも悲しくはありませんでした。だってミケちゃんを待っていることが楽しかったから。

次の日も雨が降っていました。わくわくしながら待っていると、ミケちゃんが来てくれました。わたしはうれしくて、ドキドキした気持ちでプレゼントをあげました。

でも……それは拒否されました。

なにがなんだかわかりませんでした。

ただとても悲しくて、わからないけど悲しくて、涙がいっぱい出ました。

きっとわたしのせいだと思いました。

ミケちゃんに嫌われたくなくて、ずっとその公園でミケちゃんが帰ってくるのを待っていました。だけどミケちゃんは来ませんでした。

夜になってもミケちゃんは来なくて、朝になってもミケちゃんは来なくて。

ずっと雨の中にいたわたしは、ついに倒れてしまいました。砂に埋もれて死んでいくんだなって思いました。

ミケちゃんにも嫌われて、ほかの誰からも嫌われて、いらぬ子なら死んでしまったほうがいいと思いました。

でもわたしは助かってしまいました。

わたしを助けてくれたのはミケちゃんと一緒にいた赤いおじさんでした。

赤いおじさんには感謝をしています。でも助かってしまったことは後悔することになりました。

わたしが助かってしまったことで、また代わりに殺してしまったのです。

いつものようにひとり外に出かけている間に、家は火事で焼けて中にいた弟とおじさんが死にました。おじさんのタバコの不始末が原因でした。

おじさんの死はちつとも悲しくありませんでした。けれど弟の死はとて辛く、この世界には神などいないと確信しました。だって弟は神様に祝福されていたはずなのです。

自分が死ぬ理由がなくなってしまったように感じました。だってわたしのことがいらなかったおじさんは死んでしまったのだから。

わたしは祖母に引き取られ暮らすことになりました。

しばらくの間は平穏で、きつとしあわせだったと思います。

でもいつしか祖母はわたしをいらぬ子として扱うようになりました。きつとわたしがいけなかったのです。

わたしは心を閉ざしていました。ミケちゃん以外には心を開いたことがありませんでした。それが同年代の子供たちには異質だったのかもしれない。

学校ではいじめや裏切り、ほかの場所でもやってもいけないことで怒られたりしました。

世界はわたしの敵なのだと思います。

それまでずっと逃げたり耐えてして来ましたが、わたしはそれをやめました。

その後、わたしは施設で過ごすことになりました。

たくさんの敵とも戦いました。

けれど、わたしはいつも悲しかった。悲しかったというより、虚しかったのでしよう。

そんなとき、わたしは彼女と出会いました。

はじめのうちは鬱陶しくも思いましたが、いつの間にかわたしは彼女のことが気になりはじめました。そんな矢先、彼女は死にました。

理由はわからないけれど、きっとわたしが殺してしまったのだと思います。

わたしの代わりにいつも人が死ぬのです。だから死のうと決意しました。

でもやはりわたしは助かってしまいました。

わたしを助けてくれた人が、誰なのか一目でわかりました。赤いおじさんがわたしを助けてくれたのです。

あのときわたしは光が見えたような気がします。でもわたしは生きてはいけません。

そんなわたしに赤いおじさんはミケちゃんの話をしてくれました。光が強くなつたような気がしました。

過去に見た光。

わたしは死にたくないと思いました。

そして、少しでも光に近づきたいと思いました。

温かい光。

その光をつかむには、自分が優しく温かい存在にならなければいけないと思いました。そうしなければ光には触れられるはずもないのです。

わたしは必死になって光を演じようと思いました。

暗い部分はすべて胸の中に押し込めて、押し込めて、押し込めて。やがてわたしは過去を忘却しました。

わたしは生まれ変わったのです。

でも、それは違いました。

押し込めば押し込むほど反発は強くなります。その反発に気づかなかった、いえ忘れようと自然にしていたのでしょう。

なのに周りはそれを思い起こさせるのです。

しばらく忘れていた恐怖という感情。
わたしはあの子のようにはなれなくて、うらやましくて。
やっぱりわたしはだめでした。

みんながわたしの大切なものを奪おうとして、怖くて。
わたしはやっぱりだめなんです。
光には手が届かない。

そこに光は見えているのに、こんなに手を伸ばしているのに、
なんで……。

ミケちゃん、わたしミケちゃんのことをスキなの！

“少女”が伸ばした手を誰かが優しくつつかんだ。

向かい合って手を繋いでいる二人。

目の前に現れたミケを見て“少女”は驚いた顔をしている。

「ミケちゃん！」

「ごめん、そしてありがとう」

過去に忘れてきたその言葉を時を越えて言うことができた。

そして、もうひとつの大切な忘れもの。

「今でもクライじゃないよ、スキだよ……“のぞみ”のこと」

ミケは“のぞみ”のおでこにキスをした。

やっと名前を呼んでもらえた“のぞみ”は顔を真っ赤にしながら
微笑んだ。

“少女”の本当の名前は天野希望^{あまののぞみ}。

彼女は決して望まれない子供ではなかったのだ。

歡喜の鈴^{ベル}が鳴り響く。

辺りは黄金色に輝きはじめ、咲き誇る花々の中で祝福の歌う猫たちと、青い空を飛び交うペンギンの群れ。

そして、世界は温かな光に包まれた。

エピソード

希望の未来が幕を開けようとしていた。

瞳を開けたミケの横には、きぐるみを着たいつものペン子がいた。そして、二人は手を繋いでペンギンの水槽の前に立っていたのだ。つた。

ミケは少し顔を赤くしながらも、その手を強く握った。もう絶対に振り払ったりしない。

しかし、そんな二人の中を引き裂く出来事がッ！

「ちよつとおっつ、なんで手なんか繋いでんの！」

パン子は強引に二人の間に割って入って、ミケとペン子の手を切り離すと、自分がミケと手を繋いで走り出した。

「ミケ様、イルカショーがはじまっちゃいますよ。サンドラちゃんも早く！」

パン子が振り返った先をミケも見た。

そこにはポチの背に隠れて恥ずかしそうにする少女の姿が？

「なんで!？」

ミケは驚きの声をあげた。

そこにはなんと可愛らしい女の子の洋服を着たアレックが立っていたのだ。

「(どういうことだよ!?)」

なにがなんだかわからないミケに、誰かの心の声が聞こえた。

「(がぺくん、どうなってるのおっつ!?)」

そう、それはペン子の声だった。

ミケは自分と同じような顔をするペン子と顔を見合わせた。それから話したいことがあって口を開こうとしたが、パン子にグイグイ引っ張られてペン子と引き離されていく。

パン子は突然途中で立ち止まって、海のほうを指差した。

「あ、赤い風船が飛んでるー」

同じ方向を見たミケはハツとした。

まったく同じ光景を見たことがあった。けれどアレックはそこにいる。しかも少女の姿をして。

そのあとミケは頭をグルグルさせながら、流されるままに時間を過ごしてしまった。

そして、夕方になって。

砂浜に置かれている宇宙船の前で、ポチとアレックが帰るといいう話になっていた。

ポチは自分の背中に隠れているアレックを前に押し出した。

「ほらサンドラ皇女、ちゃんと挨拶しなくていいのですか？」

「……お兄様、さようなら」

モジモジしながらアレックは言うと、またすぐにポチの後ろに隠れてしまった。

ミケが怪訝な顔をしていると、ポチが少し怒ったような顔で、

「まだ怒っているのかエロリック皇子？ サンドラ皇女は貴方にどうしても会いたくて単身地球に来てしまったのだ。ニヤー帝国が大騒ぎになったのは事実だが、兄らしくもっと妹に優しく接したらどうだ？」

「あ、ああ。そうだな……じゃあ、またなサンドラ（ってなんなんだよこの展開！）」

「俺が妹君のことをニヤー帝国まで無事に送り届けるから心配するなエロリック。それにしても、地球に俺の宇宙船を直せる者がいて助かった。サンドラ皇女が乗ってきた宇宙船は一人乗りだったからな」

やっぱりミケは理解できなかった。そこでこんな質問をした。

「あのさ、なんでポチは地球にいの？」

「なにを言っているのだ今さら？ 俺の目的は行方不明になった貴様を見つげ出し、ニヤー帝国に連れて帰ることだろう。それなのに貴様がどうしても帰らないというから、俺はあの手この手を尽くして、その度に貴様に酷い目に遭わされたのだぞ！」

この急展開にキミたちはちゃんとついて来られているか？
さあ、キミたちはこれから、さらなる偉大なる歴史的瞬間を目の
当たりにすることになるのだッ！

夕焼けの空をよくある円盤形UFOがゆらゆら飛んでくる。
真面目な顔にパンダマン。

「お別れだうさぎ。母さんや弟たちのことを頼んだぞ！」
宙で停止したUFOから光の柱が地面に向かって伸びた。

この光の柱に吸い上げられ昇っていくパンダマン　　式号！
こっちにいるパンダマンではなく、ちよつと遠くにいたパンダマ
ン式号をUFOは吸い上げていた。

吸い上げられていくパンダマン式号に向かって黒服の男たちがな
にか叫んでいる。

「総理！　総理大臣！」

光の柱を昇るパンダマン式号の表情は神々しく、とても穏やかで
至福に満ちあふれていたのだった。

そして、パンダマン式号はUFOに乗って宇宙の彼方へ飛び去っ
た。

パン子は式号の乗ったUFOを追って走り出す。

「お父さんがお父さんが連れて行かれちゃう！」

隣にいるパンダマンは華麗にスルー。

ペン子が大きくうなずいた。

「うん、山田さんのお父さんを助けに行きましょう。ほらミケちゃ
ん、早くヒナの背中に乗って！」

「え、えええ！？」

ミケはとにかくペン子の背中に乗った。

するとペン子が空を飛んだ。

驚くミケ。

「空飛べるのかよ！？」

「うん、なんか飛べるような気がしたら、本当に飛べちゃった」
輝くペン子の笑顔。その手にはクルクルキャンディ。

「ミケちゃんも食べる？」

「うん、のぞみがくれるモノならなんでも」

「棒付きキャンディはなかよしのしるしなんだよ」

ミケを背中に乗せたペン子は自由に空を泳ぎ、ハートのこもったキャンディを世界中にばらまいた。

砂浜に残されたパン子は、ミケとペン子がUFOとは違う空に消えたと知って叫ぶ。

「ペンギンに出し抜かれたーっ！」

そして、その傍らではパンダマンが砂浜に文字を書いていた。

『これで終わらせてたまるかーっ！』

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4093f/>

ぺんにゃん

2010年10月8日14時31分発行